国道８号線長浜バイパス

関連遺跡調査報告書

Ⅱ

1973.3

滋賀県教育委員会

国道８号線長浜バイパス

関連遺跡調査報告書

Ⅱ

1973.3

滋賀県教育委員会

210
M
61

序

滋賀県教育委員会では、国道８号線長浜バイパスの建設に先立って、これの敷地にかかる遺跡の発掘調査を昭和45年度より３カ年計画で実施してきたが、昭和47年度をもって当初予定した分をすべて完了することができた。今日までその結果の一部については逐次報告したところであるが、このたび昭和46年度に実施した川崎南遺跡、勝町遺跡、鴨田遺跡の発掘調査の結果を報告するはこびとなった。遺跡の保存と開発との関係が大きな社会問題となりながらも、これの決定的な解決策を見いだすことのできない現在、こうした貴重な遺跡が道路の下に埋もれてしまうことに忍びがたいものがある。しかし、各人の文化財に対する正しい認識が、将来必ずやこの問題を解決するものならば、本書がその認識の一助となることを祈ってやまない。

最後に発掘調査および整理業務等に日夜努力いただいた調査員の方々ならびに地元関係者に深謝いたしたい。

昭和48年３月

滋賀県教育委員会

教育長　柳原太郎

例　言

1. 本書は、昭和46年度において滋賀県が建設省近畿地方建設局からの委託を受けて実施した一般国道8号線長浜バイパス関係遺跡発掘調査の報告である。
2. この調査は、滋賀県が長浜市所在川崎南遺跡・勝町遺跡を『長浜バイパス北方遺跡調査団（団長　大江　令）』に、そして同市鴨田遺跡を『財団法人滋賀県文化財保護協会（理事長　野崎貞一）』に委託して実施したものである。
3. 本調査は、滋賀県教育委員会事務局文化財保護課主事川那辺正雄、同課技師中谷雅治が指導した。
4. 本書報文のうち川崎南・勝町両遺跡については長浜バイパス北方遺跡調査団が、また、鴨田遺跡他については中谷および福尾・大橋・別所・松浦・森脇・力武がそれぞれ分担して執筆した。
5. 調査および整理業務参加者は次のとおりである。

長浜バイパス北方遺跡調査団

団長　大江　令

調査員　松田典夫、田口昭二、古川庄作、鹿野　健

補助員　河崎顕司、川合正博、中山久代、松本顕徳他長浜市教育委員会職員。

財団法人滋賀県文化財保護協会

調査員　鬼柳　彰、谷口義介、青野　荘、福屋貴旭、大橋信弥、別所健二、中川真澄。

補助員　深田仁美、力武律子、森脇　広、松浦俊和、吉安成三郎、奥野優子、長田陽子、磯部まさ子、静永千秋。

なお、鴨田遺跡出土の木器類の整理、報告文は平安博物館の田中勝弘氏をわずらわした他に、多くの方々のご助力とご教示を得ることができた。

目　次

はじめに …… 1

Ⅰ　遺跡の位置と環境 …… 2

1　遺跡の位置と自然環境 …… 2

1）位　置 …… 2

2）自然環境 …… 2

(1) 概観　(2) 湖北平野――余呉川流域、高時川流域、姉川流域、天野川流域

2　歴史的環境 …… 6

Ⅱ　鴨田遺跡 …… 11

1　調査経過 …… 11

2　遺　構 …… 15

1）溝 …… 15

溝1、溝2、溝3、溝6、溝7、溝8、溝12、溝15

2）溝A（沼沢地） …… 19

3）ピット …… 21

4）地割り畦 …… 21

3　遺　物 …… 21

1）土　器 …… 21

2）石　器 …… 42

3）木　器 …… 44

4）その他 …… 48

4　小　結 …… 50

Ⅲ　川崎南遺跡 …… 53

1　遺跡の立地と地形 …… 53

2　発掘経過と層序 …… 53

3　遺　構 …… 54

1）溝状遺構 …… 54

2) ピット……55
4 遺 物……55
1) 土器および陶器……55
土師式土器、須恵器、施釉陶器、山茶椀系陶器、その他の陶器類
2) 石 器……57
3) 自然遺物……58
5 結 語……58
Ⅳ 勝町遺跡……60
1 遺跡の立地と地形……60
2 発掘経過と層序……60
3 遺 構……61
4 遺 物……64
1) 土器および陶器……64
土師式土器、須恵器、施釉陶器、山茶椀系陶器、かわらけ、その他の陶器類
2) 石 器……70
3) 自然遺物……71
4) 木 器……71
下駄、発火具、農具、その他
5 結 語……74

挿　図　目　次

第1図　発掘した遺跡の位置と付近の遺跡……3
第2図　湖北平野地形分類図……5
第3図　鴨田遺跡グリット設定図……12
第4図　鴨田遺跡遺構平面図……16
第5図　鴨田遺跡K地区C列東壁断面図……18
第6図　鴨田遺跡溝遺構断面図……20
第7図　鴨田遺跡出土の木器……46
第8図　鴨田遺跡出土の土器編年図(試案)……52
第9図　川崎南遺跡グリット設定図……54
第10図　川崎南遺跡遺構平面図……55
第11図　川崎南遺跡出土遺物……59
第12図　勝町遺跡グリット設定図……61
第13図　勝町遺跡土層断面図……62
第14図　勝町遺跡遺構実測図……63
第15図　勝町遺跡出土の甕と提瓶……66

図　版　目　次

図版　1　鴨田遺跡溝1出土土器実測図(1)
図版　2　鴨田遺跡溝1出土土器実測図(2)
図版　3　鴨田遺跡溝1・2・3出土土器実測図
図版　4　鴨田遺跡溝3・6出土土器実測図
図版　5　鴨田遺跡溝7出土土器実測図(1)
図版　6　鴨田遺跡溝7出土土器実測図(2)
図版　7　鴨田遺跡溝7出土土器実測図(3)
図版　8　鴨田遺跡溝8・12出土土器実測図
図版　9　鴨田遺跡溝12出土土器実測図(1)
図版　10　鴨田遺跡溝12出土土器実測図(2)
図版　11　鴨田遺跡溝12出土土器実測図(3)
図版　12　鴨田遺跡溝12出土土器実測図(4)
図版　13　鴨田遺跡溝12・15出土土器実測図
図版　14　鴨田遺跡溝A（沼沢地）出土土器実測図(1)
図版　15　鴨田遺跡溝A出土土器実測図(2)
図版　16　鴨田遺跡溝A出土土器実測図(3)
図版　17　鴨田遺跡溝A出土土器実測図(4)
図版　18　鴨田遺跡溝A出土土器実測図(5)
図版　19　鴨田遺跡溝A出土土器実測図(6)

図版 20 鴨田遺跡溝A出土土器実測図(7)
図版 21 鴨田遺跡溝A出土土器実測図(8)
図版 22 鴨田遺跡溝A出土土器実測図(9)
図版 23 鴨田遺跡溝Aピット1・2出土土器実測図
図版 24 鴨田遺跡溝1出土土器拓影
図版 25 鴨田遺跡溝12出土土器拓影
図版 26 鴨田遺跡溝15出土土器拓影
図版 27 鴨田遺跡溝A西第1地区出土土器拓影
図版 28 鴨田遺跡溝A第6地区出土土器拓影
図版 29 鴨田遺跡溝A西第5地区出土土器拓影
図版 30 鴨田遺跡溝A西第3地区出土土器拓影
図版 31 鴨田遺跡出土の砥石類
図版 32 鴨田遺跡出土の石器各種
図版 33 鴨田遺跡出土の木器類(1)
図版 34 鴨田遺跡出土の木器類(2)
図版 35 鴨田遺跡出土の木器類(3)
図版 36 鴨田遺跡出土の木器類(4)
図版 37 鴨田遺跡出土の各種遺物
図版 38 鴨田遺跡出土の古銭
図版 39 勝町遺跡出土土師式土器口縁部片
図版 40 勝町遺跡出土遺物
図版 41 勝町遺跡出土須恵器
図版 42 川崎南遺跡および勝町遺跡出土陶器拓影
図版 43 勝町遺跡出土陶器拓影
図版 44 川崎南遺跡・勝町遺跡石器・鉄器実測図
図版 45 勝町遺跡出土木器実測図(1)
図版 46 勝町遺跡出土木器実測図(2)
図版 47 勝町遺跡出土木器実測図(3)
図版 48 上、鴨田遺跡付近の景観
下、調査前の鴨田遺跡全景
図版 49 上、鴨田遺跡K地区東側第1区域
下、同地区西側第1区域
図版 50 上、鴨田遺跡K地区東側第2区域
下、同地区西側第2区域
図版 51 上、鴨田遺跡K地区東側第3区域
下、同地区西側第3区域
図版 52 上、鴨田遺跡K地区東側第4区域
下、同地区西側第4区域
図版 53 上、鴨田遺跡K地区東側第5区域
下、同地区西側第5区域
図版 54 上、鴨田遺跡T地区東側全景
下、同地区西側全景
図版 55 上、鴨田遺跡溝5遺存状況
下、鴨田遺跡溝1断面
図版 56 左、鴨田遺跡溝7
右、鴨田遺跡溝3
図版 57 上、鴨田遺跡溝8
下、鴨田遺跡溝12
図版 58 上、鴨田遺跡溝6・溝7
下、鴨田遺跡溝15

図版 59 上、鴨田遺跡地割畦・ピット
下、鴨田跡遺溝1内土器出土状況
図版 60 上、鴨田遺跡発掘状況
下、鴨田遺跡溝8内木材出土状況
図版 61 上・下、鴨田遺跡溝A(沼沢地)木材出土状況
図版 62 上、鴨田遺跡窪出土状態
下、鴨田遺跡溝A下駄出土状態
図版 63 上・下、鴨田遺跡土器類出土状態
図版 64 上・下、鴨田遺跡土器出土状態
図版 65 上、鴨田遺跡溝A鋼縁出土状態
下、鴨田遺跡木棺出土状態
図版 66 鴨田遺跡出土の土器(1)
図版 67 鴨田遺跡出土の土器(2)
図版 68 鴨田遺跡出土の土器(3)
図版 69 鴨田遺跡出土の土器(4)
図版 70 鴨田遺跡出土の土器(5)
図版 71 鴨田遺跡出土の土器(6)
図版 72 鴨田遺跡出土の土器(7)
図版 73 鴨田遺跡出土の土器(8)
図版 74 鴨田遺跡出土の土器(9)
図版 75 鴨田遺跡出土の土器(10)
図版 76 鴨田遺跡出土の土器(11)
図版 77 鴨田遺跡出土の土器(12)
図版 78 鴨田遺跡出土の土器(13)
図版 79 鴨田遺跡出土の土器(14)
図版 80 鴨田遺跡出土の土器(15)
図版 81 鴨田遺跡出土の土器(16)
図版 82 鴨田遺跡出土の土器(17)
図版 83 鴨田遺跡出土の土器(18)
図版 84 鴨田遺跡出土の土器(19)
図版 85 鴨田遺跡出土の土器(20)
図版 86 鴨田遺跡出土の土器(21)
図版 87 鴨田遺跡出土の土器(22)
図版 88 鴨田遺跡出土の土器(23)
図版 89 鴨田遺跡出土の土器(24)
図版 90 鴨田遺跡出土の土器(25)
図版 91 鴨田遺跡出土の土器(26)
図版 92 鴨田遺跡出土の土器破片(1)
図版 93 鴨田遺跡出土の土器破片(2)
図版 94 鴨田遺跡出土の土器破片(3)
図版 95 鴨田遺跡出土の土器破片(4)
図版 96 鴨田遺跡出土の土器破片(5)
図版 97 鴨田遺跡出土の土器破片(6)
図版 98 鴨田遺跡出土の土器破片(7)
図版 99 鴨田遺跡出土の土器破片(8)
図版 100 鴨田遺跡出土の土器破片(9)
図版 101 鴨田遺跡出土の土器破片(10)
図版 102 鴨田遺跡出土の土器破片(11)
図版 103 鴨田遺跡出土の土器破片(12)
図版 104 鴨田遺跡出土の土器破片(13)
図版 105 鴨田遺跡出土の土器破片(14)
図版 106 上、鴨田遺跡出土の条痕のある砥石
下、鴨田遺跡出土の砥石類
図版 107 上・下、鴨田遺跡出土の各種石斧類
図版 108 上、鴨田遺跡出土の打製石鏃
下、鴨田遺跡出土の磨製石鏃と銅製鏃

図版 109　上、鴨田遺跡出土の各種石器類
　　下、鴨田遺跡出土の凹石と敲石
図版 110　上、鴨田遺跡出土の木製刀等
　　下、鴨田遺跡出土の大足・下駄・曲物等
図版 111　上・下、鴨田遺跡出土の木製品(1)
図版 112　上・下、鴨田遺跡出土の木製品(2)
図版 113　上・下、鴨田遺跡出土の木製品(3)
図版 114　上、鴨田遺跡出土の玉類等
　　下、鴨田遺跡出土の土製紡錘車と丸玉
図版 115　上、鴨田遺跡出土の古銭類
　　下、鴨田遺跡出土の果実種
図版 116　上、発掘調査前の川崎南遺跡
　　下、発掘調査後の川崎南遺跡
図版 117　上、川崎南遺跡の層位
　　下、左：川崎南遺跡出土の須恵器長頸壺
　　右上：同鉢　右下：同大平鉢
図版 118　上、発掘後の勝町遺跡
　　下、勝町遺跡の発掘状況
図版 119　上、勝町遺跡の層位
　　下、勝町遺跡における柱穴存部と須恵器甕片群
図版 120　左、勝町遺跡における溝状遺構
　　右、勝町遺跡における椀・下駄・網漁具柄出土状態
図版 121　上、勝町遺跡出土の高杯および釜形土器破片
　　下、勝町遺跡出土の馘把手類
図版 122　上、勝町遺跡出土のつまみ付杯蓋（側面と平面）
　　下、勝町遺跡出土の須恵器甕と提瓶
図版 123　上・中・下、勝町遺跡出土の杯・蓋類
図版 124　上、勝町遺跡出土の山茶椀高台部
　　下、勝町遺跡出土のかわらけ
図版 125　上、勝町遺跡出土のかわらけ
　　下、勝町遺跡出土の鉢口縁部
図版 126　上、勝町遺跡出土の摺鉢及片口鉢片
　　下、勝町遺跡出土の甕口縁部
図版 127　上、勝町遺跡出土の古瀬戸系陶器片
　　下、右：勝町遺跡出土の臼状木製品　左：同農具
図版 128　上、勝町遺跡出土の田下駄と駒下駄
　　下、勝町遺跡出土の高下駄

はじめに

いろいろな開発工事に先立って発掘調査される遺跡の数は，全国的に年々増加の一途をたどっているが，滋賀県においても例外でない。本県においては，近年国鉄湖西線建設に先立って各種遺跡の発掘調査が実施されたし，また，つぎには北陸自動車道建設に係る遺跡の発掘調査も予定されている。特に本県の場合は，昔からそうであるように，交通の要所であるため，道路・鉄道等の敷設が著しく，したがってこうした工事と遺跡の保存の問題には，他府県以上に深刻な問題をはらむことも多い。国道8号線も近年来の自動車量の激増のために，バイパスの設置が必要となったが，これが設置される長浜平野にはいろいろな種類の遺跡が点在しており，滋賀県下でも最も濃密に分布する地域の一つである。そのため不幸にもこれにかかる遺跡の数も少なくなく，昭和46年度にはここに報告する川崎南・勝町・鴨田の3遺跡の発掘調査を実施しなければならなかった。このうち川崎南遺跡および勝町遺跡の発掘調査は大江命を団長とする『長浜バイパス北方遺跡調査団』が，また，鴨田遺跡の発掘調査は『財団法人滋賀県文化財保護協会』がそれぞれ分担して実施した。

本書は昭和47年度において実施したこれら3遺跡の発掘調査の整理結果を報告するものであるが，整理等の期間に制約があったりして充分な報告をなしえない点も少なからずあると思われるが，今後さらにこれらの整理を続行して逐次精足していきたいと考えている。

なお，酷暑，厳寒の下で発掘調査等に直接参加くださった地元作業員の方々，ならびに調査等に適宜ご助力をいただいた長浜市教育委員会，また，整理場を提供してくださった長浜市高田公民館，近江風土記の丘資料館に深甚なる謝意を表したい。

I 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置と自然環境

1) 位　　置

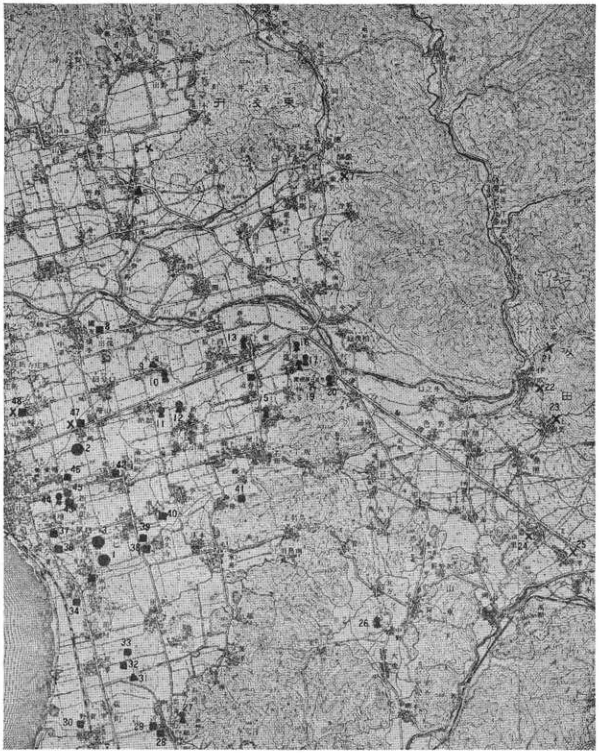
鴨田遺跡は長浜市大戌亥町に所在し、国鉄北陸線長浜駅の南東方約2.4kmに位置する。この遺跡の立地する長浜平野は姉川の扇状地で、遺跡地はこの川の左岸地域のほぼ中央部にあたる。そしてその背後(東方)には標高250～300mの比較的低い横山山系がほぼ南北に走り、さらにその後に伊吹山がそびえている。一方、西方には琵琶湖が広がるが、それとの距離は約1kmほどである。また、川崎南遺跡および勝町遺跡は長浜市八幡中山町、同市勝町に所在するが、これらは鴨田遺跡の北方それぞれ約2,000m、100mに位置し、勝町遺跡と鴨田遺跡とはほぼ隣接しているといえる。

2) 自然環境

(1) **概観**　湖の生成が第三紀にまで溯り、世界でも有数の古さをもつ琵琶湖は、古くは南方の伊賀上野付近に広がっていた。この湖が現在のような形をとるようになったのは、西の比良、南の信楽、東の鈴鹿のような南北方向の山地が隆起を始める第四紀の中期である。この南北方向の運動は一般に六甲変動と呼ばれており、それと平行して琵琶湖に流れ込む水系が発達し、人類の生活の舞台である湖東・湖西・湖南・湖北の諸平野が形成されていったのであった。湖北地域もこのような構造運動をよく反映しており、東西性の古い断層を切って南北性の断層が発達し、地塊化を促進している。湖北平野を形成する余呉川・高時川・草野川・姉川はこれらの構造線の支配を受けて、山地部においてほぼ南流している。中でも余呉川の谷を形成する断層は、地質的にも地形的にも認められた断層で、柳ケ瀬断層と呼ばれており、北は福井県の板取から余呉川の谷を通って木之本に至り、そこで沖積平野下に埋没し、伊吹山の山麓を弧状に走って関ケ原に至る長さ55kmの大断層である。1909年に起った姉川地震はこの断層を反映しているといわれている。

湖北山地の地質は主としてチャート・粘板岩・頁岩・砂岩・石灰岩などの古生層と花崗岩である。余呉川・高時川・草野川流域は砂岩・頁岩・粘板岩等で構成され、姉川流域では上記古生層に加えて石灰岩・花崗岩がみられる。南の天野川流域はほとんど石灰岩である。ただし、遺跡背後の山地である横山は粘板岩・チャート・レンズ状の石灰岩の他に輝緑凝灰岩が分布している。

(2) **湖北平野**　本平野は大きく二つの地区に分けられる。すなわち西流する姉川・天野川の形成する南部地区と、南流する余呉川・高時川の形成する北部地区で、西地区の間には虎姫山・小谷山などの基盤山地が介在し、両者を隔てる屏風の役を果している。高時川と姉川は平野中央付近で合流し、南西に向きを変え琵琶湖に注ぎ、尖状三角洲を形成している。



● 調査遺跡
× 縄文遺跡
■ 弥生遺跡
古墳時代前方後円墳
古墳時代方墳
▲ 白鳳寺院跡

1 鴨田遺跡
2 川崎権遺跡
3 勝町遺跡
4 井ノ口遺跡
5 末尾遺跡
6 八島廃寺遺跡
7 服部遺跡
8 門充遺跡
9 塚本百坊遺跡
10 猫ノ神遺跡
11 越前塚遺跡
12 上塩塚遺跡
13 長塚敷遺跡
14 北郷里遺跡
15 西塚遺跡
16 茶臼山遺跡
17 オヤヤ中山遺跡
18 湯屋遺跡
19 池ヶ入遺跡
20 伝鳥貝目広郡院
21 太平寺遺跡
22 伊折遺跡
23 上野遺跡
24 海音遺跡
25 杉戸遺跡
26 甑原山遺跡
27 人塚山遺跡
28 別戸遺跡
29 高猿遺跡
30 宇賀野原町遺跡
31 奥長戸遺跡
32 長沢遺跡
33 折川遺跡
34 宮儀遺跡
35 高畑遺跡
36 平方遺跡
37 地蔵寺遺跡
38 永久寺遺跡
39 大原巳遺跡
40 大宮遺跡
41 寺ケ谷遺跡
42 小原遺跡
43 雨高田遺跡
44 三の宮塚遺跡
45 宮高田遺跡
46 八幡東遺跡
47 川崎遺跡
48 十里遺跡

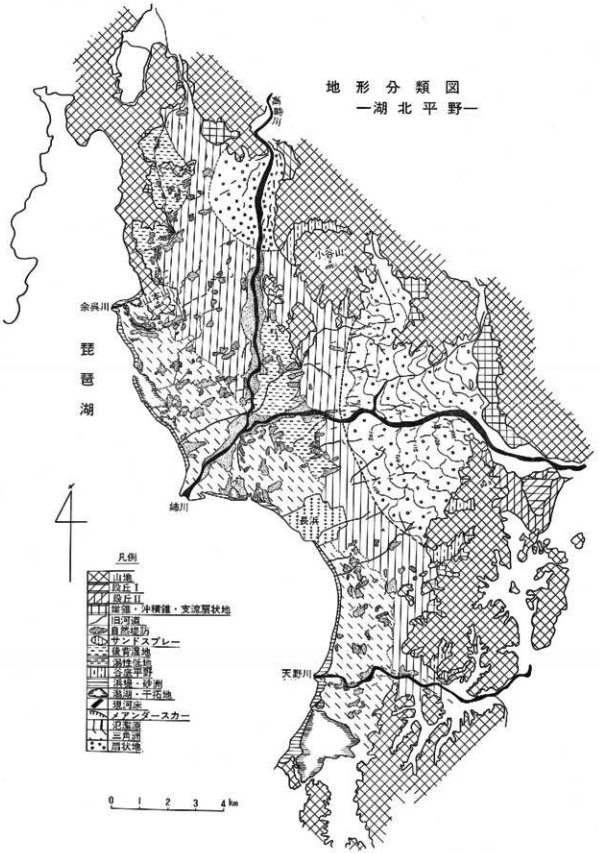
第1図　発掘した遺跡の位置と付近の遺跡

〔余呉川流域〕　平野の北部地区に属する余呉川は，その源を湖北の山地に発し，柳ケ瀬断層線谷を直状に南流して平野に出る。そして賤ケ岳（422.5m）から山本山に至る西側の基盤山地に接するように流れ，山本で大きく北西に向きを変えて流出する。現在では余呉川は中流の西野付近で基盤山地を穿つ放水路によって琵琶湖に導びかれている。谷口の黒田付近の標高は約115mである。なお，本平野は次のような性格をもっている。①扇状地が発達していない。②東側を平行して流れる高時川に比して地盤高は低い。③田居・西山・大音付近や西野付近では低湿地がよく発達している。すなわち，福出山北部では厚さ30mの腐植土・腐植質粘土の互層がみられ，さらに西野付近では洪水による冠水がひどいため天保8年に放水路が掘られた。④段丘とは異なった崖状の地形が西阿閉付近にみられる。このような特徴をもった余呉川流域は堆積力の小さい自然堤防帯・デルタ型の平野である。

〔高時川流域〕　妹川の支流である高時川は，谷口の保延寺付近で標高120mを示し，構造運動のよく反映された山地を流れ出て，扇状地を形成する。扇状地の分類は主に自然堤防の発達の違いから行なったものであるが，その分布範囲は千田・東物部・阿弥陀檪の付近までで，余呉川方向に発達しており，高時川は扇側を流れている。自然堤防地帯は阿弥陀檪付近から姉川との合流地点付近までで，その間には強固な自然堤防が発達している。しかし，高時川はこの自然堤防地帯に至ってもまだ蹼河川である。さらに，平行して流れる余呉川に比して約10mも地盤が高く，東阿閉・宇根・猫口・沢・今・大光寺の載る自然堤防はほとんど比高がない。また，条里地割が明瞭で，旧河道はほとんどみられない。このような事実は自然堤防地帯では長期にわたって高時川が現在の河道を維持してきたことを示している。高時川と姉川は周囲よりも地盤が高いために，間にはさまれる虎姫地区は冠水期間の長い後背湿地であった。現在ここを流れる田川は高時川とはトンネルによって交叉している。デルタ地帯は姉川との合流点以南で標高90m以下の低平な地帯である。この地帯には自然堤防も分布し，また，浜堤が発達しているため後背湿地の形成が促進されている。

〔姉川流域〕　姉川とその支流草野川の形成する平野は扇状地の発達で特徴づけられる。標高130mで谷口を出た姉川は北部の草野川とともに広い扇状地，すなわち扇端が標高100mの等高線に沿った平均傾斜8％の緩勾配扇状地を形成する。人工的土地改変などのため旧中洲は明瞭にはみられないが，旧水路が谷口から放射状に分布している。地下構造をみると南田附東町付近で泥層主体の層相と礫層帯との境界を引くことができ，これは扇端と一致する。扇状地の前面には自然堤防地帯・デルタ地帯があるが，長浜市街は全体的に高い所に立地しており，また，これらの低湿な地帯の集落はほとんどが自然堤防上にのっている。

〔天野川流域〕　天野川の形成する平野は扇状地が発達せず，また，デルタの発達も悪い。谷口付近まで標高90mの等高線が進入し，非常に低平である。長浜から南は浜堤の発達が極めて良く，このデルタの低湿化をいっそう深めている。天野川の南には琵琶湖第二の内湖『入江内湖』



第2図 湖北平野地形分類図

があり、天野川の堆積力の弱いことを示している。これは後背山地の地質（石灰岩）との関係が深いと考えられる。

参考文献

琵琶湖国定公園学術調査団『琵琶湖国定公園学術調査報告書』（滋賀県、1971）。

杉村　新「柳が瀬断層」（『第四紀研究』第2巻6号、1963）。

2．歴史的環境

鴨田遺跡ならびに川崎南・勝町遺跡等、国道8号線長浜バイパス関連遺跡の立地する長浜平野南部は、北陸道・東山道の分岐点として、北に若狭・越前、東に美濃・尾張、南に畿内をそれぞれ控えた要衝の地であり、湖国近江にあっても、最も早く開けた地域である。したがって、その歴史的環境も、縄文時代以降数多くの遺跡を蔵し、その豊かさを誇っているのである。そこで以下、この長浜平野南部に視点をすえ、先史・古代における歴史的環境を概観することにしたい。

〔縄文時代〕　湖北地方における縄文文化は、現在のところ、中期前半を大きく遡らないとされており、早期からの痕跡を残す湖東・湖南地方とは、やや性格を異にしている。この点は、以下にみるように、当地方における明確な遺跡がいずれも伊吹山系の山麓に位置し、湖畔に立地することが多い湖東・湖南地方と異なったあり方を示す点とともに、当地方における縄文文化の性格を考える上で、注意すべき点と考えられるが、その詳細は明らかでない。そのためここでは遺跡の概要のみをみることにしたい。

鴨田遺跡の東北約9㎞、東浅井郡浅井町下草に所在する醍醐遺跡は、中期初めから後期中葉までの遺物を出土する遺跡であり、近畿地方の同時代の遺跡に通有な土器をはじめ、石鏃の出土をみているが、中期後半には、瀬戸内地方と中部・関東地方の影響をうけた土器が、それぞれ半ば出土しており、当地方の特色を示している。鴨田遺跡の東約10㎞、坂田郡山東町柏原に所在する番の面遺跡は、中期末の土器・石器を出土した遺跡であり、関西ではまれな竪穴住居跡が発見されるなど、関東地方の影響を強く受けている。また、鴨田遺跡の北15㎞、東浅井郡湖北町には、後期の土器を出土する尾上湖底遺跡が所在する。尾上遺跡は、その名の通り余呉川河口の琵琶湖湖底に所在する特殊な遺跡であるが、その性格は十分明らかにされていない。鴨田遺跡の東約9㎞、坂田郡伊吹町杉沢には晩期の土器・石器を広範囲に出土する杉沢遺跡が所在する。杉沢遺跡からは、縄文末の墓制の一端を示す合口甕棺が出土しているほか、飛騨・美濃系統の石器が多数発見されており、中部地方との交流の一端を示している。この他にも、伊香郡木之本町の古橋遺跡、坂田郡伊吹町の伊吹遺跡などをはじめとする多くの遺跡が、伊吹山麓一帯に立地しており、また、平野部においても、長浜市山階・十里・森等から、縄文土器片・石器が出土している。しか

し、これら平野部出土の遺物については、姉川の氾濫にともなう流出と解されており、明確な遺跡とは考えられていない。なお、最近調査された長浜市川崎町の川崎遺跡においても、若干の土器片が発見されている。同遺跡は、後述するように弥生時代前期中葉に遡る遺物の出土をみているのであるが、その下層から縄文時代中期～晩期と考えられる土器片の出土をみたのである。しかしこれらはいずれも摩滅が激しく、上記のものと同様、姉川の乱流によって流出したものと解すべきであろう。

以上、湖北地方における縄文時代の遺跡の概略をみてきたのであるが、約言すると、湖北地方の縄文時代の遺跡は主として伊吹山麓に立地し、中期以降開始されており、中期前半までは畿内地方の、後半以降は中部・関東地方の強い影響下に入ったと考えられ、晩期末に到って再び西日本の影響をうけるに到ったと考えられているのである。

〔弥生時代〕　紀元前2世紀、北九州に伝播した稲作文化は、日本海沿岸・瀬戸内沿岸の2コースを通って近畿地方に、そして前1世紀には、伊勢湾沿岸地方に到達、その直後、山城経由で湖南に、伊勢湾経由で湖北に入ったとされている。当地におけるこの時期（前期の中の段階）の遺跡としては、まず上にみた川崎遺跡が注意される。同遺跡は鴨田遺跡の北約3㎞に所在し、さきにみた縄文土器片をはじめ、第1様式中から新の段階に到る弥生式土器及び若干の石器・木器が出土しており、若干ではあるが、東海地方の影響をうけた水神平式土器の出土もみていて、湖北における弥生文化の端初を示している。

川崎遺跡とほぼ同時期、あるいはやや下る時期に、坂田郡米原町入江の入江西野遺跡、彦根市矢倉の矢倉川遺跡においても、伊勢湾地方の影響を強くうけた弥生文化が生れている。これらの遺跡は、いずれも鴨田遺跡の南方約8㎞に所在し、湖畔に立地している。特に矢倉川遺跡は、同時に縄文時代晩期末葉の土器を出土しており、注意されるが、その性格は十分に明らかにされていない。

中期に入ると、前期後半から始まった長浜市大辰巳町の大辰巳遺跡が急速に拡大、畿内の影響を受けた甕形土器や、近江独自の装飾を用いた土器を数多く出土している。同遺跡は、鴨田遺跡の東北約1.5㎞に所在し、鴨田遺跡との関連が注意される。なお、前期以来の入江西野遺跡においても同じ傾向の土器が発見されている。

中期中葉に入ると、再び東海地方の影響が顕著になり、大辰巳・入江西野遺跡においても、かかる傾向をうけた土器が出土しているが、これとほぼ同時期と思われる尾上湖底遺跡の遺物からは、畿内の影響を強くうけた土器が出土しており、近江の特色を示している。

中期末には、ひきつづいて大辰巳遺跡において、伊勢湾地方の影響をうけた土器の出土をみており、一時退化した櫛描文が復活している。大辰巳遺跡は、上に述べたように中期に入って急速に拡大したのであるが、後述されるように、今回調査のおこなわれた鴨田遺跡の、溝1・溝6及び溝A（沼沢池）下層からは、中期中葉以降の大辰巳遺跡出土土器と瓜二つの甕形土器・壺形土器が出土しており、その一端を示すものと考えられる。

湖北地方における弥生時代後期の遺跡としては、大辰巳遺跡・入江西野遺跡に若干の資料がみとめられるだけで、詳細な解明はなされていない。しかしながら、以下において明らかにされるように、今回その一部の調査がなされた鴨田遺跡は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての大集落跡と関係あることが、改めて確認されており、新しい知見を提供している。

鴨田遺跡出土土器の性格は、後期前半においては、東海地方の影響を受けつつも、近江独自の形態を示す。甕形土器・壺形土器・器台形土器が多数を占めるが、後期後半から古墳時代前期にかけて、しだいに東海地方の影響が顕著となり、「S」字形口縁を持つ甕形土器など、明確にその影響を示すものが増大している。なお、この時期の土器は、南山城から大和地方北半に分布していることが指摘されており、東海・近江の文化が畿内に流入したことを示している。また、後期末葉から古墳時代前期にかけて、山陰・丹波地方の影響をうけた土器が、湖西地方から湖北にかけて展開しており、文化圏の問題としても注目されるところである。

〔古墳時代〕　湖北地方における古墳文化は、伊香郡高月町周辺及び長浜市・坂田郡近江町周辺の二つの地域に、大きくわけることができる。そこで以下、両者を対比しつつその変遷をたどることにしたい。

湖北地方において、最もはやく築かれたと考えられるのは、鴨田遺跡の北方約12㎞、東浅井郡湖北町山本の神奈備山南麓に所在する全長55mの前方後円墳の若宮山古墳である。この若宮山古墳はいまだ未調査であり、内部主体等は明らかでないが、墳形等からほぼ前Ⅱ期と推定される。これ以降、高月町周辺においては、山本山の北につづく西野山丘陵上に5世代にわたって、前方後円墳や前方後方墳が従属的な前方後円墳・円墳・方墳をともなって、地点をかえつつ築かれており、古墳時代前期において早くも強力な地域的統合が、伊香地方に成立していたことを示している。

一方、若宮山古墳が築造されたほぼ同じ時期に、鴨田遺跡の東北約5㎞、長浜市東上阪の丘陵上に、全長95mの前方後円墳長浜茶臼山古墳が築かれている。長浜市周辺においては、茶臼山につづいて、その周辺に伝日広姫陵古墳・オオサキ山古墳等々、首長墓の系譜を引くと考えられる前方後円墳が若干の円墳を従えて築かれており、ここにも早い時期に強力な地域的結合が成立していたことが推定されるのである。

なお、この時期の集落跡としては、上にふれた鴨田遺跡のほかほとんど資料がなく、その性格を明らかにすることはできないが、鴨田遺跡において、滋賀県下で始めて手焙り形土器の出土をみていること、木刀・火溝りミニチュア等々、種々の祭祀用と思われる器具が発見されていることなどは、長浜市周辺における地域的統合の成立を考える上で、重要な示唆を与えてくれるものと思われる。

中期に入ると、まず高月町周辺部においては、西野山丘陵上を間隔をおいて移動していた首長墓が平野部に進出、まず高月町横山に横山古墳が、ついで同町東柳野に姫塚古墳、さらに同町西

物部に長塚古墳、同町洞戸に瓢塚古墳が、それぞれ数基の円墳を従えて築造されている。いずれも70～100mの規模をもつ前方後円墳で、巨大化の傾向を示している。

一方長浜市周辺でも、上阪・垣籠の丘陵部に築造されていた首長墓は、しだいに平野部に移動、まず長浜市垣籠町に鏡・玉類など多くの遺物が出土した垣籠古墳が、以下東上阪の長屋敷古墳、堀部町の西塚古墳、榎木町の福ノ神古墳、加納町の越前塚古墳・上藤塚古墳等々、平野部に築かれており、また、坂田郡近江町能登瀬にも、鏡・玉類等の出土をみた山津照神社古墳が、同町新庄にも金環・玉類・鏡等を出土した塚の越古墳が築かれている。ただ、これら首長墓の系譜をひくと思われる前方後円墳は、高月町周辺のものと異なりいずれも全長50m内外のものであり、巨大化するというより逆に縮小している傾向がみられる。しかも、その墓域も分化の傾向があり、前期の地域的統合に何んらかの変化を生じたことを示している。

後期に入ると、以上にみた首長墓の系譜は縮少あるいは消滅し、それとは異なる小円墳が、数基ないし数十基を単位として並行して築造されている。まず、高月町周辺部においては、同町唐川の唐川古墳群、松尾宮山の宮山古墳群、西野のハッ岩古墳群、浅井町丹生の丹生古墳群、同町田川の田川古墳群、同町山之前の雲雀山古墳群、湖北町丁野の丁野古墳群、同町山脇の中谷古墳群等々が築かれており、伊香地方だけでなくほぼ全域に分布している。長浜市周辺においても、八条町の八条古墳群、四ツ塚町の四ツ塚古墳群、近江町舟崎の舟崎山古墳群、米原町河南の石道山古墳群、同町磯の磯崎古墳群など、多数の古墳群が横山丘陵を中心に築造されている。

これら6世紀初頭から爆発的に築かれる後期群集墳は、その規模・分布においても多様性に富んでおり、従来の首長墓の系譜とは明らかに区別され、いわゆる民衆墓とまではいかなくても、村単位程度の小集団の長を葬ったものと考えられる。これはかかる被葬者層の地位の向上、胎頭を示すものということができよう。これらは、さきの首長墓の性格の変化とともに、社会構造上の変化を示すものと考えられている。

〔歴史時代〕　7世紀中葉に入ると湖北地方においても、6世紀初頭以来爆発的に築造されてきた群集墳は、ほとんど築かれなくなり、縮小の一途をたどっていた首長墓の系譜も、途絶えるに到った。したがって、湖北地方の古墳時代は、大化の薄葬令をまつまでもなく、その終末を迎えたということができるのである。このような古墳消滅の原因として、群集墳の爆発的な築造とその停止にみられるような社会構造上の変化がその背景にあることは明らかであり、それにともなって、古墳築造の政治的・宗教的意義が失われたものと考えられるのである。仏教の国家的な受容は、その大きな表われということができる。すなわち、古墳築造をやめた諸豪族は、それにかわる新しい権威の象徴として、仏教の受容、寺院の建立に力をそそぎはじめるのである。各地に残る白鳳時代の寺院跡は、その一つの帰結であるということができよう。

湖北地方の白鳳時代寺院跡の分布は、湖東・湖南地方とくらべるときわだった対称をみせている。すなわち、湖北地方の寺院跡の数は、湖東・湖南地方に比してきわめて少なく、特にかつて

は、多くの古墳の築造をみた伊香地方・高月町周辺において、今のところ一つの白鳳時代の寺院跡も発見されていないのである。これは湖北地方の歴史的環境を考える上で、非常に重要な点であると思われる。

長浜平野北部における白鳳時代の寺院跡としては、鴨田遺跡の北約11㎞、東浅井郡湖北町今西延勝寺に所在する浅井寺遺跡、同じく北約13㎞、同町尾上に所在する小江寺遺跡をはじめ、本遺跡の東北約7㎞、東浅井郡浅井町八島に所在する八島廃寺遺跡、同じく北約8㎞、東浅井郡びわ町弓削に所在する潤願寺遺跡などが知られている。

長浜市を中心とする平野南部においては、本遺跡の北約4㎞、長浜市榎木町に榎木百坊遺跡、同じく南約1.2㎞、坂田郡近江町長沢に奥松戸廃寺跡、同じく南約7㎞、坂田郡米原町磯の堂谷遺跡があり、それぞれに白鳳時代の瓦が出土している。

湖北地方における白鳳時代寺院跡の分布は、このようにやや南にかたよった傾向を示すが、それらは上にみた中期以降の前方後円墳の分布とほぼ対応しており、その勢力の消長を物語っていると思われる。しかしその調査はいまだ端緒についたばかりであり、その詳細は今後の調査によらねばならない。

以上、縄文時代から白鳳時代に到る長浜平野南部の歴史的環境を、遺構・遺物を中心に概観してきたのであるが、最後に、奈良朝に実施され、現在においてもなおその整然たる遺構を残す条里制について、一瞥しておこう。

周知のように、645年の改新クーデター以降、律令制に基づく国家体制を指向する政府は、その基礎として、全人民を公民化して戸籍に編貫し、班田制を施行した。これにともなって、班田制施行を容易ならしめるためとられたのが、条里制と呼ばれる耕地整理であった。

長浜平野における条里制遺構は、滋賀県の他地域とくらべてもその残存が明確であり、旧坂田郡誌以来、多くの研究がなされている。そして、それらによって坂田郡の条里は、他郡の条里と同じく、里の起点が東部の地形に応じて移動していること、北一条の起点は史料的制約から明断できないこと、浅井郡の条里とは関連性のないこと、十里以南については史料不足で里制のできないこと等々が明らかにされている。

ところで今回の鴨田遺跡の発掘にともなって、現在の地割とは異なる畔の遺構が、一部において発見された。その詳細は後述されるが、当初からこの遺構は条里制の遺構と推定されている。鴨田遺跡の所在する長浜市大戌亥町字寺田及び下加茂田は、復元条里図によると、それぞれ9条7里の2・3坪に当っており、その東半を鴨田遺跡が占めているのである。本遺跡の条里遺構は、T地区すなわち2坪では全く検出されておらず、K地区すなわち3坪において検出されている。この3坪の遺構は、東西に4条、約21m間隔でつくられた旧畔であり、半折田の形態を示している。したがって、現行の地割では北の二つが半折、他は長地形となっているが、かってはすべて半折田であったと考えられるのである。なお、T地区の性格については速断できないが、姉川の乱流によって、攪乱された可能性もあると思われる。

Ⅱ 鴨 田 遺 跡

1. 調 査 経 過

鴨田遺跡は、長浜市大戌亥町の集落の東約300mの地点から、東北東に延びる東西500m、南北150m余のほぼ長円形の範囲と推定されるが、今回調査の対象とした地域は、推定範囲の西端部に位する国道8号線バイパス予定路線内、幅30m、長さ200mの部分のみに限られた。

発掘調査は、昭和46年6月1日から、昭和47年3月30日までの11カ月間にわたり実施された。以下は調査の経過である。

南北200m、東西30mの調査区域内に、その縦横の軸線にしたがって4m四方のグリットをそれぞれ1～50、A～Fの方眼状に配列し、各グリット間には地層観察用畦を設定した。ただ、発掘区域は中心部において、東西に横切る幅8mの畦畔と用水路とによって分断されているため、それぞれの小字名にしたがい、北半部100×30mを寺田地区（T地区と略称）とし、南半部100×30mを鴨田地区（K地区と略称）として発掘区域を2分した。

6月～7月

発掘調査は、昭和46年6月5日、県教育委員会文化財保護課技師、同主事、調査員及び作業員が参加する説明会の直後に、発掘区域を囲繞する排水溝を掘り下げることから開始された。排水溝は、既に設定されたグリットの外側に1m離し、幅80cm深さ1mとし、周囲の水田からの流水を遮断し、調査地域の土壌を乾燥させるとともに、土層観察にも用いることを目的として掘り下げられた。なお、T地区北側及びK地区南側だけは、用地狭小のため、G50列・G1列を犠牲にしてグリット内に設けた。また、溝の深さについては、各グリット発掘の進行に応じて、順次掘り下げた。

最初の排水溝掘り下げの結果、T地区における土層の変化は、耕作土層は30cm前後であり、次層の若干の砂を含む粘土層は、北上するにしたがい極めてうすくなり、最北端では耕作土の直下、地表より30cm程度で砂層または礫層に変化するが、南部地域では、地表より約70cmに至ってなお粘土層が見られる箇所もあり、南端部では地表から80cm位で、黒色腐植土層に変わることが知られた。

また、遺物の出土については、G37A・G27F付近に多量の土器片が集中して検出された他は、南部ではほぼ均等であるのに対し、北端部においては極めて少量であった。

次にK地区においては、T地区に比較して明瞭な土層の変化は見られず、概ね耕作土の次層はやや褐色を帯びた部分も含む灰青色粘土層であり、砂層ないし礫層を耕作土の下に見出せなかった。しかし、G23Fの東側には、地表より約50cmの深さに周囲とは明瞭に区別される黒褐色の粘

土層が見られ、また、G6F～G8Fの東側では、地表より50㎝に、多量の土器片を含む紫色を帯びた黒色腐植土層あるいは粘土層が確認され、何らかの遺構の存在を予測させた。

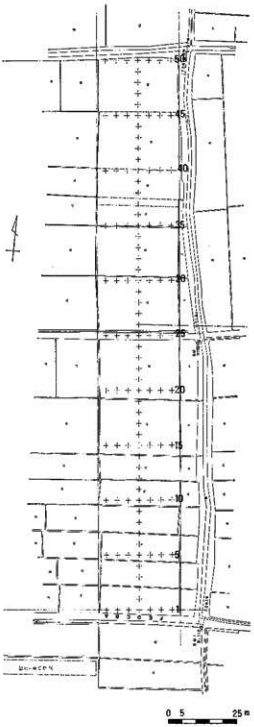
また、G10AおよびF、G15AおよびF、G20AおよびFの外側には、条里制遺構の畦畔と思われる地層断面の変化が認められた。

第1次試掘は6月10日T地区で開始した。G27Aを例外として、B列、D列、F列のみを、それぞれT地区ではG29B・G28D・G30Fを起点に北へ、K地区ではG24B・G23D・G22Fを起点に南へ2グリット間隔（T地区、K地区とも各々23カ所）で、深さは50～60㎝まで掘り進めた。

この試掘及びそれに伴う排水溝の掘り下げによって、T地区にはG31列・G36列に条里制遺構と思われる旧畦畔が検出された。G32列以南では、土器片等遺物を包含する黒色腐植土層が広がっているが、G36列以北では、粘土層に砂の混入が徐々に多くなることが知られた。

また、G36・37A西の排水溝中の、深さ60㎝に集中的な土器片の出土があり、G34Dでは、砂層中に加工木片・石斧破片が出土し、更にG27F北西部には多量の土器片の出土とともに数カ所のピットようの地層変化が認められた。

以上、試掘グリットを精査した結果、T地区においては、南東角G27F付近から北西方向G38A付近へ流れる溝状遺構の存在も想定され、この線に沿い、G27F、G28E・F、G29E・G30D・E、G32C・D、G33C、G34B・C、G36A・B、G37A、G38Aの15カ所を新らたに試掘したが、深さを地表から60㎝以内にとどめたため、土器片の出土は北部に比べ多く、遺構等の埋伏を予知させるものの、新たな変化は見出せなかった。



第3図　鴨田遺跡グリット設定図

また、これまでの排水溝掘り下げおよび試掘の結果から、T地区北部G39列以北50mの範囲では、一様に耕作土の直下に砂層あるいは礫層が続き、姉川等の氾濫によって削平もしくは撹乱され、遺構は消滅しているものと判断し、この地区のみ試掘の深さを地表下2m以上とし、更にまたG49DよりG36Dに至るDグリット列を通して掘り進め、断面を記録した。なお、G38D・G37D・G36Dのみは表土より60～70cmにとどめ整面したところ、G37D・G38Dを斜めに、幅約2mの砂を含む黒褐色の粘土層が横断しており、しかも同層中より、壺の口縁を含む多量の土器片が検出された。このため、あらためて西排水溝G37A付近および東排水溝G38Fの断面を精査し検討したところ、この3地点に連続する同一の地層が溝状遺構であることが想定された。さらに、この地域以南の試掘の際に発見された同種の地層についても同様の遺構である可能性が濃いとして、全域の平面発掘を決定した。

7月～11月

上に述べたように、全面発掘はG39列を北限として、その南側全域に実施された。また、これまでの試掘結果から、狭義での耕作土は地表下30cm程度であるが、数年に一度の割合で深さ50—60cmまでは鋤耕され、土層が撹乱していることが知られたので、地表下50cmまでには遺構等は遺存しないと判断し、これを第1段階の平面発掘の深さとして、溝等を確認することを目的とした。

調査の結果、T地区においては、G37FよりG37Aに西流する幅平均2mの砂を含む黒褐色粘土層およびG37Dより分岐してG34Aに至る平均幅80cmの褐色砂層が検出された。東・西両排水溝に現れた断面より判断して、それぞれ溝1・溝2と名づけた。また、G36FよりG31Aに西流する平均幅1.5mの砂層は溝3と名づけられた。更にG32列以南の表土下60cmには黒色腐植土層の存することが認められた。

また、G39・40Eに、紫色を帯びる黒色粘土層よりなるピット1が発見されたが、精査の結果溝1との関連は認められず、独立したものと判断して掘り下げ、多量の弥生式土器片を検出した。

次に、上述の3条の溝にそれぞれ堆積する礫を含む褐色粘土層および砂層を掘り下げ精査した。溝1（流水路）は、中央部よりやや西に、完形の壺を含む多量の弥生式土器片が出土し、更にこの溝は3層より形成されていることが知られた。また、溝2（流水路）は、石斧の他弥生式土器片多数が検出されたが、溝深20cm内外と極めて浅く上部は既に耕作により削平されていることが知られた。さらに溝3（流水路）は、砂層の他3層が堆積し、しかも上部にはほぼ完形の須恵器甕、下部には弥生式土器及び破片・加工木・扁平片刃石斧・獣骨等が出土し、溝1とは時期と性格を異にすることが知られた。

3条の流水路の調査終了後、さらに下位の土層を調査し、T地区南部の黒色腐植土層の範囲を確定するため、東・西両端にトレンチを入れた結果、各流水路は砂を含む灰青色粘土層を開削して形成されていることが知られた。また、南部地域の層序は、耕作土・褐色部分を含む灰青色粘

土層・黒色腐植土層・暗灰色粘土層・底部にはうすい砂層、そして灰青色粘土層と続き、沼沢地に堆積したものであることが知られた。ただしG27E・F付近に黒色腐植土は認められず、灰色青粘土層が北へ傾斜する汀線であると推定された。また、この傾斜地に径30～40cmの紫色を帯びる黒色粘土層からなるピット2が発見された。

K地区では、全域にわたり表土下60cmまで掘り下げ整面した結果、西半部に、T地区南部の沼沢地に連続する黒色腐植土層がG16A・G17Aを除くほぼ全域に検出された。そして、その沼沢地に注ぎ込むように、G24DからG23Dへ（溝6）、G23FからG23Dへ（溝7）、G20FからG19Cへ（溝8）、G7FからG10Dへ（溝12）、G5FからG5Dへ（溝15）、それぞれ西流する溝あるいは流水路の存在が確認された。そして、溝8と溝12とによって囲繞される地域には、多量の弥生式土器片・蛤刃石斧・砥石などが出土し、地表から50cmの深さの灰青色粘土層および柔里制遺構と推定される旧耕畔の上には、数十個の小径のピット群が検出された。

11月～2月

T・K両地域に広がる黒色腐植土層は沼沢地に堆積したものと思われるが、トレンチに多量の土器片を出土していることから、全面的に掘り下げ、底を確認すること、また、K地区における4条の溝の検出を目的とした。

その結果、沼沢地では、灰青色粘土層がゆるやかに傾斜する汀線、地表より1m以下に多量の弥生式土器および土師器・木器・木材・石器・銅鏃等が出土した。また、T地区西部および東部に、北東から南西に流れる細砂よりなる流水路の痕跡が各1条発見されたが、上部はほとんど削平されていた。溝7（流水路）の最上層は、沼沢地と同様の黒色腐植土に覆われ、また、同種の木材を包含し、多量の弥生式土器および破片を包含する褐色腐植土が第2層をなし、底部には若干の砂層が堆積していた。溝8は、多量の弥生式土器片を包含する黒褐色粘土層1層のみが堆積し、他の全ての流水路・溝が西部の沼沢地に注ぐのに対して、この溝のみG19Cで突然消滅し、更に西へ延びる形跡がみとめられなかった。溝12は溝8と同様均一の黒褐色粘土層よりなり、おびただしい数量の弥生式土器・土師器破片を出土した。そしてこの溝のみ流路は北上し、溝8と直交するように施されたものであることが判明した。溝15（流水路）は、灰黒色粘土層およびうすい砂層よりなり、多数の弥生式土器片が出土した。

以上で鴨田遺跡の発掘は概ね完了したが、100m北に位置する勝町遺跡との関係を調査する目的で、T地区北側に更にG52C、G53C・D、G54C・D、G55D、G57D、G59Dの試掘グリットを設定して掘り下げた。各グリットにおいては、一様に耕作土の下に灰青色粘土層・礫層・砂層が交互に続き、T地区北部とほとんど同様の土層を示し、若干の土器片と石斧を出土した。ただ、G52Cにおいて、地表下50cmに60×60×30cmの明治時代初年頃のものと思われる木棺が出土し、人骨とともに、宋・明銭等副葬品が内蔵されていたが、われわれの調査対象より著しく時代の下るものであり、地元民の要望もあって、記録後ただちに近くの共同墓地に再埋葬した。

3月

既に検出されたすべての遺構について、最終的調査・写真撮影・実測等を行なった。

2. 遺　構

先に詳しく述べたように、鴨田遺跡は湖北最大の河川、姉川が形成した扇状地の先端部微高地に営まれた弥生時代から古墳時代にかけての集落跡である。1カ年近くに及ぶ今回の発掘調査は、前に記したとおり、本遺跡の西端部を南北に貫ぬいて敷設される国道8号線バイパス予定路線内6,000㎡余の区域のみを発掘調査したものであるが、出土した土器を中心とする膨大な遺物は今後、湖北の先史を理解する上に必須の貴重な資料となるであろう。これに比べて、今回の発掘調査によって検出された遺構は、2条の人工的な溝跡と10条の流水路・沼沢地・地割り畦・ピット等にすぎず、約2千年以前の古代集落跡の全体像を把握するには不充分かつ困難なものである。しかし、少なくとも、集落の立地状況や範囲を判断するのには多少の参考資料となりうるものと考えられる。

本遺跡の各遺構はすべて厚さ40～60㎝の耕土層直下の標高約90.35～90.41mを測る灰青色粘土層または砂質土層のほぼ平坦な面に遺存している。したがって、検出された各遺構面は度重なる耕作によって削平された後の残存面である事は当然である。事実、K地区東部第3・第4区域の各グリッドの試掘時に耕土層から多量の土器片が出土した。以下各遺構に関して簡単ではあるが説明を付す。なお、遺構面は基本的に北部T地区が高く、南部K地区が低くなっている。

1) 溝

既に述べたように、今回の調査によって検出された溝跡は13条を数える。もっともこれらの中で、明らかに人為的に掘穿されたと推定できるのは2条のみで、残りの11条は自然流水路と沼沢地である。溝は北から、発見順序に従って番号を付けたが、沼沢地のみは性格を異にするため、溝Aと呼称した。なお、発掘途上溝跡と推測しながら、後にそうではないことが判明したものもあるために、欠番にした溝番号がある。さて、これらの溝は、溝3をのぞいてそれらのほとんどが沼沢地に流れ込んでいるという共通点を認めうるが、T地区の溝1～5が旧姉川の氾濫河道と同一の方向に走るのに比較して、K地区の溝の方向は、各溝によって違うという相異点が見られる。また、これらの溝の規模はさまざまで、溝幅3m以上のものから20㎝位いの小溝までである。

溝1　発掘区域のもっとも北に、東西方向に連なる溝である。すなわち、T地区東部G38F内から南西方向へゆるく蛇行ぎみに下り、G37Bで屈曲して西向する自然に形成された流水路であろうと思われる。しかし、自然流水路ながら鋭く砂質土層を浸蝕しており、溝幅1.8m～2.6m、深さ60㎝～70㎝の規模を有する。溝内堆積層は2層に区別せられ、断面は2層とも浅い皿状を呈

する。第1層は含砂黒褐色粘土層で炭化物が包含されており、上層部には土器小片が混入されていた。第2層の灰褐色粘土層は、下層に降りるほど不純物が少なく、美しい色を呈するが、土器の出土は最下層付近には見えず、第1層と第2層との転換点あたりに最も多く完形品も包含されていた。これらの土器の他に蛤刃石斧の出土も見た。出土土器には口縁立ち上り部に凹線を施し、口頸部の発達した、卵形状を呈する畿内第4様式の壺を中心に、弥生時代中期後半から古墳時代前期のものまでが含まれていた。なお、土器の出土量は東部に少なく、G38D以西の溝内で多いという現象が見られたが、これは西部溝底の低さが残存状態の良好性をもたらしたものと考えられる。さて、溝1はT地区で唯一の西向ぎみの遺構で溝A（沼沢地）との関連が掴みにくいが、G37A以西で湾曲して、G32Aより北西に広がっていると推定できる沼沢地に流入しているものと予想し得る。

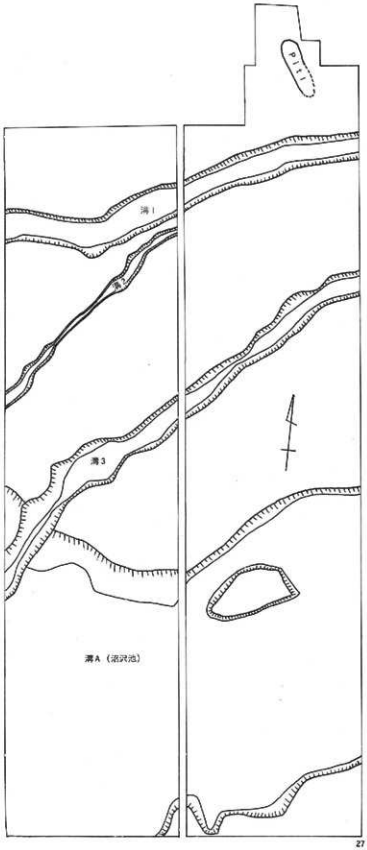
溝2　溝1から流出した一時的な氾濫流路であろうと思われる幅20～100㎝余り、深さ10㎝内外の小溝である。溝1のG37D断面に溝2のものと考えられる砂利層が喰い込んでいるところからすれば、溝2は溝1上層に含砂黒褐色粘土層が堆積し、流路としての機能が停止してしまった後に、溝1第1層を浸蝕し、西部砂質上層地帯に流出してでき上ったと思われる。流出した水量が僅かなためか、砂質土層をかろうじて浸蝕して南西方向へ下り、G33A東方で溝A（沼沢地）に流れ込んでいるものと思われる。なお、G35Bあたりでは、耕作による削平も受けてきわめて浅く、ようやくのことで溝幅を検出し得た。溝内には褐色を呈す砂利層が堆積するのみで、少量の土器片、石斧1点を出土したのみである。

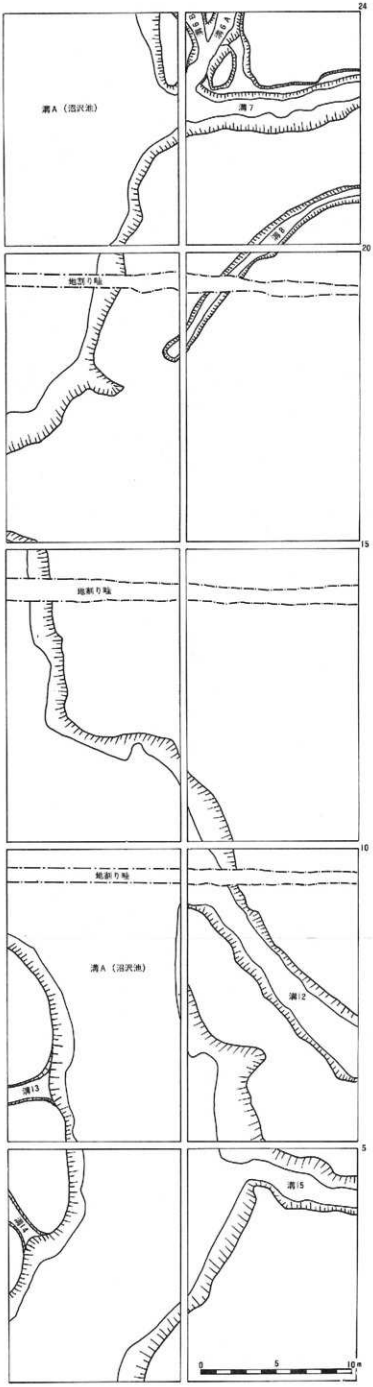
溝3　この溝は、T地区微高地の最も南に、北東から南西へ連なるもので、本遺跡から検出された溝の中で、最も新しい時代まで存続したであろうと推定される自然流水路である。

灰青色砂質粘土上に検出された溝の幅は、最小1 m、最大3 mを測る。溝内堆積層は上から、茶褐色砂利層、黒色有機質粘土層、灰褐色礫混入砂層の3層を数えるが、時期的には灰青色砂層を浸蝕した時期と灰青色砂質粘土層を切った時期とに区別できるであろう。なお、本溝跡はG32Aより南では、溝A（沼沢地）を開析しているが、これは溝Aが泥溝化して、いわゆる沼地となってからの遺構と考えるのが妥当であろう。

本溝からの出土遺物は弥生式土器・古式土師器・須恵器・木器・扁平片刃石斧・石鏃・獣骨等多様性に富むが、遺物出土層に若干の差異が存在するようである。すなわち、須恵器は上部砂利層または粘土層から出土し、その他の弥生式土器・木器（鏃を含む）・石器は下層の砂層より出土した。以上の出土遺物から本溝は弥生時代後期より古墳時代後期までの遺構と考えられる。

T地区には、上述した3条の溝跡以外にも、南部溝A（沼沢地）の東西に自然流水路が1条ずつ見られたが、これが溝4・溝5である。ともに黒色腐植土層上を一時的に浸蝕したもので、薄く浅い砂層が走るのみで腐植土中に自然消滅している。遺物も土器小片が混入されているのみで





第4図 鴨出遺跡遺構平面図

あった。

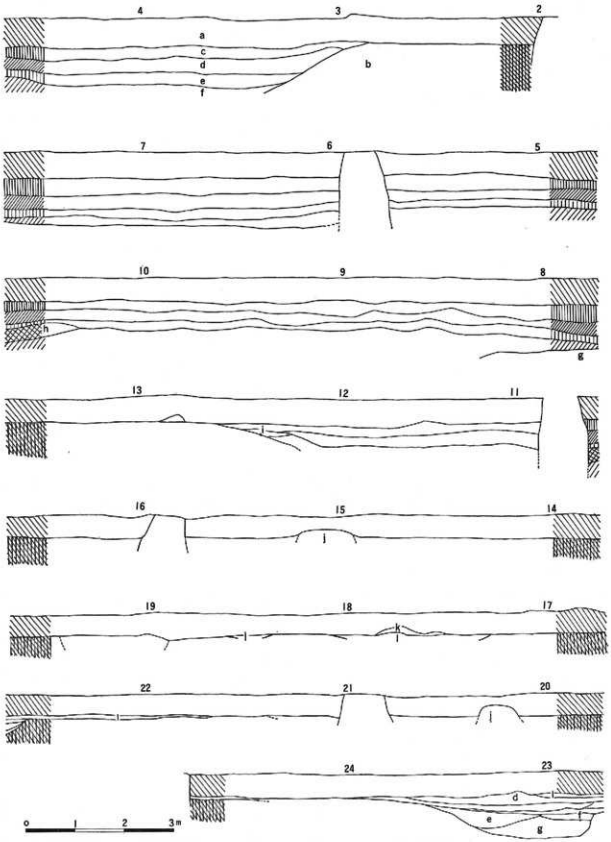
溝6　K地区北辺、G24Dから南向の後、溝7に流入する自然流水路と推測せられるが、疑問点がないわけではない。本溝はK地区北限付近では流路が2条に分れている。したがって、東側の流路を溝6A、西側の流路を溝6Bとした。溝6Aは幅2*m*前後、深さ0.7～0.8*m*の規模をもつ溝6の主流であり、北東から南西へまっすぐに連なるが、南西端を溝7によって後に切られたため、G23D付近で溝7に流入した形跡となっている。また、G24D東側にも、黒色を呈す粘土地帯が広がっていたが、これは溝6Aの溢水によって形成された凹地と考えられる。G24D北のトレンチ断面によると、溝内には炭化物を包含した黒褐色粘土層と灰青色砂層が堆積していたが、弥生式土器が出土したのは上層の黒褐色粘土層に多かった。これらの弥生式土器は、後期のものが中心であったが、若干それよりも古い時期のものも出土した。なお、溝6Aの掘り込みは西肩で特に鋭く、人為的なものと考え得る可能性が多分にある。溝6Bは、灰青色粘土層に幅1*m*内外、深さ25㎝の規模で掘り込まれているもので、溝Aの分流と言うよりも、全く別個の流路と考えた方が良いのかも知れない。溝内には溝6A上層と同じ黒褐色粘土層が堆積し、出土遺物も少量の土器片であったが溝6Aとほぼ同時期のものと推測される。

溝7　K地区東部第5区G23Fからほぼまっすぐに西向し、G23Cで溝A（沼沢地）に流れ込む自然流路である。溝幅約3*m*、深さ40㎝内外を測り、断面は浅い皿状を呈する。溝内堆積第1層、黒色有機質粘土層には多量の自然木が流入しており、第2層の含砂褐色粘土層には古墳時代前期から中期にかけての土師器を中心とした土器の他に、扁平片刃石斧・土錘等が包含されていた。しかし、溝6と切り合っているG23D付近では弥生時代中・後期の土器も出土した。

溝8　溝8は、K地区G21FからG19Cまで弯曲しながらも、ほぼ北東から南西へ連なる人為的に掘穿されたものである。灰青色粘土層上からの掘り込みは鋭く、断面はU字状を呈する。溝内には黒褐色粘土が一様に堆積しており、弥生時代中期後半から終末期までの土器片を多数包含していた。なお、本溝はG19C沼沢地直前で途絶するものの、次に述べる溝12と直交するように施されている。

溝12　K地区東部第2区域G7Fから、北西方向へまっすぐ伸びる人為的に掘開された溝である。幅2.5*m*～3.5*m*、深さ0.7*m*～1*m*を測るやや幅の広いU字溝である。溝底は東部ほど高く、G7F東トレンチ断面はU字よりも、むしろ深皿状をなしているが、西へ行くほど底が低く、掘り込みは鋭くU字状を呈す。溝内堆積層は黒褐色粘土のみの単一層であるが、溝底付近には砂が幾分混入している。

溝12の土器の出土量は、検出された溝の中で最も多く、他の溝を断然圧倒している。耕土層直下の遺構面には大小土器片が足の踏場もないくらいに散乱し、溝内には上層から溝底まで隙間なく、土器そのものが堆積層をなすかのごとくに、塊となって包蔵されていて、意識的に土器を溝内に投げ込んだ感じさえもたれた。これらの出土土器には、弥生時代中期後半から古墳時代前期



a　耕作土層　b　灰青色粘土層　c　含粘土黒灰色腐植土層　d　黒色腐植土層　e　灰黒色腐植土層
f　灰色粘土層　g　灰色砂層　h　含砂灰黒色粘土層　i　含砂灰黒色腐植粘土層　j　黒褐色粘土層
k　赤褐色粘土層　l　茶褐色砂層

第5図　鴨田遺跡K地区C列東壁断面図

までの完形土器、土器片が見られるが、なかでも、もっとも量が多く、中心をなすのはいわゆる古式土師器であった。勿論、出土土器は量的に豊富なばかりでなく、器種上からも豊富で、壺・甕・高杯・器台・甑・碗・鉢等あらゆる種類に及んでいる。更に土器以外の出土遺物も石斧・石鏃から獣歯・獣骨・鹿角等が溝内から採集せられた。

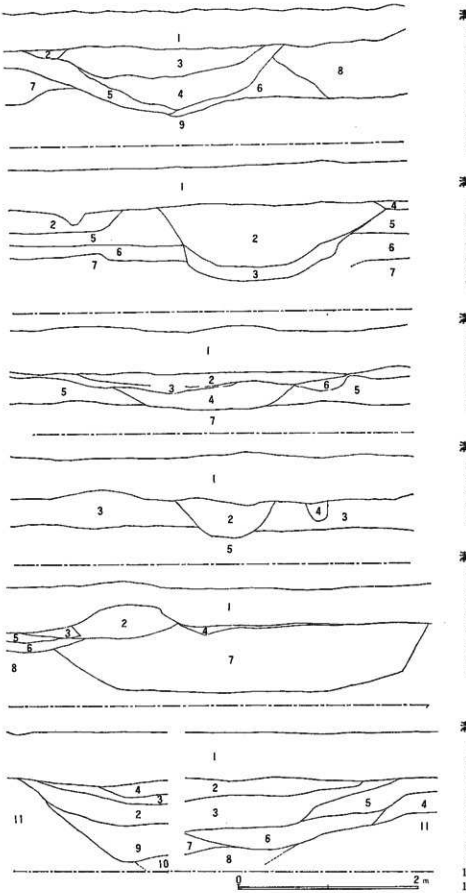
溝15 発掘区域の最も南に検出された、幅2.3m～3.5m、深さ約30cmの規模を持つ自然流路である。溝内には灰黒色粘土・砂利・褐色粘土が堆積しており、溝断面は浅い皿状をなしている。土器片の出土は、上部灰黒色粘土層・砂利層に多く、褐色粘土層には少なかった。これらの出土土器は弥生時代後期から古墳時代初頭までのものであった。なお、本溝もG5Eで溝A（沼沢地）に流入していた。

K地区には、これら5条の溝の他に、西部微高地から溝Aに流れ込む自然流路があった。これが溝13・溝14であるが、ともに幅約1mの浅い小溝で出土遺物も見るべきものがなく、西側が未発掘のため性格は把えることができなかった。

2) 溝A（沼沢地）

K地区西部全域からT地区南部に広がり、両地区の微高地を大きく分断している深い沼沢地が溝Aである。50cm平面では黒色を呈して微高地と明瞭に区別されたこの沼沢地の層序は、下層では複雑をきわめ、統一的な把握が困難であるが、基本的には黒色腐植土層・粘土層・砂層の順に堆積しており、最下層砂層は表土下1.5m内外を測る。これらの堆積層の中には、各溝や微高地から直接流れ込んだ種々様々な、各時期に及ぶ遺物が多量に包含されていた。まず第1層黒色腐植土層からは、自然木を含む大量の木製品を中心とする遺物が出土した。特に、K地区西部第5区域腐植土層には、ほぞ穴のある木材・組物等が多量に流入していたほか、丸鍬未製品・鍬・大足・弓・布巻具等のポピュラーなものから下駄・用途不明の異形木製品・蓋状木製品・線刻木製刀等の出土例を余り見ないものまでが各区域から出土した。これらの木製品の他にも、銅鏃や石鏃が黒色腐植土最下層から出土した。これに対して、土器は粘土層か砂層から出土したものが最も多い。これらの出土土器は各溝から流入しているものもあるため、あらゆる時期のものが混在している。また、各溝の流入口や沼沢地汀線の灰青色粘土上に土師器を中心とした土器が多量に出土した。特にK地区西側第3区域の沼沢地汀線の出土状態は、溝12の出土状態に匹敵するものであった。

さて、溝Aの性格は、発掘区域東方と西方の状況が掴めないので、今のところ充分明らかでないが、居住区域を限るなどの強い性格が在るのかもしれない。すなわち、この沼沢地がT地区南部東方へ更に広がりを持つものであれば、K地区発掘区域東方に予想しうる居住区を囲繞する自然周濠としての性格が考えられるのであるが、結論は今後の調査を待ちたい。



溝1
1. 耕土層
2. 砂利層
3. 含砂黒褐色粘土層
4. 含砂灰褐色粘土層
5. 灰青色砂質粘土層
6. 灰青色砂層
7. 灰褐色砂層
8. 灰色砂礫層
9. 灰黒色粘土層

溝6
1. 耕土層
2. 黒褐色粘土層
3. 灰青色砂層
4. 褐色砂層
5. 灰青色粘土層
6. 灰褐色粘土層
7. 灰黒色粘土層

溝7
1. 耕土層
2. 黒色有機質粘土層
3. 褐色砂層
4. 含砂褐色粘土層
5. 灰青色粘土層
6. 含砂黄褐色粘土層

溝8
1. 耕土層
2. 黒褐色粘土層
3. 灰青色粘土層
4. 灰青色砂層
5. 灰黒色粘土層

溝12
1. 耕土層
2. 赤褐色土層
3. 茶褐色粘土層
4. 灰青色粘土層
5. 含砂灰青色粘土層
6. 灰青色粘土層
7. 黒褐色粘土層
8. 灰青色粘土層

溝A（沼沢地）
1. 耕土層
2. 含粘土灰黒色腐植土層
3. 黒色腐植土層
4. 灰黒色粘土層
5. 灰黒色腐植土層
6. 含粘土黒褐色腐植土層
7. 含粘土黄色腐植土層
8. 灰色砂層
9. 灰色粘土層
10. 含礫砂層
11. 灰青色粘土層

第6図　鴨田遺跡溝遺構断面図

3) ピット

性格不明のピットが三カ所から検出されている。G40E付近に検出されたピット1は、幅東西約1m、長さ南北4m、深さ約30cmを測り、楕円形を呈す。内部には黒褐色粘土とともに弥生式土器1点と少量の土器片が包含されていた。G27F微高地に検出されたピット2は径60cm、深さ約30cmの円形ピットである。内部には灰黒色粘土が堆積しており、弥生式土器片が出土した。また、溝8と溝12とに囲まれたK地区東部第3及び第4区域には、夥しい小ピットが検出された。しかし、この無数の小ピットには規則性がなく、柱穴かどうか判定しにくい上、次に述べる地割り畦の上からも掘り込まれているものもあるため、少なくとも条里制が引かれた以降のものではないかと推定せられる。なお、大きさがまちまちの、このピットからは弥生式土器片や石器が出土した。

4) 地割り畦

滋賀県湖北地方は、現在でも条里制が良く残っている所の一つであるが、当発掘区域内からも、耕土層直下に、条里制のものと考えられる地割り畦がG10列・G15列・G20列というように、約20m間隔の3地点に検出された。幅0.8~1.5mを測り、褐色を呈すこの硬い畦からは弥生式土器片が出土する。なお、G5列・G31列・G36列でも、地割り畦の痕跡を試掘時に検出している。

以上、今回の調査で検出された諸遺構の中で最も注意されたいのは溝8と溝12の人工溝と溝A（沼沢地）である。K地区東部微高地に直交するように掘穿された2条の人工溝とK地区東部微高地を大きく取り囲むが如き溝Aはともに、鴨田遺跡の集落範囲と密接な関係性を有しているようである。溝12に見られた大量の完形土器や摩滅度の低い土器片、溝A内に流出していた住居用材、まるで氾濫水に押し流されたようなK地区西部第3区域内沼沢地汀線における土器出土状態等を総合すると、本遺跡の集落中心部が、K地区微高地東方に隣接していることを感知しうる。そして、この溝8・溝12・溝Aこそは、その住居跡地域を取り囲む、住居地域から伸びて来た人工と自然の重要な遺構と見られるのである。

3. 遺　物

1) 土　器

湖北地方の弥生式土器・土師器研究は、今までに発掘調査された遺跡の絶対数が少ないため、かなり立ち遅れていた。だが、近年遺跡の調査例が急増するにともなって出土土器の量も次第に増加し、当地方における弥生時代から古墳時代にかけての土器の様相がかなり明らかになりつつある。このような状況下において鴨田遺跡の発掘調査が行なわれ、弥生時代中期から古墳時代中期

にわたる多数の土器の出土をみたのである。

鳴田遺跡出土土器は弥生式土器・土師器・須恵器の3種類に大別されるが，須恵器の出土量は非常に少なく，大部分が弥生時代中期から古墳時代前期に属する弥生式土器・古式土師器である。以下，各溝ごとに出土土器の説明を加えることにする。

溝1　T地区北端に位置する溝1から出土する土器は凹線文をめぐらせている例が多く，この手法の盛行をみる弥生時代中期後半・畿内第4様式土器に相当する時期を中心に，古墳時代前期にかけてのものが若干出土する。

〔壺形土器〕　図版1の1～3は器高約50cmをはかる大型の壺で，胴部中位に最大径を有する縦長の器体に，やや外びらきの頸部から大きく外反して，端部がやや内弯ぎみに上方へたちあがる口縁部がつく。口縁部には2条の凹線文，頸部に列点文が施された貼付粘土帯をめぐらせているのが通例である。外面は刷毛目・叩き目により整形されている。この種の壺は畿内地方各地の弥生時代の遺跡から多く出土しており，滋賀県下にも普遍的にみられる土器で，畿内第4様式に属するものである。

図版1の4は大きく外反する口縁部の端部を下方に拡張し，その面に2条の凹線文と竹管文，口縁部上面に列点文がめぐらされている。

図版1の5は胴部中位に最大径を有する算盤玉形の器体に，ゆるやかに外反する頸部と曲折して垂直に近くたちあがる口縁部がつく。口縁部に2条の凹線文がめぐらされている以外，施文はない。

図版1の8は，図版1の5と同じく，胴部中位に最大径を有する算盤玉形の器体に，筒状に近い短かい頸部と水平にのびた口縁部がつき，外面はヘラ磨きにより美しく整形されている。

図版1の9は，器体はやや縦長の形を呈しており，わずかに外反する頸部をへて内傾する口縁部にいたる。器壁はうすくつくられ，器体外面には粗い刷毛目がみとめられる。

図版1の10は，胴部下位に最大径を有する量感のある壺で，底部は大きな平底であるため安定性がよい。器体外面は刷毛目により整形されている。

図版1の11は，球形に近い器体で，口縁部は欠失しているため不明である。底部は凹底を呈する。器面の剝離がはげしいため，文様は不明瞭であるが，頸部に2本の太い直線文，胴部上位に波状文がめぐらされている。胴部上位から底部にかけて全面に煤の付着がみられる。

〔細頸壺形土器〕　図版2の5は，ゆるやかなカーブを描いて外反する頸部に，曲折して内傾する口縁部がつく。文様は口縁部に2条の凹線文・縦位の沈線を施こしている。

図版1の6・7および図版2の1はゆるやかなカーブを描いて外反する細い頸部に，上方に向って内弯しながらたちあがる口縁部がつく。文様は口縁部から頸部にかけて集中しており，凹線文・列点文が配されている。体部は欠失しているものが多く，判然としてないが，おそらく算盤玉形を呈するであろう（図版2の1）。この種の細頸壺は口縁部から頸部にかけての形態により

2種類にわけられるようにおもわれる。すなわち，口径が小さく頸部が極端に細いもの（図版1の6），口径が大きく口縁部から頸部にかけて短かいもの（図版1の7）の2種類である。これが時期差によるものか，あるいは地域差によるものかは，現時点においては判然としない。

〔広口壷形土器〕　図版2の2は，広口の口頸部をもつ壷で，口頸部直下に2個の紐孔が穿たれている。

〔台付無頸壷形土器〕　図版2の3は，底部から直線的にひろがり，体部中位から内弯しながら口縁部にいたる。脚台の破片もほかの溝（溝6・溝7）から2点出土している（図版4の12，図版5の19）。

〔水差形土器〕　図版2の4は，体部は欠失しているため不明であるが，口縁部は上方に向って内弯ぎみにたちあがり，肩部に横位の半環状把手がつく。さらに，口縁部の把手側を弧状に抉りとっている。文様は口縁部付近に凹線文・列点文，把手に凹線文を配している。

この水差形土器は 畿内第3様式土器から 第4様式土器にかけてみられる 特徴的な土器で，本遺跡においても，口縁部から肩部にかけての破片が2点出土している。そのいずれもが口縁部付近に凹線文を めぐらせていることからみて，第3様式 終末から第4様式初頭に 属するものであろう。

〔台付塊形土器〕　図版3の1は，体部下位に稜線をもち，上方に向って内傾しながらたちあがる深い塊部に，ゆるやかなカーブを描いてひろがる脚部がつく。口縁部から体部下位にかけて凹線文・列点文がめぐらされている。

〔甕形土器〕　図版2の6・7・10および8・9などは，胴部があまり張らず，胴部中位から底部にかけて直線的にちぢまり，平底の底部におわる。底部は凹底を呈する例もみられる。文様は口頸部端にのみ見られ，刻目文をめぐらすもの（図版2の6・7・10）と凹線文をめぐらすもの（図版2の8・9）がある。外面は叩き目・刷毛目により整形されている。

図版2の11は，胴部の張りが前述の甕より強く，体部は欠失しているため不明であるが，球形に近いとおもわれる。口頸部は体部より「く」字状に鋭く曲折して外上方にのびる。加えて，口頸部を厚くつくっており，端部に太い直線文をめぐらせる。

図版2の12～15および16は，口径と胴部最大径（胴部中位）がほぼ等しい甕である。口頸部はゆるやかなカーブを描きながら大きく外反し，さらに端部を内傾させるか，あるいはたちあがらせている。体部はあまり張らず，胴部中位から底部にかけて直線的にちぢまり，平底におわる。文様は口縁部・肩部付近にみられ，列点文・直線文・波状文などが配されている。外面は全体に煤の付着がみられ，刷毛目により整形されている。

図版2の17は，S字状口縁を有する甕で，体部は欠失しているが，丸底を呈する球形であろう。

〔高坏形土器〕　図版3の2・3は，口縁部がやや内弯ぎみにたちあがる浅い盤状の坏部に，ゆるやかに外反する脚部がつく。この高坏の口縁部付近には2条の凹線文がめぐらされているた

め、口縁部の破片のみでは、図版1の1～3の壷と極めて類似しているため判別がいたって困難である。

溝2　溝1のすぐ南に位置する溝2は、幅が狭くかつ浅いため出土土器の量もひじょうに少ない。

〔壷形土器〕　図版3の4は、器高50cm程度をはかる大型壷の口縁部の破片である。口縁部に2条の凹線文を配するのが通例であるが、これは2本の凹線文の間に、さらに列点文をめぐらせている。

〔台付無頸壷形土器〕　図版3の5は、胴部中位の張った扁平な器体で、胴部中位から直線的に内傾して口縁部にいたる。口縁部付近には凹線文がめぐらされ、紐孔が2個穿たれている。

〔甕形土器〕　図版3の6は、頸部から大きく外反して口縁部にいたるが、口縁部端は単純におわり、刻目文がめぐらされている。口頸部内面には乱雑な波状文・直線文がみられ、外面にも櫛目により整形されている。

〔坏〕　図版3の7は、須恵器の坏で、たちあがりは短かく内傾し、先端は尖りぎみにおわる。受部はたちあがりよりやや短かく外方へのびる。

溝3　T地区G36FからG32Aにかけてほぼ直線的に流れている溝で、G33付近から南にかけてひろがる黒色有機質粘土層の沼沢地を切っており、須恵器の出土量も各溝のなかでもっとも多い。このことから考えて、溝3は本遺跡においていちばん新しい時期（7世紀後半頃）まで存在していたものとおもわれる。

〔壷形土器〕　図版3の8・9は、口縁部に2条の凹線文をめぐらせるのが特徴であるが、図版3の8・9のいずれも3条の凹線文がめぐらされており、さらに8にはその間に列点文を配する。

図版3の12は、胴部中位に最大径をもつ算盤玉形に近いやや縦長の器体に、やや外びらきの頸部と外反して端部をわずかに内傾させた口縁部がつく。摩滅がはげしいため、文様が不明瞭になっているが、波状文・直線文がめぐらされており、胴部中位から底部にかけて煤の付着がみられる。

図版3の13は、胴部中位から下位にかけて不明瞭な稜線を有する壷で、底部にかけて直線的にちぢまり平底におわる。

〔細頸壷形土器〕　図版3の10は、小型の細頸壷で上方に向ってやや内弯ぎみにたちあがっており、口縁部から頸部にかけて太い直線文・変形波状文・刺突文がめぐらされている。

〔広口壷形土器〕　図版3の14は、球形の器体に、「く」字状に曲折して外上方へのびる短かい口頸部がつく。底部は丸底で、口頸部内面にはヘラによる刻線、胴部中位以下にはヘラ削りがみられる。

〔碗形土器〕　図版3の11は、底部付近は欠失しているため不明であるが、体部から内弯ぎみに口縁部にいたる。口縁部端の内外面に刻目文、口縁部付近に凹線文・変形波状文をめぐらせて

いる。

〔甕形土器〕　図版３の16は、口径と胴部最大径がほぼ等しい縦長の器体に、「く」字状に鋭く曲折して外方へのびる短かい口頸部がつく。この甕は口頸部端に凹線文をめぐらせるのが特徴である。

図版３の17は、体部が欠失しているため不明である。口頸部は大きく外反し、端部を外上方へのばす。外面の整形には櫛目がみられる。

図版３の18は、球形・丸底の器体に、鋭く曲折してやや内弯ぎみに外上方へのびる口頸部がつく。口頸部端の内面をわずかに肥厚させることが特徴である。

〔台付甕形土器〕　図版３の19は、肩部から鋭く曲折して外反する頸部とやや外反ぎみにたちあがる口縁部をもつ。体部は欠失しているために不明であるが、おそらく脚台がつくであろうとおもわれる。

〔小型器台形土器〕　図版３の15は、受皿部を極端に小さくつくる小型器台で、口縁部は一度曲折させてたちあがっている。

〔甑形土器〕　図版３の20は、底部から口縁部にかけて直線的に大きくひらく鉢形を呈し、底部に１孔を有する甑である。

〔坏〕　図版４の１～３は、全体的に浅い坏で、たちあがりは短かく内傾するが、垂直に近いものもある（図版４の１）。３は坏の蓋で、天井部と口縁部との境界は突出して鋭い稜線をなしている。

〔長頸壷形土器〕　図版４の４は、肩部のやや張った扁平な器体で、口頸部は欠失しているため不明であるが、やや外びらきの長い口頸部がつくのであろう。

溝６　K地区北端に位置する溝６は溝７と切り合っているため、両溝の土器が混在している。溝６はその出土土器からみると、溝１とほぼ同時期か若干古い時期にあてられるが、溝７により切られているため、その土器がわずかに混入している。

〔壷形土器〕　図版４の５・６は、口縁部に２条の凹線文をめぐらされた畿内第４様式の大型壷である。頸部はやや外びらきにゆるやかなカーブを描いて外反するのが通例であるが、図版３の２・３の高坏の口縁部と類似しているため判別困難である。

図版４の７は、口縁部は大きく外反し、さらに端部を下方へ拡張させており、その面に４条の凹線文をめぐらせるとともに、丹塗りが施されている。また、口縁部内面にも羽状に斜線文を配する。この器種は東海地方における弥生時代後期の寄道式土器に相当するもので、一般にパレススタイルとよばれている壷形土器である。

図版４の９および10は、ゆるやかなカーブを描いて外反する頸部に垂直ぎみにたちあがるか、あるいは内傾する口縁部がつく。文様は口縁部に凹線文、頸部に列点文がめぐらされている。

図版４の11は、口縁部が大きく外反し、端部は単純におわる。口縁部に刻目文、内面に羽状の

列点文をめぐらせ、さらに口縁部内面には蓋受けとおもわれる瘤状突起がつけられている。

〔細頸壺形土器〕　図版4の13は、細い頸部から上方に向って内弯ぎみにたちあがる口縁部にいたる。口縁部付近に凹線文、羽状の斜線文をめぐらせている。

〔広口壺形土器〕　図版4の8は、胴部中位に最大径をもつ算盤玉形に近い器体に、「く」字状に鋭く曲折して外反する広口の短かい口頸部がつく。施文はないが、口頸部直下に紐孔が2個穿たれており、外面には叩き目・刷毛目がみられる。

〔台付無頸壺形土器〕　図版4の12は、体部が欠失しているため判然としないが、おそらく図版2の3および図版3の5が台付無頸壺の体部であろう。脚部は下方に直線的にちぢまり、端部付近に2条の凹線文を配する。さらに、脚部には大きな円孔が6個（推定）穿たれている。縦位の半環状把手をつけた例もあるが、当遺跡からは出土していない。この器種は畿内第4様式にみられるもので、滋賀県から愛知県にまで少数ではあるが、発見例が報告されている。

〔甕形土器〕　図版4の14・15および16は、胴部のあまり張らない縦長の器体に、「く」字状に鋭く曲折して外反する口頸部がつく。口縁部端には刻目文をめぐらせるものと凹線文をめぐらせるものとがある。

図版4の17は、胴部の強く張った器体に、鋭く曲折して水平に近くのびる口頸部がつく。口頸部端をわずかに拡張させ、その面に太い直線文・刻目文をめぐらせている。

図版4の18・19および20・21は、大きく外反する頸部に、曲折して内傾するか、あるいは垂直に近くたちあがる口縁部がつく。口縁部は無文のもの、列点文がめぐらされているものなどがあるが、特殊な例としては、ヘラによる斜線文をめぐらせたものがある（図版4の19）。胴部には直線文・列点文がみられ、内外面は櫛目により整形されている。

図版4の22は、S字状口縁を有する甕で、体部は球形を呈し、底部は丸底である。器体内面にヘラ削りを施すことにより器壁をうすくつくっている。

〔高坏形土器〕　図版4の23・24は、畿内第3様式にみられる特徴的な器種で、口縁部を水平にひろげ、さらに端部を下方に拡張させて大きな面を形成している。口縁部内端には凸帯をめぐらせており、この凸帯には口縁部より上方へ垂直にたつもの、内傾するものなどの種類がある。口縁部端面には3条の凹線文がめぐらされており、内外面はヘラ磨きにより整形されている。

図版4の25は、体部に稜線がみられない浅い椀状を呈する坏部で、脚部は欠失しているため不明である。内外面はヘラ磨きにより整形されている。

溝7　溝7は溝6のすぐ南に位置しており、その出土土器からみると、時期は古墳時代前期から中期に比定せられ、他から比べると若干新しいものであるが、溝6を切っているため、弥生時代中期後半頃の土器が多く混入している。

〔壺形土器〕　図版5の1～4は、縦長の器体に、やや外ひらきの頸部と曲折してたちあがる口縁部がつく畿内第4様式土器に属する大型壺であるが、頸部が太い筒状を呈する例もある（図

版5の1・2)。口縁部には2条の凹線文をめぐらせるのが通例であるが、特殊な例としては、凹線文間に竹管文(図版5の3)や波状文(図版5の4)が施されたものが存在する。

図版5の5～7は、大きく外反して、端部を上下に拡張させた口縁部をもつ壺で、東海地方における弥生時代後期の寄道式土器に相当するものである。また、口縁部に凹線文、頸部に突帯を配し、内面には稜線を有し、羽状の列点文や斜線文を施した例が多いが、不規則な波状文をめぐらせたものもある(図版5の5)。

図版5の8・9は、大きく外反する頸部に、やや内傾ぎみにたちあるが口縁部がつく。口縁部に凹線文をめぐらせるのが通例であるが、その上に縦位の沈線や肩部に列点文をめぐらせたものもある。

図版5の10は、胴部中位から下位にかけてふくらみをもった器体に、大きく外反する口頸部がつき、端部は単純におわる。外面の整形には叩き目・刷毛目がみられる。

図版5の13～15および16～18は、体部は欠失しているため判然としないが、球形に近い器体に、外びらきの頸部をつけ、さらに曲折して大きく外反する口縁部がつく。いわゆる二重口縁をもつ壺であるが、この壺は鋭く曲折する短かい頸部をもち、口縁部に数条の太い沈線文をめぐらすことが特徴である。

〔細頸壺形土器〕　図版6の1・2は、ゆるやかなカーブを描いて外反する細い頸部に、曲折して内傾する口縁部がつく。口縁部に同心円文、頸部付近に直線文・列点文が配されたものがあり、図版16の10の細頸壺に近い形態のものも存在する(図版6の2)。

図版6の3は、肩部から「く」字状に鋭く曲折する細い頸部をへて、上方に向って内弯ぎみにたちあがる口縁部がつく。口縁部付近には直線文・山形文などが精巧にめぐらされている。

〔広口壺形土器〕　図版5の11は、図版4の8と同型の壺で、胴部中位に最大径をもち、口縁部を水平にのばしている。施文はないが、頸部直下に紐孔が2個穿たれている。

図版5の12は、胴部中位に最大径をもつ縦長の器体に、大きく外反し、わずかにたちあがる口頸部がつく。口縁部端面に凹線文、頸部から肩部に直線文・列点文・波状文をめぐらせ、口縁部直下には紐孔が2個穿たれている。

〔台付無頸壺形土器〕　図版5の19は、体部は欠失しているため不明であるが、おそらく図版2の3や図版3の5の形態を呈するとおもわれる。脚台は下方へ直線的にちぢまり、端部に2条の凹線文をめぐらせている。さらに、大きな円孔が4個(推定)穿たれている。

〔小型広口壺形土器〕　図版5の20～27は、肩部から胴部にかけて張った球形に近いかあるいは扁平な器体に、直線的に外上方へのびる広口の口頸部がつく。底部は丸底か丸底に近い平底で、外面はヘラ磨きにより整形されている。

〔小型鉢形土器〕　図版6の4～6は、小型の手づくねの鉢で、口頸部付近や体部内面には指頭による粗い整形がみられる。

〔甕形土器〕　図版6の7～9および10は、胴部のあまり張らない縦長の器体に、「く」字状に鋭く曲折して外反する短かい口頸部がつく。口頸部端には刻目文をめぐらせたものと凹線文をめぐらせたものとの2種類がある。

図版6の11・12は、胴部の張りが強い球形の器体に、「く」字状に鋭く曲折して外反する口頸部がつく。この甕の特徴としてあげられるのは、頸部に列点文や刻目文を施した貼付粘土帯がめぐらされていることである。

図版6の14・15は、胴部中位に最大径を有する縦長の器体に、大きく外反する頸部と曲折して内傾する口縁部がつく。口縁部には波状文や列点文、肩部付近にも波状文がめぐらされており、内面にも施文された例がある（図版6の15）。

図版6の16～18は、球形の器体に、「く」字状に曲折してやや内弯ぎみに外上方へのびる口頸部がつく。器体の整形は粗く、口頸部端が波状を呈するものもあり、内外面には刷毛目がみられる。

図版6の19は、体部は欠失しているため不明である。口頸部は大きく外反しており、その端部は単純におわる。口頸部内面に乱雑な波状文がめぐらされ、口頸部端にも波状文が施されており、外面には粗い櫛目がみられる。

図版6の20は、胴部の張らない縦長の器体に、大きく外反する頸部と曲折して外上方へわずかにのびる口縁部がつく。整形には櫛目がみられる。

図版6の21～26および図版7の1～3は、S字状口縁を有する甕で、体部は球形を呈し、底部は丸底におわる。外面は櫛目か刷毛目を施したのち、粗いヘラ削りにより整形している。また、内面もヘラ削りをおこなって器壁をひじょうにうすくつくりあげている。

図版7の4・5は、球形の器体に、「く」字状に曲折して内弯しながら外上方へのびる口頸部がつく。黒色を呈するのもが多く、口頸部端内面をわずかに肥厚させるのが特徴である。

〔台付甕形土器〕　図版7の6・7は、胴部上位の張った縦長の器体に、ゆるやかに外反する頸部から曲折して上方にたちあがる口縁部がつく。文様は口縁部に列点文、肩部付近に不規則な直線文・列点文をめぐらせている。

〔高坏形土器〕　図版7の8・9は、口縁部を水平か斜下方にのばして、さらに端部をわずかに下方へ拡張させている。口縁部内側には凸帯をめぐらせ、外面には刷毛目がみられる。

図版7の10・11は、体部中位にかけて直線的にひろがり、上端に向って垂直ぎみにたちあがる坏部をもつ高坏であるが、口縁部のみの破片だけでは図版5の1～4の盌と類似しているため判別が困難である。

図版7の12は、坏部は欠失しているため不明であるが、脚部は丈が高く、筒状を呈する柱状部から大きくひらいて裾部にいたり、端部を少し厚くつくっている。柱状部に太い直線文、裾部に刺突文がみられ、孔は3個穿たれている。

図版7の13は、体部下位に稜線がみられ、上方に向って内弯ぎみにのびる深い椀状の坏部をもつ高坏である。口縁部内面を肥厚させた例が多く、その箇所に乱雑な直線文を配するのが通例であるが、列点文・直線文を精巧に施こしているものもある。

図版7の14は、脚部が柱状部と裾部に不明瞭ではあるが区別できるものもある。柱状部はややふくらみをもつ筒状を呈し、裾部は直線的に大きくひらく。坏部は欠失しているため不明であるが、体部中位に稜線をもち、上端に向って大きく外反する形であろうとおもわれる。

図版7の15～20は、体部下位に稜線をもった浅い盤状を呈する坏部に、筒状の柱状部と直線的に大きくひらく裾部に明瞭に区別できる脚部がつく。孔はなく、整形も図版7の13の高坏のごとく丁寧ではないが、ヘラ磨きがみられる。

〔器台形土器〕　図版7の21は、受皿部と脚部が明瞭に区別できる器台で、外上方へ直線的にのびる受皿部端を上下に拡張して、その面に凹線文をめぐらせている。脚部は欠失しているため不明であるが、受皿部から脚部にいたる曲折部に直線文が配されている例もある。

〔小型器台形土器〕　図版7の22～25は、受皿部と脚部とが明瞭に区別できる小型器台で、受皿部・脚部ともほぼ直線的にひろがっており、無孔である内外面はヘラ磨きにより整形されている。24・25は特殊な形を呈する。

〔蓋形土器〕　図版7の26は、ゆるやかなカーブでひろがる蓋で、孔は3個穿たれており、つまみの部分は欠失している。一見、高坏の脚部のようにおもわれるが、蓋形土器としておく。

図版7の27・28は、扁平な円板形を呈した蓋で、無文のもの（28）と有文のもの（27）とがある。紐孔は28にみられ、4個穿たれている。

〔甕形土器〕　図版7の30は、平底の底部からほぼ直線的に大きくひらく鉢形を呈した甕で、底部に大きな孔が1個穿たれている。

図版7の29は、前述の甕のごとく直線的に大きくひらかない深鉢形を呈するものとおもわれる。底部はやや凹底ぎみの平底で、孔が2個穿たれている。

〔小型甕形土器〕　図版7の31は、底部及び体部下位の器壁に多くの小孔が穿たれた小型の甕で、小型の高坏・器台・鉢などとともに祭祀に使用されたものであろうか。

溝8　溝8はK地区のほぼ中央部を北東から南西にかけて掘られているもので、幅0.8*m*前後、深さ0.5*m*前後の断面V字形に近い形を呈しており、人工的につくられた可能性がつよい。なお、溝8は出土土器の量が少ないため、その時期を判定することはむつかしいが、一応弥生時代中期後半から弥生時代後期終末までにあてられる。

〔壺形土器〕　図版8の1・2は、縦長の器体に、やや外びらきの頸部と曲折して上方にたちあがる口縁部とがつく大型の壺で、口縁部に2条の凹線文をめぐらせるのが通例であるが、図版8の2は5本の凹線文がめぐらされている。

〔浅鉢形土器〕　図版8の5は、胴部の張らない器体に、「く」字状に曲折して、さらに外方

へのびる口頸部がつく。口頸部・肩部に斜線文が配され、外面に刷毛目、内面にヘラ削りがみられる。

〔小型鉢形土器〕　図版8の6は、胴部中位の張った小型の鉢で、胴部中位から口頸部に向って内傾する。底部は平底で、外面の摩滅がはげしい。

〔甕形土器〕　図版8の3は、球形に近い器体に、ほぼ直線的にのびる口頸部がつく甕で、口頸部端に刻目文がめぐらされている。内外面に櫛目、外面に煤の付着がみとめられる。

〔台付甕形土器〕　図版8の4は、胴部上位がわずかに張った縦長の器体に、鋭く曲折する短かい頸部と上方へたちあがる口縁部がつく。口縁部に列点文、肩部に直線文がめぐらされている。

〔高坏形土器〕　図版8の7・8は、脚部上位の破片であるため、どの器種に属するかは判然としないが、ゆるやかなカーブを描いてひろがる器形を呈することから考えて、図版7の14の高坏の脚部とおもわれる。

図版8の9は、体部中位に稜線をもち、上方に向って外反しながらのびる高坏で、脚部は欠失しているため判然としない。

〔器台形土器〕　図版8の10は、受皿部・柱状部・裾部に一応区別できる器台である。受皿部は直線的に外方へのび、端部を下方にわずかに拡張している。筒状を呈する太い柱状部をへて、外反ぎみにひらく裾部にいたる。孔は2段交互に計8個穿たれており、内外面ともヘラにより整形されている。

溝12　K地区南部に位置し、南東から北西にかけて掘られた、幅約3.0*m*、深さ約0.8*m*の規模をもつ溝である。人工的につくられた可能性がつよく、出土土器の量も各溝（沼沢地を除く）のなかでもっとも多い。時期は須恵器の出土をみないことからみて、弥生時代中期前半から古墳時代前期までの間にあてられ、なかでも弥生時代終末期から古墳時代初頭に属するものが多く出土している。

〔壺形土器〕　図版8の13・14は、本遺跡において一般的にみられる畿内第4様式に属する大型壺である。口縁部に2条の凹線文、頸部に列点文かそれを施こした貼付粘土帯を配するのが通例である。

図版8の15・16は、頸部から口縁部にかけて大きく外反しており、端部はわずかに拡張されている。口縁部端面に太い直線文・円形浮文を配したもの、頸部に突帯、口縁部内面に扇形文・斜格文がめぐらされたものがある。

図版8の17は、体部は欠失しているため不明である。ゆるやかに外反する頸部に、端部が上下にたちあがる口縁部がつく。口縁部には紐孔が2個穿たれている。

図版8の21・22は、体部は欠失しているため詳細は不明である。鋭く曲折して外反する短かい頸部に、外上方へ直線的にのびる口縁部がつき、その面に太い直線文を数条めぐらせるのが通例である。

図版8の11・12は、口頸部がやや外びらきの頸部と、大きく外反する口縁部とにより構成されている。口縁部端の形態は11において欠失しているため判然としないが、12の端部はやや下方に拡張され、その面に凹線文と縦位の沈線とが施されている。この壺にみられる特徴は頸部に断面三角形の突帯を数条めぐらすことである。

図版8の18～20は、体部が欠失しているため詳細は不明であるが、口頸部は大きく外反しており、さらに下方へのびているもの（20）もある。口縁部端面には上下両端に刻目文が施されたものや波状文がめぐらされたものがあるが、頸部以下は直線文を数帯配するのが通例である。

図版9の1・2・4および3・6は、胴部の張った器体に、やや外びらきの頸部から曲折して上方にたちあがるか、あるいは単純に外反する口頸部がつく。文様は口縁部・肩部に列点文・直線文がみられるが、無文のものもある（図版9の1・2）。

図版8の23は、胴部中位のやや張った器体に、筒状の短かい頸部がつくが、口縁部は欠失しているため不明である。底部は凹底を呈し、外面にヘラによる整形がみられる。

図版9の5は、球形の器体に、曲折して外方へのびる短かい口頸部がつく壺で、底部は比較的大きな平底を呈する。外面の整形は粗く、刷毛目がみられる。

〔細頸壺形土器〕　図版8の24は、ゆるやかなカーブを描いて外反する細い頸部に、端部が曲折して内傾する口縁部がつく。文様は口縁部から頸部にかけて間断なく施されており、波状文・直線文がみられる。

図版8の25は、ゆるやかなカーブを描いて外反する細い頸部に、上方に向って内弯しながらたちあがる口縁部がつく。文様は口縁部から頸部にかけて集中しており、凹線文・列点文が交互に配されている。

図版8の26は、前述の細頸壺とは異なった特殊な例である。筒状の長い頸部に、外反する口縁部がつき、さらに端部を下方に拡張している。口縁部に不連続の直線文、頸部に直線文、短形を呈した文様がめぐらされており、外面に粗い櫛目がみられる。

〔長頸壺形土器〕　図版9の7～11は、胴部中位から下位にかけて不明瞭ではあるが稜線を有する扁平な器体に、やや外びらきの長い口頸部がつく。7は特に口頸部が長い。凹線文が1条めぐらされている例（11）以外には施文はなく、外面は縦位のヘラ磨きにより整形されている。底部は凹底を呈するものが多い。

図版9の14は、球形に近い器体に、やや外びらきの口頸部がつき、端部は単純におわる。内外面には粗い刷毛目がみられ、胴部内面には輪積み痕ものこる。

図版9の12・13は、胴部中位のやや張った器体に、やや内弯ぎみに垂直にたちあがる口頸部がつき、底部は小さな平底を呈する。外面はヘラ磨きにより整形されており、口頸部端付近に数条の直線文を配する以外は、施文はみられず、特殊な例として台付のものがある（図版19の13）。

〔広口壺形土器〕　図版10の２・３は、胴部中位に最大径をもつ算盤玉形に近い器体に、短かい広口の口頸部がつく。施文のないものが多いが、肩部から胴部中位にかけて直線文と波状文とが交互に配された例もある（図版10の２）。

図版10の５は、胴部中位のやや張った器体に、「く」字状に曲折して外方へのびる口頸部がつき、さらに、端部がわずかにたちあがる。外面に煤の付着がみられ、底部は欠失しているが、大きな平底を呈するとおもわれる。

〔無頸壺形土器〕　図版10の１は、体部から口縁部にかけて直線的に内傾しており、端部を外方に肥厚して段を形成し、その面に２条の凹線文がめぐらされており、さらに、その段に接して紐孔が２個穿たれている。そのほかに、胴部中位にかけて列点文・直線文が交互に配されている。胴部下位は欠失しているため判然としないが、胴部中位に最大径をもつ算盤玉形に近い器体で、底部は平底を呈するとおもわれる。

〔小型広口壺形土器〕　図版９の15～18は、胴部中位の張った扁平な器体に、大きく外反する広口の口頸部がつく。胴部最大径より口径の大きいもの（15・18）、ほぼ同じもの（16・17）があり、底部は小さな平底か丸底を呈する。外面には縦位のヘラ磨きによる整形がみられる。

〔台付甕形土器〕　図版10の４は、体部下位に稜線を有し、上方に向ってほぼ直線的に内傾する。口縁部付近に凹線文・刺形文がみられる。

〔浅鉢形土器〕　図版10の７～10は、胴部中位の強く張った扁平な器体に、S字状に近い口縁部がつく。口縁部に列点文、肩部に直線文・列点文を配するのが通例である。底部は丸底に近い小さな平底を呈し、凹底のものもある（図版10の７）。外面には粗い刷毛目、胴部中位から底部にかけて煤の付着がみられる。特殊な例として、脚台のついたものが出土している（図版10の10）。

〔小型鉢形土器〕　図版10の11～17は、いずれも手づくねの小型鉢で、内面には指頭による整形のあとがのこるものがあり（図版10の15）、口縁部の整形も粗雑である。ただし、図版10の13・14・17は特殊な出土例であり、整形も丁寧である。

〔広口壺形土器〕　図版10の６は、球形の器体に、「く」字状に鋭く曲折して直線的に大きく外反する口頸部がつく。器壁は比較的厚くつくられており、底部は丸底を呈する。外面はヘラにより整形されている。

〔甕形土器〕　図版10の18・19・24および図版10の20～23は、胴部のあまり張らない縦長の器体に、「く」字状に鋭く曲折して直線的に外方へのびる短かい口頸部がつく。口頸部に刻目文を配するものと凹線文を配するものとがあり、外面には叩き目・刷毛目がみられる。図版10の24は肩部付近に直線文・列点文をめぐらせており、沼沢地から出土している壺（図版15の８～10）に類似している。

図版11の５・６は、体部欠失しているため不明であるが、おそらく球形に近い器体に、「く」字状に鋭く曲折して外反する短かい口頸部がつき、さらに、端部が内傾するもの（図版11の６）

がある。この器種の特徴は、曲折部付近に列点文や指頭による押圧が施された貼付粘土帯を配することである。

図版11の2～4は、胴部中位に最大径をもつ縦長の器体に、ゆるやかに外反する頸部と曲折して内傾する口縁部がつく。口縁部・肩部に列点文・波状文・直線文などが配されているが、特殊な例としては、ヘラによる斜線文がめぐらされたもの（図版11の2）がある。

図版11の12～15は、体部が欠失しているため不明である。口頸部は大きく外反して、端部は単純におわる。外面には粗い櫛目がみられ、内面にも波状文・直線文が乱雑にめぐらされており、口頸部端に指頭による押圧文が配されたもの（図版11の15）がある。

図版11の16は、口径と胴部最大径のほぼ等しいやや縦長の器体に、「く」字状に鋭く曲折して外方へ直線的にのびる短かい口頸部がつく。底部は大きな平底で、厚くつくられている。外面に刷毛目、胴部中位から底部にかけて煤の付着がみられる。

図版12の1～5は、球形の器体に、S字状口縁がつく甕で、外面は櫛目か刷毛目を施したのち、ヘラ削りにより整形されたとおもわれ、内面にもヘラ削りが施されており、器壁はひじょうにうすくつくられている。

図版12の6は、球形かそれに近いやや縦長の楕円形を呈する器体に、「く」字状に曲折して外上方へほぼ直線的にのびる口頸部がつき、端部内面を少し肥厚させている。体部の器壁は内面のヘラ削りによりひじょうにうすくつくられている。

図版11の1は、胴部中位のやや張った縦長の器体に、S字状に近い口縁部がつく。すなわち、甕（図版10の18・19・24、図版10の20～23）と台付甕形土器との中間的な形態を呈する。胴部中位から底部にかけて直線的にちぢまり、凹底におわる。口縁部に刻目文、肩部付近に直線文・列点文がめぐらされているのは台付甕形土器の文様構成と同じである。

〔台付甕形土器〕　図版11の7～11は、胴部上位から中位にかけてやや張った縦長の器体に、S字状に近い口縁部がつく甕で、すべて「ハ」字状にひろがる低い脚台を有する。文様は口縁部に列点文、肩部付近に直線文・列点文をめぐらすのが通例であるが、図版11の11は無文となり、口縁部の形態も退化しているとみられるので、やや時期が降るものとおもわれる。

〔高坏形土器〕　図版12の11は、脚部中位以下の破片であるため判然としないが、図版7の12ほど丈は高くなく、裾部にかけてゆるやかなカーブを描いてひろがり、端部を上下に拡張している。脚部中位に凹線文を配し、裾部には小孔が13個穿たれており、内面にはヘラ削りがみられる。

図版12の7・8は、体部下位に稜線をもち、上方に向ってやや内弯ぎみにのびる深い椀状の坏部に、やや内弯ぎみに「ハ」字状にひろがる脚部がつく。外面及び坏部内面はヘラ磨きにより整形され、孔は4個穿たれており、口頸部内面を肥厚させた例が多い。

図版12の12・13は、体部中位に稜線をもち、上方に向って大きく外反する浅い盤状の坏部に、

ややふくらみをもちながら大きくひらく脚部がつく。孔は3個穿たれるのが通例であり、外面・坏部内面は縦位のヘラ磨きにより整形されている。

図版12の9・10は、体部下位に稜線をもち、上方に向って内弯しながらたちあがる深い椀状の坏部をもつ高坏である。脚部は柱状部と裾部に区別されるもの（図版12の9）、柱状部のない裾部のみのもの（図版12の10）がある。文様はひじょうに精巧に施されており、口縁部付近に直線文・刺突文などをめぐらせている。外面及び坏部内面はヘラ磨きにより整形され、無孔のものと4個穿たれるものとがある。

図版12の14は、体部中位から下位にかけて稜線をもち、外上方へ直線的にのびる浅い盤状を呈する坏部に、筒状の柱状部と「ハ」字状に大きくひらく裾部がつく。文様はなく、無孔で、柱状部には縦位のヘラ削りがみられる。

〔器台形土器〕　図版12の15は、受皿部と脚部との区別が明瞭で、受皿部は直線的に大きくひらき、端部を下方に拡張して、その面に凹線文をめぐらせている。外面及び受皿部内面には丁寧なヘラ磨きがみられる。

図版12の16～21は、受皿部は直線的に大きくひらき、端部をわずかに拡張する例もみられるが、単純におわるものが多い。柱状部から裾部にかけては、ゆるやかなカーブを描いてひろがるものと不明瞭ではあるが区別されるものとがある。孔は3個穿たれており、外面及び受皿部内面はヘラ磨きにより整形されている。文様はほとんどみられず、わずかに脚部に直線文がめぐらされた例（図版12の21）がある。

〔小型器台形土器〕　図版13の1は、受皿部がひじょうに小さくつくられており、受皿部最大径は脚部最大径の約3分の2程度である。脚部は内弯ぎみにひろがっており、孔は3個穿たれているとおもわれる。

〔甕形土器〕　図版13の3・4は、平底に近い底部からほぼ直線的に大きくひらく鉢形を呈する甕で、底部に大きな孔が1個穿たれている。

図版13の5は、平底の底部からやや内弯ぎみに上方に向ってたちあがる深鉢形を呈する甕で、前述の甕同様底部に大きな孔が穿たれている。

〔蓋形土器〕　図版13の2は、中高の円錐形を呈する蓋で、中高の部分は水平に切られた一種の摘みである。裾部にかけてはやや内弯ぎみにひらいており、無文・無孔である。

溝15　溝12のすぐ南に位置する溝15はほぼ東西に掘られており、幅・深さとも溝12とほぼ同様の規模を有する。出土土器の量はあまり多くなく、時期は弥生時代中期後半から古墳時代初頭までの間が一応あてられる。

〔壺形土器〕　図版13の7は、口縁部に3条の凹線文を配した畿内第4様式にみられる大型壺である。

図版13の6は、体部が欠失しているため、全体は不明である。肩部から鋭く曲折してやや外び

らきの頸部に、上方に向って内弯しながらたちあがる口縁部がつき、さらに端部を外上方へわずかにのばしている。文様は口縁部内外面に円形浮文・変形波状文・直線文、肩部に突帯がめぐらされており、突帯付近には丹塗りがみとめられる。

図版13の10は、胴部中位に稜線をもつ算盤玉形の器体で、底部は大きな平底を呈する。口頸部は欠失しているため不明である。

図版13の9は、肩部から「く」字状に鋭く曲折して外方にひろく頸部をへて、さらに大きく外反する口縁部にいたる、いわゆる二重口縁をもつ壺である。

〔細頸壺形土器〕　図版13の8は、ゆるやかなカーブを描いて外反する細い頸部に、受口状の口縁部がつく。頸部付近には直線文がめぐらされている。

〔広口壺形土器〕　図版13の13は、胴部中位のわずかに張ったやや縦長の器体に、ゆるやかに外反する口頸部がつく。端部は丸く単純におわり、その面に凹線文がめぐらされている。頸部から胴部中位にかけて、文様が集中しており、直線文・波状文が交互に配されている。

図版13の11は、口頸部がわずかに外反する広口を呈し、口頸部直下に直線文がめぐらされており、紐孔が2個穿たれている。

〔浅鉢形土器〕　図版13の12は、胴部の張った扁平な器体に、わずかに外反する頸部と曲折して内傾ぎみにたちあがる口縁部がつく。口縁部・肩部に列点文のみがめぐらされている。

〔甕形土器〕　図版13の14は、胴部中位のやや張った器体に、「く」字状に曲折して外反する口頸部がつく甕であるが図版10の20～23とは少々異なっている。

図版13の15・16および図版13の17は、ゆるやかに外反する頸部に、曲折して内傾するか、あるいはたちあがる口縁部がつく。口縁部には鋸形文・列点文・刻目文などがめぐらされ、内面には粗い刷毛目がみられる。

図版13の18は、ゆるやかに外反する頸部に、曲折して外方へわずかにのびる口縁部がつく。頸部には紐孔が2個穿たれ、内外面には粗い刷毛目がみられる。

図版13の19および図版13の20・21は、いずれもS字状口縁を有する甕であるが、体部の形態・整形方法に差異がみられる。すなわち、胴部上位が張り、かつ脚台を有する器形で、外面全体に櫛目を施こしているものと、球形・丸底の体部をもち、外面は櫛目か刷毛目を施こしたのちヘラで粗く整形しているものとがある。

図版13の22は、球形に近いやや縦長の器形に、「く」字状に鋭く曲折してやや内弯ぎみにのびる口頸部がつく。口頸部端内面を少し肥厚させるのが特徴である。

〔高坏形土器〕　図版13の24は、体部下位から直線的にひろがり、中位から口縁部にかけては内弯ぎみにたちあがる器形であるが、脚部は欠失しているため不明である。

図版13の23は、体部中位に稜線をもち、上方に向って垂直ぎみにたちあがる坏部に、下方へ直線的にひろく脚部がつくが、脚部端は欠失しているため不明である。内外面ともヘラによる整形

がみられる。

溝A（沼沢地）　G33付近から南にひろがる黒色有機質粘土層は約1m前後堆積しており、一応沼沢地としておく。出土土器は各溝が流れこんでいるため、時期の判定は事実上不可能である。

〔壺形土器〕　図版14の1～3は、縦長の器体に、やや外びらきの頸部と曲折して上方にたちあがる口縁部がつく大型の壺である。文様は口縁部に2条の凹線文、頸部に列点文を施した貼付粘土帯を配するのが通例であるが、凹線文上に縦位の沈線を等間隔にめぐらせた例（図版14の1）がみられる。

図版14の4～6および図版14の7～13は、寄道式土器に相当する例（図版14の4～6）であるが、図版14の7～13は口縁部端を拡張し、その面に凹線文・竹管文・円形浮文・棒状浮文などをめぐらせているため、別種として一括記述しておく。

図版14の14・15および図版14の16・17は、ゆるやかなカーブを描いて外反する頸部に曲折して上方にたちあがるか、あるいは内傾する口縁部がつく。文様は口縁部に凹線文をめぐらせるのが通例であるが、頸部に列点文がみられるものもある。

図版15の17・19～21および図版15の18は、いずれも体部は欠失しているため不明である。鋭く曲折する短かい頸部に、外上方へほぼ直線的にのびる口縁部がつき、その面に数条の太い直線文をめぐらせるのが特徴である。図版15の18は特異な例で、外びらきの頸部をへて、曲折して大きく外反する口縁部にいたるいわゆる二重口縁をもつ壺で、内外面に直線文・波状文・列点文・棒状浮文がぎっしりとめぐらされている。

図版14の18～25および図版15の1～3は、ゆるやかなカーブを描いて大きく外反する口頸部で、口頸部がさらに下方へのびる例（図版14の21、図版15の2・3）もある。口縁部、頸部に波状文・刻目文・直線文、内面に波状文・直線文・瘤状突起がみられる。

図版15の4・5および図版15の6は、胴部のやや張った球形に近い器体に、やや外びらきの頸部から曲折して上方にたちあがるか、あるいは単純にたちあがる口頸部がつく。文様は口縁部・肩部に列点文・直線文・波状文・竹管文がみられる。

図版15の8～10は、体部は欠失しているため不明である。肩部から「く」字状に鋭く曲折して外上方へ直線的にのびる口頸部がつく。文様は口頸部端・肩部に刻目文・直線文・菱形波状文をめぐらせるのが通例のようであるが、無文のもの（図版15の10）もある。

図版15の7は、ゆるやかなカーブを描いて外反する頸部に曲折して内弯ぎみにたちあがる口縁部がつく。口縁部は波状を呈し、内外面に波状文を配した特殊な例である。

図版15の11は、球形の器体にふくらみをもった外びらきの頸部と曲折して水平に近くのびる口頸部がつく。底部は大きな平底であるため安定性がある。外面の摩滅がはげしい。

図版15の12は、球形の器体に鋭く曲折して外反する頸部に、外上方へのびる口縁部がつく。体部下位に稜線がみられ、大きな平底を呈する底部にかけて直線的にちぢまる。器壁は比較的厚く

つくられており、肩部付近に刺突文がみられ、外面はヘラ削りにより整形されている。

図版15の13は、徳利形をした小型壺で、口径と胴部最大径がほぼ等しく、下位に不明瞭ではあるが稜線を有し、大きな平底でおわるため安定感がある。施文はないが、外面は横位のヘラ磨きにより整形されている。

図版15の14～16は、球形に近い器体に、やや外びらきか、あるいは筒状の口頸部がつく。端部は単純におわり、施文もなく、外面には刷毛目が施されたのち、ヘラで整形されている。器形は少しずつ異なっているが一括して記述しておく。

図版15の22および図版16の1・2は、胴部中位のやや張った縦長の器体に、鋭く曲折して大きく外反する口頸部がつく。口頸部は単純におわり、その面に刻目文がめぐらされているものがある。体部には施文がほとんどみられないが、肩部に直線文がめぐらされている例（図版15の22）がある。

図版16の3は、胴部中位から下位にかけて強いふくらみをもつ壺で、口頸部は「く」字状に曲折し、ややふくらみをもちながら外反する頸部をへて、外方へのびる口縁部にいたる。施文はなく、内外面にはヘラによる整形をみる。

〔細頸壺形土器〕　図版16の4～6は、口頸部は大きく外反し、端部がさらに曲折して内傾する。口縁部には棒状浮文・竹管文がめぐらされたものが多く、頸部には直線文を配する。

図版16の7～9は、ゆるやかに外反する細い頸部に、上方に向って内弯ぎみにたちあがる口縁部がつく。体部は欠失しているため判然としないが、算盤玉形を呈するのであろう（図版16の7・8）。口縁部から頸部にかけて凹線文・列点文をめぐらせている。

図版16の10は、筒状を呈する頸部に、受口状の口縁部がつく。口縁部に列点文、頸部に直線文をめぐらせている。

〔長頸壺形土器〕　図版16の11～15は、胴部中位に最大径を有する体部が、下位に不明瞭ではあるが稜線をもつものが多く、底部にかけて直線的にちぢまる。底部は小さな平底で、凹底のものもある。口頸部はやや外びらきの形を呈し、施文はなく、外面に縦位のヘラ磨きがみられる。

図版16の16～19は、胴部中位のやや張った球形に近い器体に、筒状を呈する口頸部がつく。施文はなく、外面には刷毛目がみられる。

図版17の1・2および図版17の3・4は、胴部下位に不明瞭ではあるが稜線をもち、底部にかけて直線的にちぢまる器体で、筒状の口頸部がつく。文様は口頸部付近に直線文が数条めぐらされている以外はみられず、外面はヘラ磨きにより丁寧に整形されている。図版17の3・4は特殊な形態を呈するが、図版17の4は小型広口壺に入れてもさしつかえないかもしれない。

〔短頸壺形土器〕　図版17の12・13は、球形に近い器体に、わずかに外反する口頸部がつく短頸壺で、口頸部直下に紐孔が穿たれた例（図版17の12）もある。

〔小型広口壺形土器〕　図版16の20～29および図版17の5～12は、胴部中位の張った扁平な器

体に、直線的に外方へのびる口頸部がつく。体部、口頸部とも少々異なるが、時期差によるものであるため一括しておく。外面はヘラにより丁寧に整形されている。

〔水差形土器〕　図版17の14は、ゆるやかに外反する頸部から上方に向って内弯ぎみにたちあがる口縁部にいたり、肩部に横位の半環状把手がつく。口縁部の把手側を刳りぬいており、体部は欠失しているため不明である。口縁部付近に凹線文・羽状の列点文、頸部から肩部にかけて直線文・簾状文・波状文がぎっしりめぐらされている。

〔手焙形土器〕　図版17の15は、胴部の張った浅い鉢形の器体に、片方が大きくひらいた半ドーム状の覆いをつけた特異な土器である。胴部中位から底部にかけて直線的にちぢまり、丸底に近い小さな平底におわる。胴部中位に刻目文を施こした突帯がめぐらされている以外は施文はみられない。覆い下位の両側には耳がつけられ、内外面は粗い刷毛目により整形され、体部外面にはヘラ削りがみられる。

この器種は中部瀬戸内・畿内・伊勢湾沿岸・東海地方の各地にみられ、特に大阪府・奈良県から愛知県にかけて多く分布する。時期は弥生時代後期から古墳時代前期までの間が一応あてられており、畿内地方には弥生時代後期に属するものが多く出土している。

〔浅鉢形土器〕　図版18の３～６は、胴部中位の強く張った扁平な器体で、底部にかけて直線的にちぢまる。底部は丸底に近い小さな平底で、凹底を呈する例もある（図版18の５）。施文は少なく、口縁部の形態にも退化現象がみられるため（図版18の３は除く）、浅鉢のなかで新しい時期（古墳前期初頭）に入るとおもわれる。

〔小型鉢形土器〕　図版17の16～20は、手づくねの小型鉢で、口縁部端の整形は粗雑である。内面には指頭による整形がみられるものがあり（図版17の18）、整形に叩き目の施された例（図版17の20）も存在する。

〔鉢形土器〕　図版17の21・22は、平底の底部から内弯ぎみに外上方へのびる。とくに22は筒状を呈した特異な例である。

〔台付椀形土器〕　図版17の23・24および図版18の１・２は、体部下位に稜線を有する深い椀部にゆるやかに外反する脚部がつく。脚部端は単純におわり、孔が３個穿たれている。施文はないが、外面が縦位のヘラ磨きにより整形されている。下位の稜線が不明瞭な例（図版18の２）、椀部が球形の体部に、短かい筒状の口頸部のついた器形を呈する例（図版17の24）なども出土している。

〔台付椀形土器〕　図版17の25は、体部は欠失しているため不明であるが、おそらく、直口の椀に、「ハ」字状の脚台がつく。台付椀であろう。脚台には大きな円孔が５個（推定）穿たれている。

〔壺形土器〕　図版18の７～９は、胴部のあまり張らない器体に、「く」字状に曲折して外上方へのびる口頸部がつき、端部に凹線文をめぐらせることが特徴であるが、図版18の７にはみられない。外面は叩き目・刷毛目により整形される。

図版18の24は、「く」字状に鋭く曲折する頸部に刻目文が施された貼付粘土帯をめぐらせるのが特徴である。

図版18の18・20～22および図版18の19は、胴部中位に最大径を有する器体に、ゆるやかに外反し、さらに曲折して内傾するか、あるいは上方にたちあがる口頸部がつく。文様は口縁部内外面・肩部から胴部中位にかけてみられ、列点文・直線文・波状文などがめぐらされ、外面に煤が付着している場合が多い。図版18の23は口頸部の形態が異なっており、大きく外反して、端部は単純におわっている。

図版19の6～8は、胴部のやや張った縦長の器体に、やや内弯ぎみに外上方へのびる口頸部がつき、端部は単純におわり、波状を呈するものがある。

図版18の11～16は、口頸部はゆるやかに外反し、端部が単純におわる。その面に刻目文がめぐらされている例が多く、指頭による押圧文もみられる。外面には粗い櫛目、内面には波状文・直線文が乱雑に配されている。

図版18の10は、口頸部はゆるやかに外反し、さらに曲折して外上方へたちあがる。体部は欠失しているため判然としないが、あまり胴部の張らない器形であるとおもわれる。整形には櫛目がみられ、口頸部・肩部に直線文がみられるだけで、そのほかに施文はない。

図版19の1～5は、胴部中位のやや張った器体に、「く」字状に曲折して外上方へやや外反ぎみにのびる口頸部がつく。底部は平底を呈しており、凹底の例が多い。施文はなく、外面全体には刷毛目がみられる。

図版20の2～6・12～14および図版20の7～11・15～18は、いずれもS字状口縁をもつ甕であるが、脚台がつくものと丸底のものとにわけられる。前者は胴部上位の張ったやや縦長の器体を呈し、外面全体に櫛目がみられる。一方、後者は球形・丸底を呈し、外面は櫛目か刷毛目を施こしたのちヘラにより整形されているとおもわれる。

図版21の1～6は、球形が楕円形を呈する器体に、「く」字状に鋭く曲折して外上方へのびる口頸部がつく。口縁部内面をわずかに肥厚させることが特徴である。外面には刷毛目・煤の付着がみられる。

図版18の17は、胴部上位のやや張った器体に、「く」字状に曲折して上方へたちあがる口頸部がつく平底の小型甕である。口縁部と肩部に列点文・直線文がみられ、器壁は比較的厚くつくられている。

図版21の8は、丸底・球形の器体に、外上方へのびる口頸部がつく。外面には刷毛目・煤の付着がみられる。

図版21の9は、球形の器体に、「く」字状に曲折して外上方へのびる口頸部がつく。外面には粗い刷毛目がみられ、胴部中位から底部にかけて煤が付着している。底部は丸底に近い平底で、凹底を呈する。

〔台付甕形土器〕　図版19の9～12および図版20の1は、胴部中位に最大径を有する縦長の器体に、「く」字状に曲折して上方へたちあがる口頸部と「ハ」字状にひらく低い脚台がつく。口縁部・肩部に列点文・直線文がめぐらされているものと無文のものとがある。

〔高坏形土器〕　図版21の10・11は、特徴的な口縁部を有する高坏である。口縁部は水平にのび、さらに、その端部を垂直に下方へ拡張している。口縁部内側には凸帯を1条めぐらせている。無文のものが多いが、口縁部に2条の凹線文をめぐらせたり、特殊な例では、水平部分に斜格子状の暗文、口縁部端面に凹線文・円形浮文・縦位の沈線をめぐらすものがある（図版21の11）。いずれも内外面は縦位のヘラ磨きにより整形されている。

図版21の12は、直線的にのび、体部中位から内弯ぎみに上方にたちあがる浅い盤状の坏部である。脚部は欠失しているため判然としないが、おそらくゆるやかに外反しながらひらく形であろう。

図版21の13～15および図版21の16・17は、いずれも坏部は欠失しているため不明である。脚部は丈の高いものと低いものとに区別されるが、いずれも大きく外反して端部は下方に拡張されている。文様は胴部中位・端面に凹線文が太い直線文がめぐらされており、小孔が多数穿たれている（図版21の13—8個、14—36個、15—14個）。

図版22の4～9は、体部下位に稜線を有し、外上方へやや内弯ぎみにのびる坏部に、内弯しながらひろがる脚部がつく。口縁部内部を帯状に幅広く肥厚させ、その部分に粗雑な直線文をめぐらせている例が多い。

図版22の1～3は、体部中位に稜線をもち、上端に向って大きく外反する坏部に、ゆるやかなカーブを描いて大きくひらく脚部がつく。施文はみられない例が多いが稜線上に刻目文がめぐらされているものがある（図版22の1）。外面及び坏部内面は縦位のヘラ磨きにより整形されており、孔は3個穿たれるのが通例である。

図版21の18～21は、体部下位に稜線を有し、上端に向って内弯ぎみにたちあがる深い椀状を呈する坏部で、「ハ」字状に大きくひらく低い脚部がつく。文様は口縁部付近と脚部にみられ、精巧に施文された例もあるが、沼沢地出土の高坏は直線文がめぐらされているのみである。

図版21の22は、半球形の坏部に、「ハ」字状にやや内弯しながらひろがる丈の低い脚部がつく。外面及び坏部内面はヘラにより整形されており、施文はない。

図版22の10は、坏部はやや内弯ぎみに外方へ直線的にのび、筒状を呈する短かい頸部をへて、内弯しながらひろがる裾部にいたる。外面及び坏部内面には縦位のヘラ磨きがみられ、孔は4個穿たれている。

図版22の11～15は、体部中位か下位に稜線を有し、外上方へ直線的にひらく浅い盤状の坏部に、柱状部と「ハ」字状に大きくひらく裾部に明瞭に区別される脚部がつく。施文はないし、孔も穿たれていないが、柱状部に粗いヘラ削りがみられる例が多い。

図版22の19は、体部下位に稜線を有し、上端に向って直線的にたちあがり、端部をさらに内傾させた特異な形をした坏部をもつ高坏である。脚部は欠失しているため不明である。

図版22の20は、ゆるやかに外反しながらひろがる高坏の脚部で、外面には粗い刷毛目がみとめられる。坏部は欠失しているため不明である。

〔小型高坏形土器〕　図版22の16～18は、坏部は体部中位に稜線を有し、上端に向ってわずかに外反しながらのびる。一方、脚部は直線的にひろがり、孔が4個穿たれている。外面及び坏部内面は縦位のヘラ磨きにより整形されている。図版22の17は脚部がつよく外反しながらひらいており、丈も低い。

〔器台形土器〕　図版22の21・22および図版23の1～4は、いずれも受皿部と脚部とに区別される器台で、受皿部はほぼ直線的に外方へのび、脚部はゆるやかに外反しながらひろがるものや直線的に近くひらくものがある。受皿部も微妙に異なっている。外面及び受皿部内面はいずれもヘラ磨きにより整形されており、施文はなく、孔は3個穿たれている。

図版23の5は、やや外反ぎみにのびる受皿部、太い筒状を呈する柱状部、ほぼ直線的にひろがる裾部に区別される器台で、外面及び受皿部内面はヘラ磨きにより整形されている。

図版23の6は、受皿部・柱状部・裾部に区別されるが、前者の器台（図版23の5）とは異なり、ほぼ上下対象である。受皿部径と裾部径とがほぼ等しく、どちらも直線的にのびる。柱状部は筒状を呈するが、ひじょうに短かい。内外面はヘラ磨きにより整形されている。

図版23の7・8は、受皿部と脚部とに区別できる器台で、外反しながらのびる受皿部に、「ハ」字状にひろがる脚部がつく。孔は穿たれておらず、外面は刷毛目が施されている。

図版23の13は、受皿部と脚部とに区別される器台で、直線的にのびる受皿部に、やや外反ぎみにひろがる脚部がつく。内外面は縦位のヘラ磨きにより整形されており、脚部は波状文・直線文がめぐらされている。

〔小型器台形土器〕　図版23の9・10は、脚部にくらべて受皿部を小さくつくっており、脚部の約3分の2程度の大きさである。

図版23の11・12は、受皿部と脚部に区別される小型の器台で、器壁はひじょうにうすくつくられている。

〔甕形土器〕　図版23の19・20は、大きな平底を呈する底部から大きくひらいて口縁部にいたる。底部に大きな孔が1個穿たれており、内外面には粗い刷毛目がみられる。

図版23の17・18は、大きな平底から上端に向ってたちあがる深鉢形を呈した甕で、底部に16個の小孔が穿たれた特殊な例もある（図版23の17）。

〔小型甕形土器〕　図版23の21は、体部は欠失しているため不明であるが、平底の底部と胴部下位に11個の小孔（現存部分）が穿たれている。

〔蓋形土器〕　図版23の14・15は、笠形を呈する蓋で、下端に向ってゆるやかに外反してい

る。中高の摘みの部分は水平に切られており、中空である。端部付近に刻目文がめぐらされている以外に施文はなく、外面には刷毛目がみられる。紐孔は4個穿たれている。図版23の14は少々疑がわしいが、この項に入れておく。

〔坏〕　図版23の22～24は、たちあがりは短かく内傾しており、先端は丸みをおびておわる。受部もたちあがりとほぼ同じ長さで、水平に近くのびる。底部にはヘラによる整形がみられる。

図版23の24は天井部と体部との境界が不明瞭になっている蓋である。

ピット1　溝1のすぐ北に位置するピット状の遺構は調査区域の最北端であるため、全体を明らかにすることができなかった。出土土器も少なく、時期の判定は困難であるが、ほぼ弥生時代後期前半頃にあてられるとおもわれる。

〔壷形土器〕　図版23の25は、胴部下位に最大径を有し、底部は大きな平底を呈するため安定感がある。口縁部は筒状を呈し、端部は単純におわる。内面には整形が粗雑なため輪積み痕が明瞭にみられ、外面は粗い刷毛目により整形されている。

〔甕形土器〕　図版23の26は、体部から直線的にひろがり、上端は垂直に近くたちあがっている。さらに、内面に1条の凸帯がつけられている。口縁部付近には貼付粘土帯がめぐらされており、その上に円形浮文がつけられている。

〔甕形土器〕　図版23の28は、体部が欠失しているものが多いため、その形態は不明である。肩から大きく外反して単純におわる口縁部にいたる。文様は肩部に直線文、内面に波状文・直線文がみられるが、いずれも粗雑な施文である。頸部には粗い櫛目がみとめられる。

図版23の27は、ゆるやかに外反する頸部に、端部が外上方にのびる口縁部がつき、端面にはヘラによる斜線文がみられる。頸部内外面は粗い櫛目により整形されている。

ピット2　T地区南端のG27F付近で検出されたものである。このピット内から特異な土器が少量ではあったが出土した。時期は弥生時代中期中頃にあてられるとおもわれる。

〔壷形土器〕　図版23の30は、肩部から口縁部にかけて外反する際に、頸部で一度ふくらみをもたせた器形で、口縁部端を内傾させている。文様は口縁部端面に竹管文、頸部に竹管文・斜格文・肩部から胴部上位にかけて重弧文・竹管文・直線文がめぐらされており、外面に刷毛目がみられる。

〔細頸壷形土器〕　図版23の29は、ゆるやかに外反する頸部に、曲折して内傾する口縁部がつく。文様は口縁部から肩部にかけて等間隔に配されており、列点文・簾状文・直線文・刺突文がめぐらされている。

2）石　器

本遺跡より出土した石器の数は、前記の土器の量に比較すれば、決して多くない。しかし、それらの内でも比較的数の多いものとしては、砥石・石斧類および打製石鏃などを挙げることがで

きる。もちろんこれらの他にも磨製石鏃等の出土もみられたが，それらの数はきわめて少ない。

砥石　この類のものは非常にきめの細かい材質の石を利用した小形のものと，粗い材質の石を利用した不定形のもの，および条痕が1～数条残す砥石の3種に分けることができる。しかし，条痕を残すものの多くは，前2者を利用したものが多く，条痕のみを有するものはきわめて少ない。図版31はこの種の主要なものだけを集めたものであるが，その多くは小形のものである。

図版31の1は，粗砂岩を利用したもので，方柱状の材料の3辺に，断面がV字状をなす1～3条の条痕を有している。これは溝A（沼沢地）の砂層から発見された。

同図版の2および3は，扁平な材石の上下両面に浅く弯曲する摩り痕を残す他に，片側面に段状の擦痕が残こされている。この種のものはこの2例の他にも類似したものもあるが，扁平な材石を用い，しかも片側面のみに段状摩痕を残すなど，特徴が一致している。なお，この両例とも溝A（沼沢地）内より検出された。

同図版の4・10は，条痕のみを残すもので，他のように弯曲する摩り痕は認められない。この条痕には断面がV字状のものとU字状のものの2種が認められる。

同5は扁平な，やや縦長の石材を用い，その上下2面に弯曲した摩り痕を残しているが，その片面には3条の浅い条痕が認められる。そして片側面には断面U字形の深い条痕が残こされている他に，両側面の一部が凹状に摩り込まれている。これは溝7より出土した。

同図版の6および7は，非常にきめの細かい石を用いたもので，いずれも整美な方柱状を呈している。また，同図版の8は，直径3㎝程度の丸い石に1条の摩痕を有するもので，粗い砂岩を利用している。なお，砥石の類は，これらの他にきめの粗い砂岩を利用した大形の粗砥石が少なからず発見されているがその形状は一定していない。

石斧　これは主として太型蛤刃石斧・撃形石斧・扁平片刃石斧・柱状片刃石斧等に分類されるが，この内蛤刃石斧の数が最も多い。

蛤刃石斧の主要なものは図版32に掲げたとおりであるが，完全な姿で残こされているものは一つとして無く，いずれも半欠している。

撃形石斧は図版32の1・2の2点のみしか数えることができないが，特に1の刃部は鋭利に研磨されている。

また，小型扁平片刃石斧は全部で4点を数え，それらは図版32に示したとおりであるが，この内3は比較的肉厚で，基部が欠損している。また，図版32の10は，原礫面を残す剝片の先端部を非常に鋭利に研磨し，刃部をつくり出しており，これも小型扁平片刃石斧としての機能を持つものと考えられる。

図版32の9と10は，柱状片刃石斧の刃部であるが，基部が欠損している。おそらくこの2点とも抉入石斧と思われるが，抉入した部分を残すものは1点も発見されなかった。

石鏃　これには打製石鏃・磨製石鏃の両種がある。この内磨製石鏃は図版32の11～14の4点の

みしか発見されなかったが、12は非常に整美なもので、縦長の2等辺三角形状を呈する。これら4点のいずれもはサヌカイトの剝片を材料としているが、その両縁は非常に鋭い。

一方、打製石鏃は図版108に示したように、三角形状のもの、葉形を呈するもの、舌を有するものなど種々の形態があり、総数28点を数える。

図版32の7はサヌカイトを材料としたもので、両面研磨され、その両側縁は鋭利に仕上げられている。そしてこれの裏面が凸レンズ状に研磨されているのに対し、表面は凸帯を造り出し、その中軸に稜をもたせている。これは石剣の破片とも考えられるが、確かでない。

図版32の17はサヌカイトを材料にした小型の打製石斧状の石器であって、その両端には打撃痕が著しく残されている。

なお、こうしたものの他に図版32の18・19等の石器も出土している。前者はサヌカイトの横剝ぎの剝片を利用した掻器状のものであるが、後者はチャート製の断面三角形を呈する小型の石器である。また、過日当遺跡の概要報告書に掲載したようなサヌカイト製の石槍や石鋸状石器・石錘も各1点ずつ発見されているが、こうしたものの他にも石庖丁の小さな破片が2点、環状石斧の破片と思われるものも2～3点発見されているし、また、図版32の20に示した石製の紡錘車も1点発見された。

3) 木　器

木刀（図版33の1）　現存長35.7cmで、先端部が欠損している。把は長さ11.1cm、厚さ1cm、幅は棟側に対して刃部側を大く弯曲させており、2～3cmある。把頭は頭椎風に作り出している。身は、鞘を着装した状態を示すらしく片面に文様を刻み込んでいる。幅は現存部で2.7～3.3cm、厚さは0.9～1.2cm。関は、身が鞘に隠れるため明瞭でないが、把の表現からして、刃の側に段をつけた刃関にしているのだろう。なお、把の上方部に径2㎜足らずの穴があいており、何かに吊したものかと考えられる。本品は祭祀用品かと思われる。

下駄（図版33の6）　現用しているものと全くたく同一形態のものである。二枚の歯は一木から作り出され、平面楕円形で長径24.9cm、短径13.3cm、高さ3.8cmを測る。歯は外側を垂直に、内側を斜めに削り落している。鼻緒をつける穴は前方に1個、後方に2個で、前方の1個は歯の外側、後方の2個は歯の内側にあけられている。また、前方の穴は左側に偏してあいており、本品が右足用であることがうかがえる。

農耕具（図版34の1・2・4・5）　1は大足で、長さ46.8cm、幅12.3cm、側面を両端に向って削り落しただけで、端部は何等細工されない。幅広くなった中央部には、足を固定させるための鼻緒の穴が3個つくのが普通であるが、本品には認められない。しかし、この部分には、長さ22.2cm、幅8.3cmの左足の磨滅痕が残っており、未製品でもない。また、両端部にほぞ穴の細孔が穿たれている。前方部に径8㎜の孔が中央部に1個、後方部に径3㎜のものが1個（孔の位置

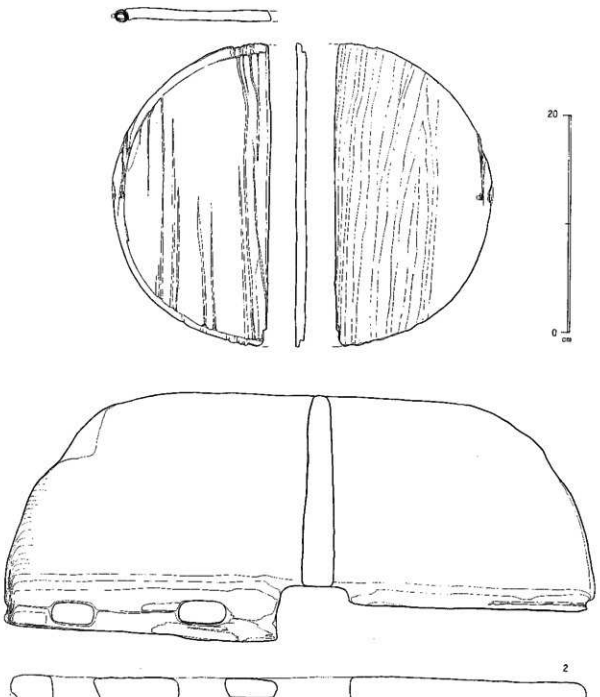
から本来は2個であったと考えられる）残っている。これは、大きな梯子型の枠を取り付けるためのものと考えるのが普通であるが、足を固定する鼻緒の穴がないことを考え合わせると、鼻緒穴を兼ねていたのかもしれない。

2は3分の1程度を残すもので、柄は欠失しているが、現状では、身に柄を着装すべき膨起部の痕跡が認められず、むしろ、身に対して直線的に、一本から作り出していると考えられるので、鋤とし得る。先端部が欠失しているが、現存長46㎝、身の長さ35㎝で、厚さは1㎝前後。2が柄と身を一本から作り出した本格的な鋤と考えられるに対し、5は、身は内弯し、その身に一方から穴を穿ち、身の頭部に短い軸を作り出し、方穴に柄を通して軸部で結束する類の鋤である。現存長23.2㎝、身の長さ18㎝。幅は身が11㎝、軸が基部で3.9㎝。柄は、方穴の幅や軸部の幅から推して幅3㎝程のもので、身に対して20度程の開きを持つ。

4は、いわゆる丸鍬かと思われる。ただ、現存部に柄の着装痕が認められない。縦23.3㎝、横23㎝の方形で、上方部に隆起の頂部がある。刃部は磨滅しているが、ほぼ、それ近くまで遺存していると思われる。裏面は平坦で、表面は、隆起の頂部から七方向に斜面を削出し、頂部も削痕が認められる。厚さが6.5㎝もあり、柄の着装部が認められないことから、未製品である可能性もある。

容器（図版35の1・2、第7図の1）　図版35の1は把手と四脚の付く盤である。全長55.8㎝、幅24.1㎝、高さ4.9㎝、深さ2.3㎝で、把手は基部で径2.3㎝、端部を幅広くしていて3.7㎝を測る。これは別木を着装したものでなく、器体と同一木から作り出している。上端より1.8㎝下方に付き、端部に向って、若干上反りさせている。脚は、四隅に4脚が削り出されている。乳頭状の脚で基部の径3.4～4.2㎝、面に接する部分は径1.8～2.4㎝程の平担面を作って安定を計っている。脚の高さは約1.3㎝程である。このような特徴の他に、この盤の顕著な特色は、把手の付く短辺側の一隅に、14×12㎝程の方形に近い作り出し部を設けていることである。この作り出し部は、本品と全くたく同一形態のものが京都市南区久世遺跡から出土しており、未加工部でない事は確実であるが、単なる容器とする以外に別途の用途を考究する必要がある。しかし、現段階では不明である。

図版35の2は、槽の底板である。現存長67.1㎝であるが、側板の受部を復原すると71㎝程になる。幅は37.7㎝、ほぼ2分の1を残すと思われるので、復原値は56㎝程。隅を丸くし全体形は小判形になる。側板は桜の樹皮を利用して、底板に垂直に立てて結束されたらしく、その痕跡が残っている。すなわち、幅4㎝程の側板の受部を内底面より5㎜程低くして作り出し、この段落の側面に接して側板を立て、受部と内底面に各1孔を穿ち、桜の樹皮を通して底板と側板を結束している様子が知れるのである。側板の厚さは、結束孔の位置から5㎜程と考えられる。結束孔の位置は長辺側に2個、短辺に推定1個、四隅に各1個が穿たれている。なお、内底面の側板に接する付近に、径2㎜弱の小孔が見られるが、その効用については明らかでない。



第7図 鴨田遺跡出土の木器

第7図の1も同じく槽の底板であるが、平面円形の小型品である。やはり2分の1程を残す。現存部での最大径は27.8㎝。側板の受部の幅は8㎜程で、結束部の痕跡が一個所見られる。図版35の2と同じ結束法を示すが、結束孔の位置は、内底面側のものが、受部の段落の下段部にある点相異する。側板の厚さは4㎜程である。

その他 図版33の2は環状の頭部に脚部を作り出したもの。高さ12.1㎝、環状部は径4.4㎝で

1.7～2.0㎝の楕円形に近い穴があく。脚部は、径1.6㎝程の棒状で、端部を開いて高杯の脚に似る。器面はナイフ状のもので細かく削られている。用途は不明。

図版33の3も完形品であるが用途不明。若干弯曲した径2.3㎝の棒状品に、幅1.5㎝の平坦面をつくる。その対面の両端及び中程に、高さ1～4㎜程の凸帯を作り出している。また、両端部は斜めに削り落している。長さ19.1㎝で、器面は細かく丁寧に削られ、磨きをかけたようになっている。

図版33の4は、棒状品と端部に切り込みを入れたものが組み合う。棒状品は、径1.1㎝、現在長15.4㎝で端部は丸く、こげている。他方は、一辺1.3㎝の不整形な角材で、現存長12.5㎝。端部は、9㎜程を残して斜めに切り込んでいる。端部より7.5㎝程のところに、径8㎜、深さ1㎝程の孔があり、この部分に棒状品が垂直に立つ。貫通しておらず、孔の内面には、やはり、こげ目が認められる。火きり具のようであるが、むしろ、別の用途のものである可能性も強い。

図版33の5は、径8.1㎝、長さ11.1㎝の円柱状材の中程を、深さ1.2㎝～1.5㎝程の切り込みを入れたもの。大型の浮きかと思われたが、両端部に把手状のものが削り出されていた痕跡が認められ、むしろ、別の用途のものかと思われる。

図版34の3は、厚さ8㎜程の板に、5カ所に孔を残すもの。

図版34の6は、厚さ8㎜の板材で、長さ23.2㎝、幅は、長辺の中程に向って削り込んでおり、15～17.2㎝。上端部の両側に、径1.6㎝の孔を穿ち、その内側の中央部には径6㎜程の小孔を2個穿っている。また、下方部の幅において中程にも、径2㎜程の孔を2個あけている。用途は不明。

図版34の7も厚さ1.7㎝程の板に孔を穿つもの。孔は、現存部の長側辺側に3個が一直線に並び、その内側にも一方に偏して2個が穿たれている。

図版34の8は、厚さ1㎝、長さ20㎝、幅12.5㎝の板材で、下端部両端とと板の中程に2個ずつの小孔（径2～3㎜）があけられている。小孔の配置は下駄の鼻緒穴状である。板の中程の小孔の間には細く、浅い溝が走っており、あるいは糸状品を通した痕跡かと思われる。一種の履物であるかもしれないが、確証はない。

第7図の2は、ほぼ2分の1を残すかと思われるホゾ穴のある板状品。現存長54㎝、幅23㎝。欠損している側面の中央部に、一辺6.3㎝程の方形のホゾ穴があり、その片側に、長径4～4.3㎝、短径2㎝の小判形のホゾ穴が2個並ぶ。その反対側は欠失しているが、方形のホゾ穴を軸として対称にホゾ穴を設けていたものと考えられる。もし、本品が2分の1程を残すものとするなら、机や椅子等考え考難く、むしろ、中央部に比較的大型のホゾ穴が付くことから、ネズミ返しのようなものであるかもしれない。

図版36の1は全長46㎝で両端に長さ3.4㎝の把手状の作り出しがある。横断面は楕円形で、長径2.7㎝、短径1.8㎝。布巻具かと思われるが、唐古遺跡出土品のように、背部にV字形の切り込

みがない。

図版36の2も端部に把手状の作り出しがあるが、この場合、一方のみに付く。他端は丸く削り落している。現存長38.5㎝。横断面は半円形であるが、これは欠損しているためで、本来径2.5㎝の棒状品。

図版36の3は長さ37.6㎝、幅3.8㎝、厚さ1.6㎝。端部は、一方を斜めに、他方を丸く削り落している。横断面は、裏面に幅2.4㎝程の平坦面をつくり、表面は山形に丸くしている。

図版36の4～6はいずれも棒状品で、端部に抉りを入れているもの。4は、現存長24.4㎝、幅1.8～2.5㎝、厚さ1.7㎝。端部より4㎝程のところで深さ3㎜程切り込み、端部に向ってペン先状に削っている。抉りは側面部だけで、表・裏面にはない。5は、現存長31.2㎝、径1.9㎝の棒状品で、端部より2.5㎝程の部分から2～3㎜の厚さに削込み、端部を丸く仕上げている。6は現存長45.1㎝、横断面玉子形を呈し、径2.2㎝。端部より6㎝程のところから端部に向って5㎝程斜めに削り込み、深さ4㎜程で切り落している。

これら抉りのある棒状品で、5と6は丸木弓の一部分である可能性があるが、糸の着装痕は認められない。

以上、本遺跡出土の木製遺物のうち、図に表示したものの概略であるが、その他に、杭状品、ホゾ穴のある建築資材、加工痕の認められるもの、自然木等の出土を見ている。

4）その他

ここでは、前述した土器・木器・石器以外の遺物を一括して記載する。

土錘　これはいずれもいわゆる土製丸玉と呼ばれるもので、五個の出土をみた。その詳細は表1に示すとおりであり、形態はいずれも球状をなし、中央に1孔が縦に貫通し、穿孔は片方から行なわれている。色調は、図版37の3・4・5が褐色を、図版37の1・2は灰黒色を呈する。

第1表　鳴田遺跡出土の土錘一覧表

図版37	径 (㎝)	重 (g) 量	出土地G番号	出土層
1	2.3	8.0	溝7、G23E	砂利層
2	1.9	10.0	溝7、G22～23C	〃
3	1.4	4.0	溝12、G8E	黒褐色粘土層
4	2.2	9.0	溝A、G11C	黒色腐植土層
5	2.0	12.0	溝A、G11～12A	〃

紡錘車　いずれも土器の破片を再加工したものである。形態は円盤状をなし、中央に小孔が存する。穿孔は、片面からの回転穿孔である。打ちくだかれた周辺部は不整形であり、片面にはハケ目が認められる。図版37の8は、溝A—G29Fの含粘砂層より出土し、径4.6㎝、重量16gを測り、色調は淡褐色を呈する。図版37の9は、溝A—G28E、有機質粘土層より出土し、径4.8㎝、重量13g、色調は暗褐色を呈する。また、これの他に図版のに示した石製の紡錘車も1点出土した。これは両側より穿孔したものである。

銅鏃　溝A—G30F、含粘土灰黒色砂層より出土した。身部の断面は、やや菱形をなし、かすかな鏑を持つ。鏃端部は、非常に鋭利であり、両方からのびる翼は茎より長く、わずかに外反する。また、身部には3個の小孔が並列し、形態はきわめて整美である。赤銅色を呈する。なお、成分については未鑑定のため明らかでない。これの制作時期については、他の出土遺物との関係もあって速断できないが、将来の興味ある課題である。

骨角器　図版37の6は獣の角で作ったと思われ、用途不明である。色調は暗褐色をなし、よく研磨されている。断面は半円形をなし、半円をなす部分に短かい線刻が14本施こされている。この遺物は、西排水溝（G38A付近）、表土層下30㎝で出土したもので、この地点はまだ耕土層に属するため、他の遺物と同格に扱うことは出来ないと思われる。なお、これの性格、用途については明らかでない。

玉類〔勾玉〕　これは硬玉製で色調は緑色を呈す。形態は一般的な弯曲を持たず、やや四辺形に近いものである。穿孔は、両方から行なわれており、よく研磨されている（図版37の10）。

〔管玉〕　溝A—G23Bの耕土層より出土し、碧玉製である。色調は淡灰色を呈する。穿孔は、一方が欠損しているため、片方から行なわれたのか、両方からなのかは判断しがたい（図版37の11）。

〔三輪玉〕　溝Aより出土し、粗い砂岩を材料としている。色調は淡灰色であり、形態は、図からわかるように一見、三輪玉状を呈し、裏面は平坦に仕上げられている。しかし、これが三輪玉とは断じがたいところもあり、もちろん性格も明らかでない。

自然遺物　植物の実がかなり出土した。内訳は、桃の種が、溝3・砂層より2個、溝7・砂層より20個、溝A・黒色腐植土層より24個が、クルミは、溝3・砂層より1個、溝A・黒色腐植土層より1個が出土した。他に、不明のものが、溝3、溝12、溝Aより3個出土した。

また、獣骨類としては、溝3・砂礫層より1点、溝12・黒褐色粘土層より5点、溝A・黒色土層より1点が出土した。その結果は、専門家の鑑判を待って後の報告書に譲りたいと思う。

古銭　G52C、表土層下下55㎝、耕土層直下より明治初年頃のものと思われる。木棺の出土があり、その中から腐敗した人骨とともに21個の宋・明銭が出土した。詳細は表2に示したとおりである。

第2表　鴨田遺跡北方城出土古銭一覧表

図版	銭名	王朝名	鋳銭年号	西暦	G番号	出土数
1	開元通宝	唐　高祖	武徳4年	621年	G52C	1
2	景徳元宝	北宋　真宗	景徳年間	1004～1007年	〃	1
3	天禧通宝	〃　〃	天禧年間	1017～1021年	〃	1
4	景祐元宝	〃　仁宗	景祐元年	1034年	〃	1
5～7	皇宋通宝	〃　〃	宝元2年	1039年	〃	4
8	治平元宝	〃　英宗	治平年間	1064～1067年	〃	1
9	嘉祐通宝	〃　仁宗	嘉祐年間	1056～1063年	〃	1
10・11	熙寧元宝	〃　神宗	熙寧元年	1068年	〃	2
12・13	元豊通宝	〃　〃	元宝年間	1078～1085年	〃	2
14	元符通宝	〃　哲宗	元符年間	1094～1097年	〃	1
15・16	永楽通宝	明　成祖	永楽6年	1408年	〃	2
17～20	不明					4

4. 小　結

姉川により形成された長浜平野を中心とした湖北地方は、畿内地方と伊勢湾沿岸地方との中間地帯北端に位置しているため、両地方に発達した文化の谷間の様相を呈している。

縄文文化を基盤におき、大陸文化の影響を強く受けて北九州地方に新しく成立した弥生文化は約半世紀というひじょうに短期間のうちに瀬戸内地方を東進して畿内地方に上陸、和泉・河内・大和地方にその文化の花が開いたのであった。

和泉・河内・大和地方に定着した弥生文化はさらに東進して伊勢湾沿岸地方に達したが、その主要伝播ルートは大和→伊賀→伊勢という道程であった。しかし、湖北地方は弥生文化東進のルートからはるか北方に位置していたため少々異なった様相を呈するのである。

瀬戸内地方を東進して大阪平野に入った弥生文化は大和川水系に沿って大和地方に入る一方、淀川水系に沿って山城地方にも伝播した。大和地方に入った弥生文化は、前述したルートに沿って伊勢湾沿岸地方に達し、そこで東進をストップした。伊勢湾西岸地方において弥生文化が始まった時期は三重県鈴鹿市上箕田遺跡(註1)・同県一志郡中庄遺跡(註2)出土土器から畿内第1様式古段階終末期にあてられる。従って、伊勢湾北岸においてもほぼ同時期か若干遅れて弥生文化がはじまったとおもわれる。

一方、山城地方に入った弥生文化は宇治川水系を通って湖南地方へ伝播したと考えられる。その根拠としては、京都市伏見区深草遺跡(註3)から大津市南滋賀遺跡(註4)において出土した中期初頭の土器と同じものが発見されている例をあげることができる。すなわち、中期初頭にはすでに琵琶湖地方との間に強い関係が成立していたことを示している。だが、弥生文化が琵琶湖地方へ入った時

期を知るような手がかりは残念ながら皆無に近いというのが現状である。

さて、湖北地方では最近まで畿内第1様式古・中段階に属する土器の発見例が報告されていなかったが、昭和45年に発掘調査された長浜市川崎遺跡から畿内第1様式中段階に相当する断面三角形の削り出し突帯をめぐらせた土器が出土した。(註5) この発見により、湖北地方における弥生文化の開始期は、一応畿内第1様式中段階に相当する時期があてられることになったが、いずれの地方から弥生文化が伝播したかについては判然としていない。ただ、この疑問に対する答えを出すにあたって重要な手がかりとなる資料が発見されている。それは水神平式土器が滋賀県下の長浜市川崎遺跡や大中の湖南遺跡などから出土しているという事実である。水神平式土器とは東海地方の縄文時代終末期に属する土器であり、伊勢湾沿岸地方で最古の弥生式土器である二反地Ⅰ式には伴出せず、次の二反地Ⅱ・Ⅲ式から伴出する。これは弥生文化が伊勢湾沿岸地方に伝播してすぐには土着の文化（縄文時代晩期終末）がこの新しい文化に同化せず、次の二反地Ⅱ式になって交流がはじまったことをものがたっている。この水神平式土器が伴出する二反地Ⅱ式は畿内第1様式中段階に相当する時期である。このことから、湖北地方に弥生文化が成立したのは伊勢湾沿岸地方からの影響によるものであるという考え方が成り立つ。

湖北地方の弥生文化は上述したように、東方・伊勢湾沿岸地方からの伝播であると考えられ、さらに弥生時代中期から古墳時代前期にかけても同地方の影響を強くうけているが、畿内地方の影響も弥生時代中期中半から中期後半にかけて、すなわち畿内第3様式・第4様式に相当する時期にはかなり強いことが本遺跡の出土土器から推察できる。伊勢湾沿岸地方の影響をうけた土器の代表的なものとして、S字状口縁・台付甕形土器をあげることができる。台付甕形土器は弥生中期後半、S字状口縁は弥生後期前半に東海地方において発生し、後期後半の欠山期にいたって壺には例外なくみられるようになり、少なくともこの時期までには湖北地方へも伝わったとおもわれる。このほかに、伊勢湾沿岸地方の影響としては、ピット2内から出土した壺、細頸壺（図版16の4～9）、甕（図版18の10～16、図版18の18～22）、高坏（図版21の18～21、図版22の4～9）、浅鉢などをあげることができる。一方、畿内地方の影響としては、水差形土器、壺（図版1の1～3、図版4の11）、台付無頸壺、甕（図版21の1～6）、高坏（図版7の8・9、図版7の12）、記号をもつ長頸壺などが出土している。このように両地方の影響を受けながらも、当地方独自の土器もつくり出している。例えば、高坏のなかで口縁部内面を肥厚させ、その部分に粗い直線文をめぐらせたもの、S字状口縁をもつ丸底壺、台付壺などがあげられる。

鴨田遺跡が調査されるまで、湖北地方の弥生式土器・土師器についての資料が不足していたため、その全貌を明らかにできなかった。しかし、本遺跡から多量の土器が出土したことにより、当地方における弥生式土器・土師器研究の貴重な資料となるであろう。なお、本遺跡出土土器の編年の試案を作成したので、土器の解説とあわせてみていただきたい。この試案は土器の型式を主として根拠にしているため、将来補足訂正していかなければならないのは当然である。先学諸

氏のご教示をお願いしたい。

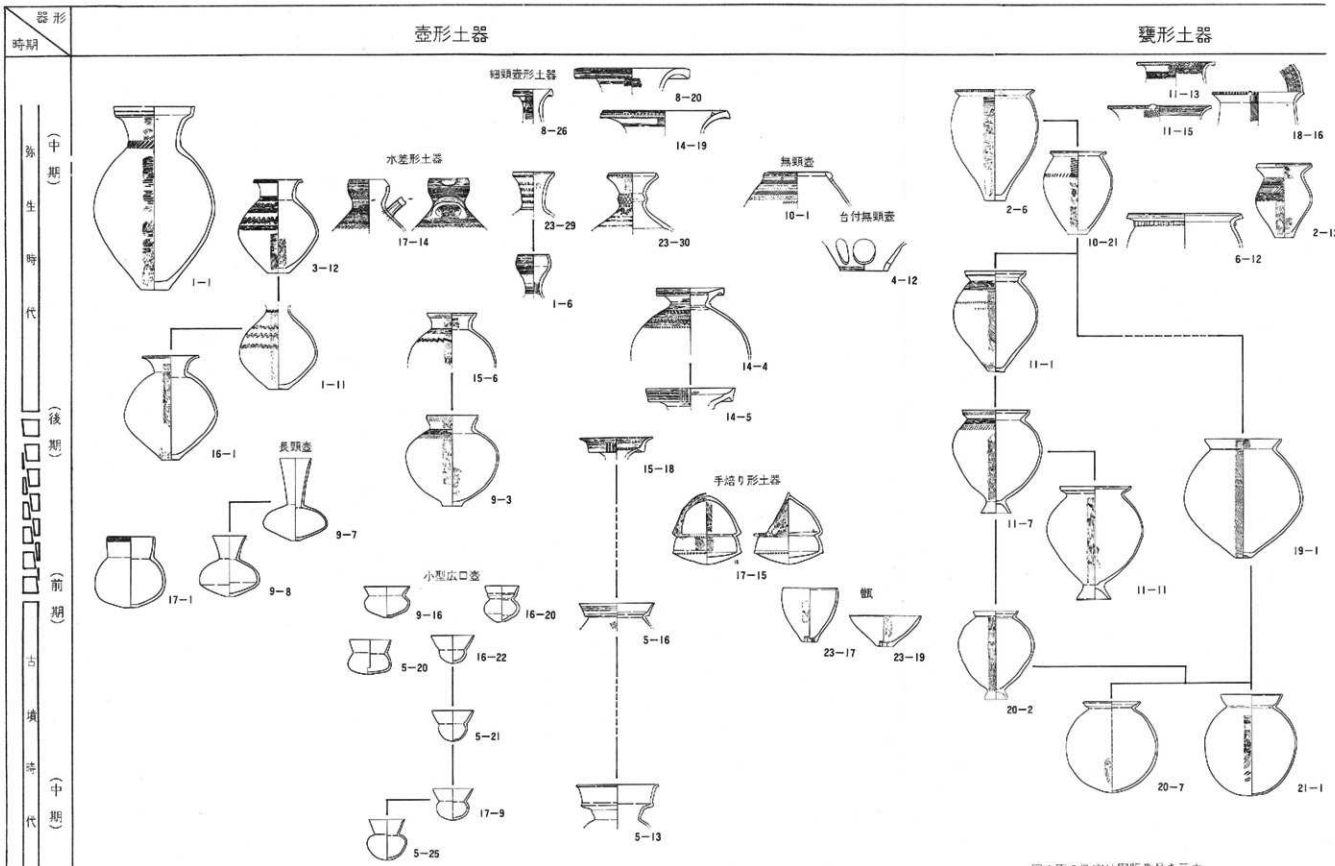
註 1. 鈴鹿市教育委員会『上箕田—弥生式遺跡第2次調査報告—』（鈴鹿市文化財調査報告第2冊、1970）。

2. 三重県文化財連盟『中ノ庄遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財調査報告10、1972）。

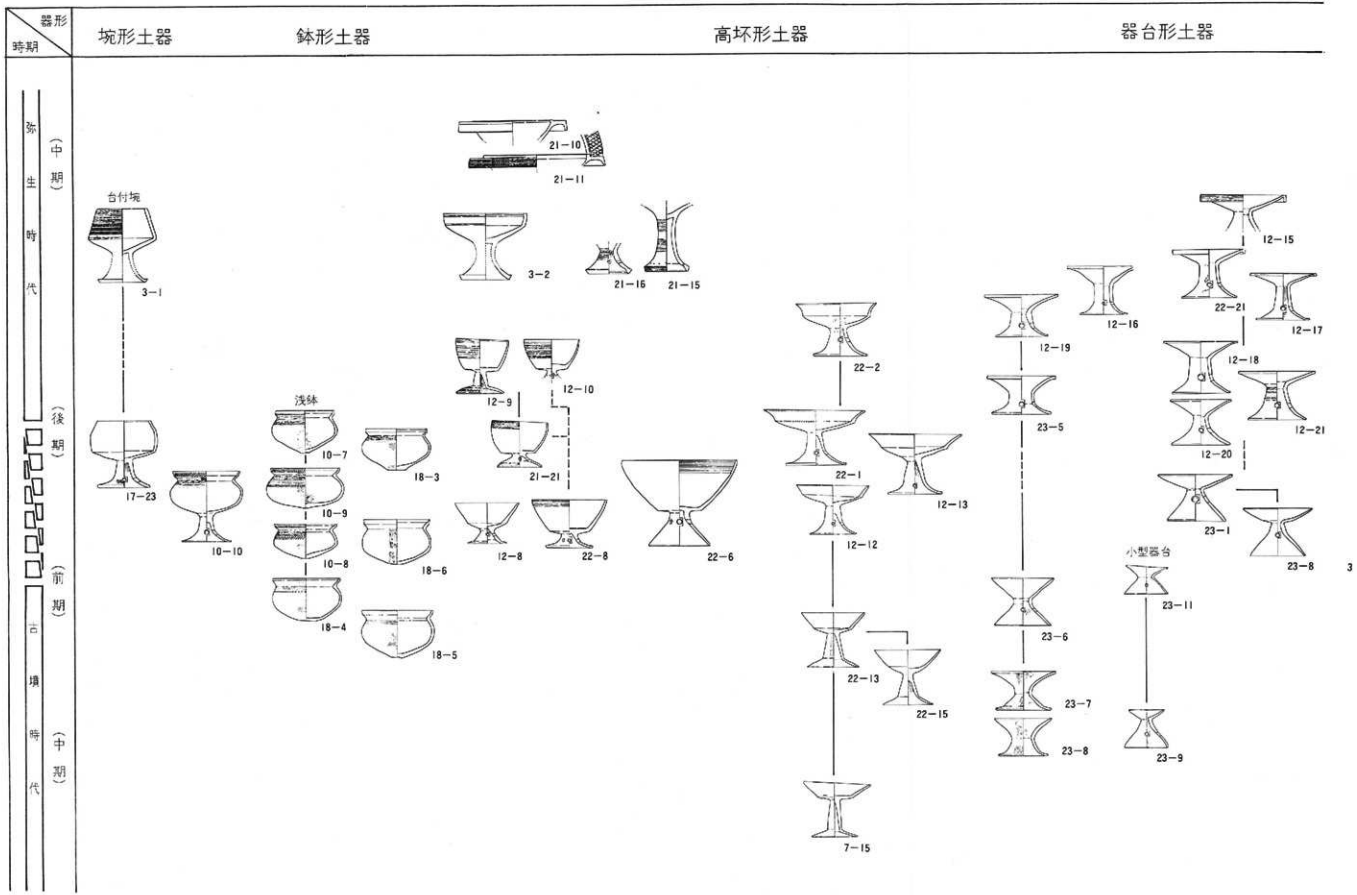
3. 杉原荘介、大塚初重「京都府深草遺跡」（『日本農耕文化の生成』第1冊本文篇、東京堂出版、1972）。

4. 田辺昭三「滋賀県大津市南滋賀遺跡の土器」（『弥生式土器集成』資料篇、真陽社、1968）。

5. 久永春男「弥生文化の発展と地域性—東海—」（『日本の考古学』Ⅲ、河出書房、1961）。



第8図　鴨田遺跡出土の土器編年図(試案)その1



鴨田遺跡出土の土器編年図(試案)その2

Ⅲ 川崎南遺跡

1. 遺跡の立地と地形

本遺跡は北陸線長浜駅の北東約2㎞、長浜市川崎の集落の南西に接し、川崎遺跡の南東約25mより、北北西から南南東にかけ長さ約200m、幅30mにわたる地域をしめている。

この遺跡の北東には川崎の集落の立地する微高地があり、家屋の周辺は畑地となっている。また、遺跡の南西には樹林と畑耕作のおこなわれている微高地がある。この二つの微高地にはさまれて遺跡は位置しており、多くは水田になっている。

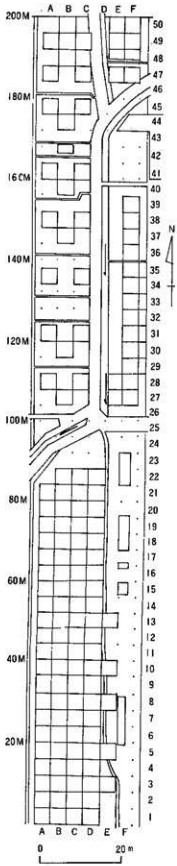
（鹿野　優）

2. 発掘経過と層序

昭和46年5月15日より発掘作業が開始された。全長200mに及ぶ発掘調査地域で、1グリットを4m画に設定、発掘総面積は1,336㎡である。この遺跡に於ける層序は、第1層の耕作土が20㎝～40㎝、第2層が10㎝～30㎝の褐色砂質土壌となり、第3層は5㎝～30㎝の砂質土層と続き、その層序中には暗褐色土層、黄色砂質粘土層が5㎝～30㎝幅で混入し、若干砂礫層がこれに挿入され、第4層は微砂を含む有機物層、木片の残存する腐植土層と青色粘土層が混在し、さらに第5層は砂礫層と青色粘土層に続いている。グリットのうち数ケ所を2m近く深掘りして層位の確認を計ったが、湧水が激しく壁面が水圧により崩壊した。下層は黒色粘土層より微砂を含む青色粘土層で、最下層は砂礫で第1層の耕作土層より数えて8層をなしていた。遺物の包含層は上記の褐色砂質土壌・有機物層・砂礫層・砂質粘土層より出土した。発掘事務所より北方の水路より西面は第1層の耕作土よりすぐ第2層の青色粘土層になり遺物も皆無に等しかった。また、水路の東面は微高地となっていて、黒褐色土壌が1.5m位堆積していたので、遺物の出土を期待したが殆んど見るべきものは得られなかった。本遺跡の遺物包含層は劃合浅く、層序も雑然としているので、遺物出土の上下関係が混乱している。初夏より盛夏にかけての発掘期間中湧水に悩まされ通しで、毎日作業開始前はまずグリット内の溜り水を水中ポンプで汲出してから作業にかかるという状態で、特に遺跡の南端に多く認められた方形及び円形の柱穴と推察されるピットを、湧水と地盤がゆるいので足跡等で消滅しないよう注意を重ね、全発掘地域の発掘終了近くその地点の全面を開放発掘し、平板実測及び写真撮影をなし得た。

作業は8月4日を以って発掘調査の全てを終了したが、発掘期間を通じ事故一つなく過ごす事が出来たのは幸いであった。

（松田典夫）



第9図 川崎南遺跡グリット設定図

3. 遺　構

本遺跡における遺構は、グリットA・B・C2～A・B・C11の地点に至る区画内に東西に走る溝状の遺構が知られたのと、ピットが81基程見られたが、各々雑然と散在しているものと、建物等の関係を推定し得る並列を示すものがあった。また、A3～C3にかけて砂礫層が一段と高くなった畦状の遺構が見られた。

1) 溝状遺構

グリットAB7の地点と、ABC7・8、D7の地点、ABC8・9の地点及びABC10・11の地点に見られる。これをM1、M2、M3、M4とする。

〔M1〕　グリットB7～A7に東西方向にU字状に掘込まれ、幅は東部で約30cm、西部で約55cmである。底部の深さは東部で約5cm、西部で24cmである。溝の部分は黒褐色土層で有機物質が含まれていた。底部及び側面には青色粘土が見られた。溝の中には遺物は殆んど見られなかった。

〔M2〕　グリットABC7・8、D7の区画内に東西方向にU字状に掘込まれた溝状の遺構が見られ、D7の地点で浅くなり消滅している。120～130cmの幅で深さは27cmで、M1と同様青色粘土層中に掘込まれている。遺物の出土は見られなかったが、溝の南面の縁にピット状の穴が見られた。また、中部には黒色腐植土が堆積していた。

〔M3〕　グリットABC8・9の地点に東西に3条並行して見られるがM1・M2程明確ではなく、幅もくずれていて一定していないが、D8・9の付近で消滅している。深さは28cm程であるが底部は深い処と浅い処とがあり一定していない。溝状の部分は黒色腐植土で粘土をかなり含んでいる。この溝の中から小枝及び須恵器などの小破片が少量出土している。

〔M4〕　グリットABC9・8の地点に見られる溝状遺構がM1・M2・M3と異なる点は約30°の角度を以って西北に掘込まれている。底部は掘込の状態がくずれていて明瞭でないが、小枝及び大木の根などが見られた。土質は黒色腐植土である。

2) ピット

ピットは方形及び楕円形または不定形で深さは6～25cm程である。グリットA～Cの2～6に点在するこれらのピットの中には、明確な関連性を察知出来ないものもあるが、グリットA・Bの2～3内におけるHT1のように一部くずれているものもあるが、主として方形のピット6基が東西4m、南北2mの方形に結ぶことの出来る並列と、HT2のように東西に約2m間隔に3基の円形ピットが一線上に並び、また、グリットA4・5におけるHT3及びHT4のように、円形及び楕円形のピットが南北に2.3m間隔に4基づつ並列して見られるものがあって、建物の痕跡を想定できるがいずれもそのプランを推定する事は困難である。

（大江　命）

4. 遺　物

1) 土器および陶器

土師式土器　本遺跡出土の土師式土器は、椀・坏・高坏・蓋・甕・甑等である。

(1) 椀は坏のような器形に

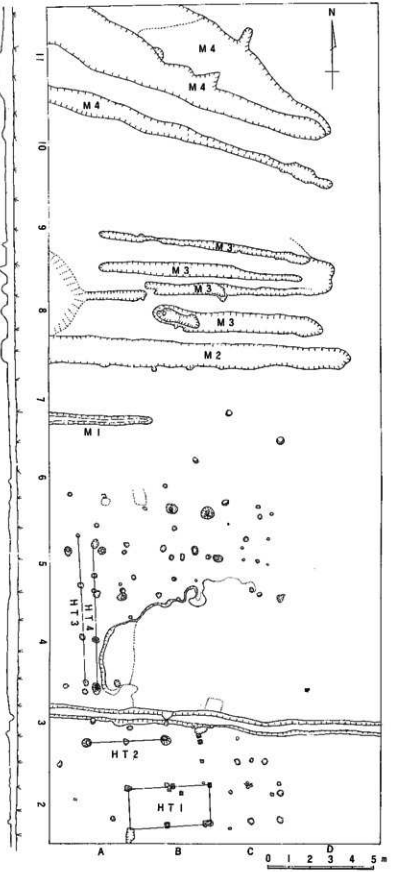


図10図　川崎南遺跡遺構実測図

高台のあるものであろうが、破片のため完形して知ることはできない。

(2) 坏は、口径11.0～14.0㎝の底部がまる味をおび口縁部の尖っているものがある。

(3) 高坏は筒及び裾の破片があるが、全体の器形を知ることはできない。

(4) 蓋の破片があるが、やはり全体の器形を知ることはできない。

(5) 甕は、口縁部のみの出土である。頸部が「く」の字状に外反するものが主で、口唇部はほとんど面とりされている。なかには、図版39の2のような口縁部に沈線があるものもある。他には小破片であるが、口唇部は扁平でその上に線のあるもの、まるくふくらみのあるもの、突帯を施したもの、尖ったもの等がみられる。口径は2.2～2.6㎝で口頸部から胴部へむかって細かい櫛目文がみられる。また、これらの胴部破片は、内外櫛目文の整形が多いが、無文のものも若干ある。

(6) 底部が3点出土している。底径は、それぞれに6.7㎝、7.8㎝、8.1㎝あり、そしていずれも中央部が凹んでいる。

須恵器 本遺跡出土の須恵器は、坏・高坏・蓋・壺・鉢・甕・甑等が出土している。

(1) 坏は、第11図1のような器形で、高台からいきなり開き気味にたちあがり、口唇部が尖ったものが多い。口径約18㎝、器高約4.1㎝ある。胎土は、均質砂目粘土を用い、焼成色調は青灰色・灰色をしている。また、高台内を硯の代用にしたのか、墨の付着がみられるものもある。

(2) 蓋類は、つまみのあるものと、ないものに分けられる。つまみは扁平なボタン状のもので、口縁部に稜をめぐらし、口唇部は稜のところから直角に折れて下向した口径15.5～19.5㎝のものがみられる。第11図3の胎土は、珪石粒を含む砂目のものと、均質砂目のものがある。前者は素地が灰色であり、後者は青灰色をしている（第11図2）。つまみのないものは、坏の反対に天井部はヘラ切りで粗雑な仕上げであり、口唇部は尖っている。胎土は、砂目粘土であり、素地は灰色をしている。

(3) 壺は、厚さ0.6～1.0㎝までの胴部の破片がみられ、なかには、口径5㎝内外、頸部高3.1㎝の口頸部をもつ平瓶と思われる小破片もみられる。

長頸壺は口径10.2㎝、頸高11.2㎝、胴径17.3㎝、器高22㎝、高台径9.8㎝ある。ラッパ状に開いた長い口頸部をもち、頸部の中心部はしぼみ、外面中央部のやや上部に凹線2条がめぐらされている。そして肩部に至って張り出し、肩・胴界部に凹線1条がめぐらされ、稜をつくって、急に内傾し、まるみをもって下向し、高台部に至っている。高台は器の重みで押しつぶされた感じで開いている。胎土は均質砂目粘土で青灰色をしている。そして胴部の下方にT字状の彫字様のものが見られる（第11図4、図版117の下段左）。

(4) 鉢は、胴部がまるくなり、口縁部が内反する厚手（8㎜内外）の鉄鉢型であるが、底部は扁平である。胎土は均質砂目粘土を用い灰色をしている（同図5、図版117の下段右上）。

(5) 甕は小破片が出土している。大部分が胴部破片で、外面叩き文、内面は当板によって施された同心円がある。胎土は、均質砂目粘土であるが、素地は青灰色と灰白色に分分けられる。

(6) 甑は、把手片が出土している。

施釉陶器〔緑釉陶器〕　2点出土しているが、いずれも皿の小破片で、素焼きの上に施釉したと考えられる。釉調は、1点はにぶいマット状の暗緑色をしており、今1点は光沢のある暗緑色をしている。前者は段皿と思われる。両者とも施釉は総がけである。

〔灰釉陶器〕　椀・皿・瓶類・大平鉢の破片が出土している。

椀は、高台部のみで完形品はない。皿は段皿と丸皿がみられる。段皿は、径13㎝、器高2.5㎝、高台径7.2㎝ある。ミコミはややまる味をもって腰部に段をもっている。胎土は均質の細かい粘土を用い、釉調は灰白色・白色の不透明である。つくりは全体に整形である（第11図5）。丸皿は、ミコミから口縁部まで軽くまるみをおびており、口径11.8㎝、器高2.2㎝、高台径6.6㎝あり、胎土は灰色で、白色不透明の釉が施されている（第11図6）。

瓶は肩部の破片が多い。大型の広口瓶の底部片と思われるものが1点ある。大平鉢は、高台部の破片がみられる。胎土は均質の細かい粘土のものと、口径22.5㎝、器高9.8㎝、高台径11.0㎝あり、胎土は、珪石粒を含む砂目粘土である。前者は美濃系であり、後者は猿投系である。

山茶椀系陶器　山茶椀系陶器は、椀及び大平鉢の破片がみられる。椀はほとんどが高台部のみで、全体の器形を知ることはできない。高台径は平均8.5㎝の付高台で、もみがら圧痕を残し、胎土は、長石粒を含む砂目粘土で、灰白色をしている。内面は使用したための磨耗痕がある。高台内には糸切痕がみられる（常滑系）。胎土の黄白色のもので、細かい均質粘土を用いた破片もみられる（美濃系白土原1号窯期）。

大平鉢は、珪石粒と長石粒を含む砂目粘土を用い、暗灰色をしている。口縁部には、1条の沈線があり、片口をもっている。内側は使用したための磨耗痕があり、高台は尖った付高台で、大きさは口径22.1㎝、器高9.9㎝、高台径10.7㎝ある（常滑系）。　（田口昭二）

その他の陶器類　本遺跡からは、大甕陶片の口縁部14点、胴部243点、底部2点、押型文のつけられたもの20点で内14点については図版42の No.1～21のほか、陶質錆鉄釉の施されたものが出土している。大甕についてはいずれも常滑系である。段ごとに連続してつけられた押印文様からみて鎌倉初期から中期にかけてのもので、色調は黒灰色または灰白色、赤褐色でいずれもよく焼締っている。　（古川庄作）

2）石　器

本遺跡においては石器類の出土は少なく、石鏃1、叩石1、砥石2、管玉1であった。

石鏃　頁岩製の剝片石鏃で、左右両側面には簡単な打調による整形がされている。尖端部欠

損（図版44の２）。

叩石　灰色砂岩礫の叩石で、図の下部尖端に使用時の打痕が認められる（図版44の１）。

砥石　２点の出土のうち１点は灰色硬質岩製で、表面と左右の３面は使用による磨耗痕が認められる。裏面は自然面のままである。もう１点は淡灰色硬質砂岩製で、表裏左右共使用時の研磨痕有り。長さは４㎝、幅５㎝、厚さ１㎝の断片である。

その他砂岩製の剝片が１点有り、表面には一部に研磨痕を認めるが、断片に過ぎないので全体の形を知ることは出来ない。

管玉　長さ2.5㎝、径0.4㎝の出蛍石製１点が出土した。淡緑色であるが、表面は剝脱している（図版44の３）。

3）自然遺物

川崎南遺跡での自然遺物は断片ではあるが、亀甲が４点出土したほか、骨片５点の出土を見たが小片で何の骨片かは判断し難い。　（松田典夫）

5．結　語

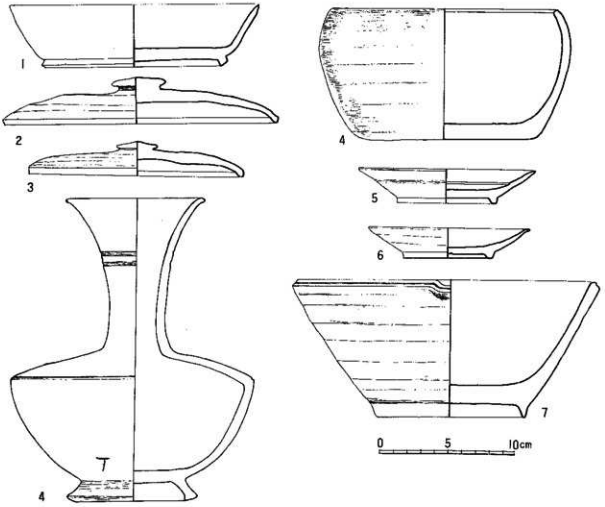
本遺跡は、国道８号線長浜バイパス建設に伴う事前調査として、幅30m、長さ200mの範囲が発掘地域であり、その中央部に用水路が通り、その部分より北方の西面は低地であり、耕作土層下が青色粘土層であり、遺跡の基底となる砂礫層は見られなく、この地点では全く遺物は検出されなかった。用水路の東方は一段と高地をなしていたのと、緑釉陶器片が一片表面採集されている点より、遺物、遺構の存在が考えられたが、少量の土器片が検出されたのみであった。また、家屋の建っていた屋敷内に最近まで使用されていた磁器片が捨て込まれた処があった。また、用水路の南の地点においては、砂礫層または青色粘土層内に溝状遺構・畦状遺構・ピットなどが見られたのと、遺物もこの地層もこの地層より出土したのである。出土遺物は、石器類として、打製石鏃・叩石・砥石・管玉・土製品は、土師式土器・須恵器・施釉陶器・山茶椀系陶器・その他中世施釉陶器片などが出土している。打製石鏃は縄文時代に属する遺物である。本遺跡中で溝及びピットの検出された地域で出土した須恵器で、口縁部の一部分を欠いた以外はほぼ完形で出土した長頸壺及び坏（蓋）・鉢などがある。比較的大きい破片や完形品に近いものより考えると、長頸壺は、船橋遺跡における長頸壺A Ⅱ類に対比されるものである。鉢は船橋遺跡の鉢B Ⅰ類に類似するものである。坏（蓋）のつまみは宝珠状をしている。また、これ等の須恵器に伴うと考えられる土師式土器片も出土したが、小破片と地点が散在して出土しているため一括資料として考察する事は困難である。

（註）

灰釉陶器の器形の知られるものが出土している。緑釉陶器片も表採を含めて２点出土してい

る。山茶椀及びその他施釉陶器が出土している。その時期は奈良期を中心として平安・鎌倉期にわたる遺物である。遺構との関係は、まず溝状遺構の溝内より木片及び土器の小破片以外は全く見られず、それも全く検出出来ない溝もあり、時期及び性格を推察する積極的な資料は認められなかった。また、柱穴と考えられるピットが多く見られたが、その形状・間隔・方向などで関連性が知られるものは僅かであり、さらにそれ等の時期の推定に至っては全くそれを決める絶対的なものが見られなかった。しかし、奈良・平安・鎌倉の各時代にわたる人間の生活の歴史を包含する遺跡であった事は当然である。　　（大江　命）

註　平安学園考古学クラブ編『船橋Ⅰ・Ⅱ』(1972年2月)。



第11図　川崎南遺跡出土遺物

1. 須恵器坏　2. 3. 須恵器蓋　4. 長頸壺　5. 須恵器鉢
6. 灰釉陶器丸皿　7. 山茶椀系大平鉢　8. 灰釉陶器段皿

Ⅳ 勝 町 遺 跡

1. 遺跡の立地と地形

本遺跡は北陸線長浜駅の東南東約2.1㎞、長浜市勝の集落の東方約3㎞に、北北西から南南東にかけ長さ約100m、幅約30mにわたる地域をしめている。

この遺跡の東には屋敷跡のある微高地があり、南西にも堂前神社跡と伝えられる微高地がある。この遺跡はこの両微高地にはさまれややや低くなった地域をしめている。

（鹿野　健）

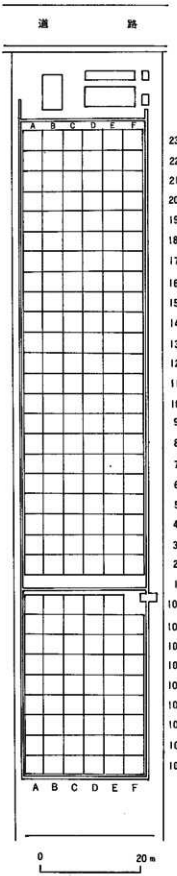
2. 発掘経過と層序

本遺跡は先に発掘調査が行なわれた川崎南遺跡の南方に位置し、鴨田遺跡に隣接している。川崎南遺跡の発掘調査終了後の整理を終えた昭和46年9月25日発掘作業を開始した。発掘地域の全長は100mを予定し、1グリットは4m四に設定した。後に記するが最初の予定地点の南限より更に南へ50m延長し、その地点は殆ど全面発掘となった。川崎南遺跡と同様本遺跡に於いても、湧水が激しく両サイドに排水溝を掘り、発掘が進展するに従い更に深く掘り下げて排水につとめ、少しでも作業を容易ならしめるよう配慮した。9月末より10月にかけて降雨の日が多く時には作業を休止した。農繁期で作業員の人達も初めは少なかったが、10月の後半より次第に増員となり作業も捗る。

出土遺物は、土師器・須恵器・灰釉陶器・山茶碗片・木器・石鏃・砥石等の出土を見た。10月23日、余り激しい降雨に排水溝を更に深く掘り下げたところ、80㎝程で砂層に達しているが、両サイド排水溝の各所を深掘りして地層の変化を観察するに、南に向って深まってゆく様相が見られるので、グリット1—Fの南を190㎝～200㎝掘り下げると、土師器・須恵器片多数及び木片の出土を見た。

第1層の耕作土20㎝、第2層腐植土層70㎝、第3層暗灰色粘土層40㎝、第4層腐植土層30㎝、第5層暗灰色粘土層40㎝、第6層暗灰色砂質粘土層、第7層小礫の混じる砂層、第8層青色粘土層となり、以上の層序は表土より約230㎝である。このため初めに記したように、更に南方に向けグリット54を設定し、発掘調査を進めることとする。これをグリットA～Fの101～109とした。

遺物包含層は深く全面発掘の方針を固め、作業を進める。連日降雨続きと湧水のためグリットの壁面が崩れるおそれが有り、事故防止の観点から層位を実測したグリットからセクションブリッジを外し、開放発掘にする。北東より南西に向い深い落ち込みが見られ、流路を示す如く溝状の遺構がグリット101D～101Aに、また、グリット101D～108Dに認められる。グリット102A—



第12図　勝町遺跡グリット設定図

102D～105A—105Dには青色粘土が方状に微高して認められ、遺物は全体に点在して出土したが、中でもグリット101E・F～108E・Fにかけて多く見られ、グリット102E・F、103E・Fに集中して出土した。土師器・須恵器・山茶碗・灰釉陶器片等が多量に出土し、砥石が30数点と多く出土したほか、多様な木器類の出土も見られた。この全面発掘を行なった層序の状態は第1層耕作土20cm～25cm、第2層鉄分を含有する暗青灰色粘土質土壌40cm～60cm、第3層茶褐色土壌及び暗青灰色粘土層が帯状に入り、第4層暗褐色腐植土壌が20cm～30cm、所によりかなり深い層をなして最下部の青灰色粘土質土層または砂礫層に続いている。

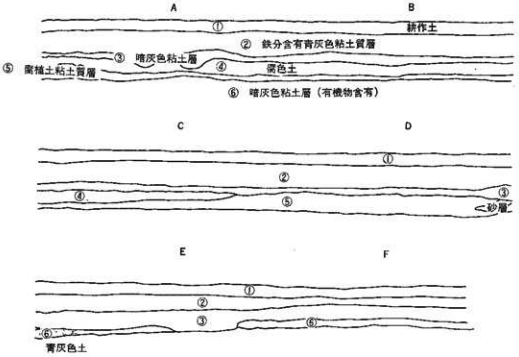
発掘調査は年末・年始にかかり11日間休みとし、1月7日より再開1月18日終了した。作業開始直後から降雨の日が多く、湧水と寒気のため難渋を極めた。厳寒の降雨期にわたる発掘であったが、実際には当を得たものとはいえない。ふり返って思うに今少しく時間を惜しまざる対処に乏しかった憾みは拭い難い。

（松田典夫）

3. 遺　構

本遺跡の事前踏査の当初に遺跡と設定されていた区間においては、発掘調査の結果、遺跡と考えることが困難であった。しかし、その地続の南の地点に設定された排水溝に見られる地層に変化の有るのを認めたので、更に南に拡張して発掘をした結果その地点において溝状遺構が見られた。その部分より遺物が大量に出土したのである。

〔M1〕　溝は発掘前の水田の畦に平行して東西方向に見られた。この溝の中に多くの石が流れ込んで散在していた。溝幅は約2m、深さ約50cm、西部がやや深くなっている。図版120の左でも知られるように両側より石が流入している下に遺物が見られる。底部はわずか砂層の認められる処があった。

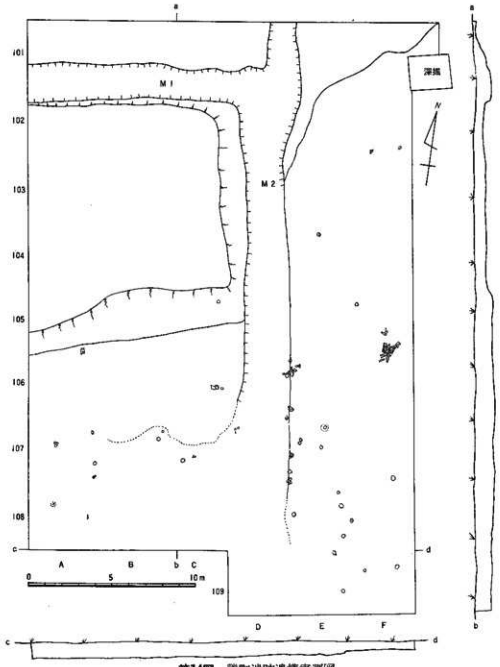


第138図 勝町遺跡土層断面図

〔M2〕　M1に直角に掘込まれている。北面の地が微高しているので自然と傾斜を示し、北に向って浅くなるためか、グリット1Dの地点では全く消滅していた。南に約16m程の処まで西傾の溝壁が見られたが、それ以南は北東南から西に見られる深い含有機物黒褐色土層に混同して消滅している。また、溝の東壁はかすかに青色粘土層が残っている。溝の部分はあまり明確ではなかった。

M1・M2の南西の部分は一段と高く青色粘土層が方形状に残っている。

上述の二つの溝と土層との関係を見ると、青色粘土層の中に掘込まれたM1・M2の溝が、その後の氾濫における流路によってM2の溝が争奪され、氾濫による流路は北東より西南の方向を



第14図　勝町遺跡遺構実測図

示している。

上記のように南面及び東面は、氾濫時における黒褐色粘土質土層が扇状に西南に展開して堆積し、発掘中M2には湧水が南向して流れ、南西面の低位に流路をしめした。その地点には礫石等の石器類も出土したが、丸杭（直径8㎝～12㎝）20本程が傾・直立して出土した。上端は朽ちていてその長さは20～40㎝である。下部尖端は削り尖らされ、地中に打込まれた状態であった。しかし、いずれも散在していて、どの角度から検討してもそれぞれの関連性を、建造物と考えることは至難であった。（大江　令）

4. 遺　物

1) 土器および陶器

土師式土器　本遺跡出土の土師式土器は、その破片から器形を推定すると、高坏・甕・壺・鉢・甑・釜・土錘等である。

〔高坏〕　図版40の5・6はいずれも坏部だけで、脚部のないものが2点ある。5は腰部がまるく張り出し、器壁の厚さが約0.8㎝ある。口縁端面はやや内反し尖っている。器面内外はヘラで磨研している。胎土は珪石粒を含む砂質粘土で赤褐色をしており、内面に炭素の吸着が一部みられる。6は、やや開き気味で若干胴部が張る。器壁の厚さは0.4㎝で、口縁端面をまるく仕上げている。胎土は0.4㎝以下の珪岩粒を含む砂質粘土で赤褐色をしている。

〔甕形土器〕　図版39の1～7と、図版40の1に示したように、口頸部だけが出土している。口頸部のつくりは、いずれも口縁部へむけて「く」の字状に外反するものばかりであるが、その外反が2のようにそりの強いものと、4のように直行して立ち上るものがある。そして口縁端部は扁平に面とりしたものと（1・5）、その中央に沈線をめぐらせたもの(2)、丸く仕上げているもの（3・4）、尖らせているもの（6と図版40の1）等がある。

器面の整形は、いずれも外面はけ目のたてがき・斜目がき・横がきによっている。内面は弧状がき5と横がきのものがみられる。図版40の1は頸部に櫛の刺突文を3個ずつ連続に施していると思われる。

〔壺形土器〕　壺形土器には、図版39の9のような破片がみられる。口縁部は、端部より約1.5㎝下ったところに、口径0.6㎝の小孔がある。器面は刷毛仕上げである。

図版40の2は口縁部へむかってしぼむ無頸の壺形と思われるが、口縁部より3.5㎝ほど下ったところに断面三角形の貼付突帯をめぐらせている。内外ともに横がきの刷毛目で器面を整えている。また、内外ともに炭素の付着がはげしく、黒色をしている。

〔鉢型土器〕　完形品はなく、小破片から図版39の8と10が知られる。8は口縁部がふとく肉厚で尖端ほど部厚く、口縁端部を丸く整えた鉄鉢形と推定される。器面の外面は、条痕による整

形で、炭素の付着がはげしく黒色をしている。

10は、口縁部へむかって軽く開いた器形であり、口縁端部を扁平に面とりし、外面を条痕で整えている。

〔把手付き鉢型土器〕　完形はないが、把手のついた破片が若干出土した。小型のものは把手の長さ3.1㎝、幅3㎝、厚さ2㎝あり、大型のもので長さ5.2㎝、幅4.9㎝、厚さ3.5㎝のものがある。また、把手の長いものは、径3.2㎝、長さ5.8㎝の細長い尖端の尖った角状のものが1点ある（図版121の下）。

〔釜形土器〕　完形を知ることはできないが、鍋の釜の部分であろう。残存部は釜の上部で口縁部は、やや開き気味で口縁端部は扁平で面とりされ、胴部の「く」の字状に外反するところで、やや上むきの「つば」をめぐらせ、「つば」と胴部の接合部は胴側をあら目の櫛でひっかき、条痕をつくり、そこに「つば」を接合している（図版121の中）。

〔土錘〕　長さ3.8㎝、径2.1㎝、孔の径0.7㎝のものが1点出土している（図版40の8）。

〔その他〕　図版40の3は台付甕台部であろう。台部径は19.6㎝あり、台内部は炭素の付着がある。

須恵器　本遺跡出土の須恵器は、蓋・坏・高坏・甕・提瓶・その他に分けられる。

〔蓋〕　坏の蓋が若干出土しており、小型のもので径10.3㎝、大型のもので径14㎝ある。ボタン状のついているものを Ⅰ類とし、つまみのない、しかも細い突帯なく、天井部から口縁部へむかってまるく下がるものを Ⅱ類とした（図版41・122・123）。

Ⅰ類は更に天井部と体部の境いに細い突帯をめぐらせ、体部の高いものをA型とし、その突帯のないものをB型とした。なお、つまみはあると思われるが（欠損してない）、天井部にまる味のない、比較的扁平な立ちの低いもの（口縁部に稜をめぐらせる場合もある）、内側にかえりのあるものをC型とした（破片2点がある）。

①　Ⅰ類A型　2点あるが、1点はつまみが欠損しているため、その形状を知ることはできない。図の1はつまみがボタン状で中央部が凹んでおり、径が3.2㎝ある。天井部は、まるく体部へむかって下がり、体部との境に幅1.5㎝ほどの細い突帯をめぐらし、体部はやや外傾して真直ぐ下り、口縁端部下端を外傾して尖らせ、面とりをしている。同図2は境の突帯部より張り出すように体部が外傾し、中央あたりで軽く内傾しながら直下行し、口縁部をまるく仕上げている。

②　Ⅰ類B　ボタン状のつまみは扁平で、やはり中央部が凹む特徴があるものと（図版122の上・中）、逆に中央部が突き出ているものがあり、径は2㎝～2.5㎝ある。天井部のつくりは、いずれもつまみから、口縁部へむかって曲がるあたりで、ヘラ削りによる整形をしており、口縁部あたを薄く仕上げているものが、ほとんどであり、口縁部はまるく整えている。器壁厚は全体に均一であるが図版41の40のように肉厚なものもある。

③　Ⅰ類C　ここに分類されるものは、小破片で全体の形状を知るものはないが、わずかに2

点だけ口縁部にかえりのあるものが知られている。1点のかえりは、口縁部内側に突帯をつくりだしており、他の1点は、口縁から直角に稜をつくって下向し、尖端を尖らせた下向きのかえりをつくっている。

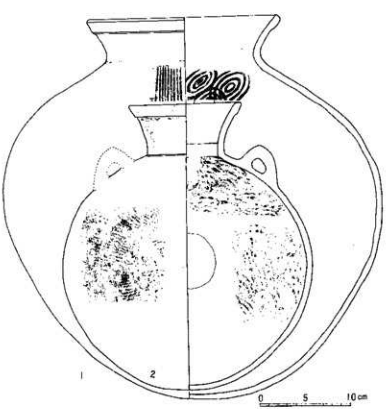
〔坏〕　坏はどれも受部とたち上りをもち、体部をまるく成形している。たちあがりは、受部内側から逆の「く」の字状に内反し、若干のそりをみせながら真直ぐたちあがるものと、斜めにたちあがるもの(9～13)に分けられる（図版41の8～13、図版123の中・下)。

受部は、わずかにつくり出されたもの(10)と、幅広な受部(8・9・11)と、その中間形(12・13)に分けられる。

体部のつくりは、底部中央から、斜めに受け部にむかうもの(9)と、凸凹のある器面で、張りをもたせるもの(8)と、ゆるやかに弯曲させ、しかもヘラ削り等によって器面を整えたもの(10～13)に分けられる。成形は、一般に薄づくりで、内部のつくりは整っている。口径は11～14.3cmまでで、たちあがりは0.8～1.6cmまで、器高は3.8～5.5cmまでである。素地の色調は、青灰色・暗灰色・灰褐色に分けられる。

〔高坏〕　高坏は脚部のみで、坏のないものばかりである。筒は立ちの長いもの(6)と、低いもの、低く開いたもので、長方形の孔のあるものがある。裾部は、内部へ弯曲しながら、脚端部にいたるもの、逆にまるく張りだしているものと「ハ」の字状に開くもの(8)がある。脚端部は、面とり整形したものと内側へ突帯をめぐらせたものがある（図版121の上)。

〔甕〕　完形品は図版44、図版122の下左に示すものだけである。口径21.4cm、器高41.8cm、胴部最大径41.5cm、厚さ平均0.66cmある。口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は帯状に外側にふくらんだ形にできている。頸部は短く「く」の字状に外反するところから外へむかって開きながら下り、胴部でまるく張り出し、さらに底部へむかって内側に弯曲しながら底部に至り、丸底をつくっている。外面は頸部から底部へむかって条痕の叩き文を放射状に施している。その叩き文の上面に器面調



第15図　勝町遺跡出土の甕と提瓶

整のための刷毛仕上げをした痕跡がある。内面は頸部が刷毛による横がきで、胴部から底部へかけて、同心円の当板文で整形されている。胎土は、径1.5㎜以下の珪石粒を少量含む均質な砂目粘土を用い、青灰色をしている。

その他図版41の14に示すようなゆるいカーブをつくりながら外反し、口縁部で下へ小さなかえりをつくり、端部をまるく収え、口唇部を尖らせている。外面は叩き文で整形したのち、はけ目(註1)で器面を整えている。素地は青灰色である。

〔耳付き提瓶〕　口頸部は別づくりで、口径12.5㎝、高さ31.3㎝である。肩部には径1.6㎝のより土で、アーチ状の耳を貼付している。完形は二耳であろうが片方は欠損している。胴部最大長は27㎝で扁平である。外面は叩き文の上からはけ仕上げをしており、内面は同心円の当板を用いて整形している。胴部と頸部は別づくりである（第15図の2、図版122の下右）。

≪叩き文と当板文≫叩き文は主として甕及び瓶類の器面調整痕として施文されている。施文法は周知のとおり、木板に数条の溝を刻んだものを器面に叩きつけるので、図版41の14に示したような文様があらわれる。従って条痕の幅は、木板に刻むときの印刀の幅によって決まる。当遺跡の条痕幅は大きいもので約3㎜、小さいもので1.5㎜を計ることができた。

当板は、木のものと、須恵器質のもの(註2)が知られているが、この遺跡の場合は、須恵器(註3)の当板のようである。なお、当板の同心円は大小様々で同心円のなかに木印のあるものや、同心円の溝が幅広のもの、溝の狭いものがある。また、雑なものや、渦巻文のものもある。ほかに同図9のような坏のミコミを当板で整えているものもある(註4)。

施釉陶器　施釉陶器は緑釉片と灰釉陶器があげられる。しかし、ほとんどが小破片のため器形を知るまでに至らないものもある。器形の知られるものは椀である。

この椀は図版40の9のような高台部のみであるが、施釉が総がけである（高台部のみ無釉(註5)）。胎土は均質の砂質粘土である(註6)。

ほかに、椀の口縁部破片がみられる。また輪花の施されたものもみられる。釉調は光沢があり、素地は灰色である。

山茶椀系陶器　山茶椀は本来瓷器系中世陶器に分類される(註7)が、本項では、山茶椀・小皿・大平鉢のみについて述べるので、山茶椀系陶器とした。

山茶椀系陶器は、大別して椀・小皿に分けられるが、完形品はない。椀はまだ腰部に灰釉陶器のなごりをもった山茶椀初期のタイプである(註8)。口縁部がやや外反するつくりのもので、高台断面は台形で低く、もみがら圧痕のあるものがほとんであるが、なかにはないものもある(註9)。また、「八」の字状に口縁部にむかって開く、小椀もみられる（図版40の10）。小皿は、あきらかに小椀の退化型式とみられる付高台のものがある（図版40の12・13）。口径は9㎝内外、器高2㎝内外、高台径5㎝内外であり、もみがら圧痕の残るものと、そうでないものがある。胎土は細かい砂目粘土で灰色である(註10)（図版124の上）。

かわらけ　大小多量に出土している。器高は1～2.5cmまでである。いずれも手づくりで、厚さ3㎜前後で仕上げている。胎土は均質の粘土で、器壁の部分に燃焼物の付着がみられ、燈明皿に使用したと思われるもの、なかには、炭素の吸着したものもある(註11)（図版40の14～18、図版124の下）。　（田口昭二）

註 1. 縄文式土器の輪積みの接合部にも条痕によるひっかき傷がみられるものがある。この手法は接合部の密着を考えてのものである。
2. 田辺昭三『陶邑古窯址群1』（平安学園考古学クラブ、1966）のなかにも木製当板のことが書かれている。
3. 須恵質の当板は、岐阜県各務原市美濃須衛古窯址群で出土している。
4. 田辺昭三『陶邑古窯址群1』（前掲）のなかにも同質のものが発表されている。
5. 岐阜県多治見市大原古窯址群出土の椀にみられる、施釉法と成形に類似している。
6. 胎土も同質であるので、美濃系といえる。
7. 楢崎彰『中世陶器』（午神奈川博物館、1972）。
8. 「美濃」の山茶椀編年にあてはめると初期のタイプ（鎌倉時代初期）である。
9. もみがら圧痕のないものは、おそらく美濃の編年にあてはめると西坂1号窯期（山茶椀初期）にあたる。
10. 細かい砂目粘土でつくられた山茶椀は、美濃の北西部と愛知県の尾北方面に多く出土している。
11. この燃焼物は、おそらく菜種などの油質のものであろう。

その他の陶器類　本遺跡からは、土師質擂鉢・無釉陶質擂鉢・錆鉄釉陶質擂鉢・大平鉢・おろし皿・大甕・灰釉筐彫花文壺・灰釉鉢・灰釉平茶碗・小皿・中皿・志野釉小皿・織部向付・天目茶碗・青磁釉碗等が出土している。

〔土師質擂鉢〕　口縁部11点、胴部4点、底部4点が出土した。口縁部の破片で厚さ1.1cm、筋目帯2.2cm筋目が5本のもの（図版43の1）、厚さ0.9cm、筋目帯1.9cm、筋目が7本のもの（図版43の2）、厚さ0.9cm、筋目帯2cm、筋目が7本のもの（図版43の6）、厚さ1cm、筋目帯3cm、筋目が9本のもの（図版43の3）と以上のようで、その他口縁部で筋目を僅かに認めるが正確に測定できないもの、底部で使用痕はあるが、筋目の不明確のもの（図版43の4・7）がある。また、土師質のもので細密な胎土で然も焼成火度の低いもので、明らかに使用痕を認めることのできるもの（図版43の8）がある。

擂鉢陶片の胴部で厚さ1cm、筋目帯3cm、筋目が9本のもの（図版43の5）が見られる。

〔無釉陶質擂鉢〕　口縁部3点、胴部1点、底部2点が出土した。胴部の厚さ1.2cm、筋目帯1.2cm、筋目が4本のもので使用痕の明らかなもの（図版43の9）がある。図版43の11は底部内面に筋目帯が認められる。

〔錆鉄釉すり鉢〕　筋目のついた口縁部9点、同じく胴部23点、底部13点、筋目の認められない口縁部18点が出土している。図版43の10・12は何れも口縁部で、筋目帯の計測不能のもの胴部陶片で、厚さ1.1cm、筋目帯2cm、筋目が9本のもの（図版13の13）の他、図版43の15・17～21

は筋目が不明のものである。同図版の15は厚さ0.8㎝、筋目帯2.7㎝、筋目11本を数える底部で、16は同じく底部であるが筋目不明のものである。以上鉄釉擂鉢片は、胎土は黄白色で、微砂質のもので焼上りはやや緻密性を欠くが美濃の産ものと推定されるものが大部分である。筋目の立て方にそれぞれ特徴があって、土師質擂鉢・無釉陶兵擂鉢は美濃産以外のものもと考えられる。

〔おろし皿〕　貫入をもつ黄釉の施された図版43の22～28はいずれも無釉のもので、よく焼締まっている。

〔大平鉢〕　灰白色乃至は赤褐色に焼上り、すべて無釉であるが、緻密で堅硬な胎土を持っている。口縁部23点と底部12点、胴部8点が出土した。

胴部及び底部のものはすべて使用の際の磨痕が認められる。

〔甕〕　押印及び線条のある無釉のものである。押印のある15点（図版42の27～40）は常滑系の大甕で、鎌倉初期から中期にかけてのものと考えられる。その他常滑以外で作られたものとして、丹波・越前が生産地と推定されるものがある。

押印の中で特に常滑系以外のものとして図版42の41のようなものが1点出土している。

また、肩部に0.8㎝、0.9㎝、1.5㎝間隔で2本の線条の入ったもの3点はいずれも無釉で、0.9㎝間隔のもの（図版の43の29）、1.5㎝間隔のもの（図版43の33）等である。甕の口縁部としては、図版42の22～26が常滑系大甕の特徴を表わしている。

〔描線文壺陶片〕　何れも黄釉を施したもので、印花を添えた描線文壺（図版43の30・32）及び描線文壺の陶片（図版43の31・34）計4点が出土している。

〔灰釉陶片〕　鉢の口縁部9点、底部つまみ脚付のもの6点、べた底のもの3点、胴部4点が出土し、その他黄瀬戸平茶碗の高台部1片、黄瀬戸小皿・中皿・けづり高台部及びべた底糸切りのままのもの4片が出土している。特に黄瀬戸小皿2枚が焼成中に熔着したままの状態で出土し、また、窯道具の脚付トチ1点が出土している。

〔志野釉陶片〕　無地志野釉小皿高台部18点、胴部3点、口縁部4点及び志野織部釉を施した蘭竹文小皿2点が出土している。

〔織部釉陶片〕　総織部青釉向付陶片で、高さ3.8㎝、厚さ0.5㎝、内面に布目痕のあるものが出土している。

〔天目釉〕　天目茶碗の高台部8点、口縁部5点が出土している。

〔その他の陶片〕　青磁釉の茶碗片見込部6点と磁器地呉須染付で見込部に2本線が入り、高台脇に1本線の入ったもの1点、そのほか薄青磁釉高台部1点などが出土している。

（古川庄作）

2) 石　器

本遺跡における石器類の出土は、石鏃2、スクレイパー2、局部磨製石斧1、砥石36の出土を見た。この遺跡よりの出土は砥石が非常に多いのが特徴といえよう。

石鏃　半透明の灰色に黒の斜線の入った珪岩製の三角形の石鏃で、基部には僅かに抉りが加されている（図版44の4）。同図版の5は半透明のチャート製の剝片を、両側面と尖端部を調整した剝片鏃で、裏面は簡単な剝離がされているが、表面は全面にわたり押圧剝離が加えられている。下端欠損。

掻器　灰色頁岩製の小形のスクレイパーで、刃部は下部の左より右への傾斜面にこまかな剝離がされている（図版44の6）。同図版の7は横剝ぎの剝片に左辺下部に第二次加工の剝離をなし、スクレイパーの機能を備えたものである。右辺は第一次の加工時のままで、下部は左から右へ斜に欠損している。表面中央部に3カ所パンチングの痕を認める。

石斧　砂岩製の磨製石斧で表面一部に磨痕を認める。刃部右辺は明確にその様相を認め得るが、上部を欠損している。半片に過ぎないので裏面は知り難い（図版44の12）。

砥石　36個の出土を見たが、その石質及び形状はさまざまである。図版44の10は淡黒色硬質砂岩製で表裏左右の四面に研磨使用痕を残し、表面は研磨痕のほか、金属性のものを研磨したと思われる鋭い条痕を認める。右辺は表面と同じ程度に使用された研磨痕を認めるが、左辺はやや使用度が少ないように見受けられ、裏面は更に僅か使用されたに過ぎない。右辺裏面には0.1㎝～0.2㎝程度のやや三角形に近い突き跡70数個有り、表裏と右辺は研ぎ減りによる凹状を呈す。仕上げ砥である。図版44の9は淡灰褐色粘板岩製で表面左右はそれぞれ使用による研磨痕を残す。特に表面は研磨に依り弯曲している。裏面は自然面のままであるが細長い三角形をなした台の上に置かれた跡が見られる。下部欠損。図版44の11は淡灰色硬質砂岩製で、表面には幅1.5㎝、長さ3.6㎝、深さ0.6㎝の樋状の研磨痕有り。その右側にも浅い樋状の研磨痕があって、右側面も平らな面に研磨痕が認められる。

図版44の8は淡灰色硬質砂岩製で上部欠損のため全体の形を知ることはできないが、表面には鋭い研磨痕を認める。金属性のものを研磨したものであろう。その他30点に及ぶ砥石は主として硬質砂岩を材とし色調も黄、淡灰色、暗灰色、青灰色とさまざまで、素材も緻密なもの、きめの荒いもの等いろいろである。従って荒砥、仕上げ砥とがあり形も大小さまざまである。それぞれには研磨痕のほか、擦痕も見れら、中には研ぎ減りして凹状を呈しているものと、斜線と直線の溝状の擦痕があるものもある。1個だけではあるが花崗岩製のものがある。

石臼　花崗岩製の断片が2点出土した。

硯　淡灰色砂岩質で長さ13.6㎝、幅7.8㎝、厚さ2.1㎝である。時代は江戸時代のものであろう。そのほかに淡灰色粘板岩製の断片が1点出土しているが、前記の硯と年代を同じくする。

鉄製手斧　1点のみの出土である。錆びて表面がかなり損色されているが、原形をうかがうことができる。刃部尖端には刃こぼれの痕らしき様相が見られる（図版44の13）。

（松田典夫）

3）自然遺物

勝町遺跡より出土の自然遺物は亀甲11点の出土を見た。どれも断片である。その他小動物の脛骨と思われる長さ15.1㎝のもの1点と関節骨1点が出土している。

なお、以上のほかに洪武通宝、景定元寶の古銭2点が出土した。　（松田典夫）

4）木　　器

本遺跡より出土の木器類は田下駄・高下駄・駒下駄・発火具・農具・漁具柄・大箸・漆膳椀等の生活用具に分類されるものであった。

下駄　〔田下駄〕　大小合せて5点の出土を見た。図版45の3は長さ30㎝、幅14.3㎝、厚さ2.2㎝で針葉樹でつくられていて、外側前部は丸味を帯びているが、内側は直線をなしている。鼻緒の位置には角穴が開けられているが、前の鼻緒穴は中心よりやや内寄りの位置に穿たれ履き減りによる指跡が認められる。図版47の1・図版128の上左は長さ26.2㎝、幅11.5㎝、厚さ1.8㎝で針葉樹でつくられ、ほぼ長方形をなす。鼻緒穴は横に角張った楕円形で、前の鼻緒穴はこれも前記の田下駄と同様やや内寄りに穿たれ、桜皮か樺皮で編まれた手持綱が前部中央に付けられていたが、下駄の表面で残存し、裏面の結び目は図版47の2の如くである。この田下駄にも履き減りによる足形がかなり鮮明に認められる。後部は10数回の荒いタッチで削られている。図版45の6は長さ31.6㎝、幅14㎝、厚さ1.9㎝でやはり針葉樹でつくられ、鼻緒穴は中心より内側に位置してあけられている。手持綱の穴は前後2カ所に開けられている。また、前後部両端に近く左右両側面に抉りが施されている。前部左側と後部左右の三隅は丸くしてある。

図版45の1・図版128の上中は半片であるが、長さ31㎝、幅16㎝、台の厚さ2㎝、歯の高さ4㎝で、表面の周辺はやや荒いタッチで面取りされている。前の鼻緒の角穴の位置より左は欠損している。後の花緒の角穴は1個だけ認められ、右側中央よりやや上部に鋭利な切り込みがある。一見駒下駄状の様相を呈しているが、歯を有する大形の田下駄である。

田下駄は以上の4点のほかに破片3点を含めた合計7点の出土を見た。

〔高下駄〕　闊葉樹でつくられ、長さ22.5㎝、幅10.3㎝、台の中央部の厚さ3.1㎝の楕円形で、歯は前が幅13.5㎝、高さ9.5㎝、厚さ1.7㎝、後は幅13㎝、高さ9.5㎝、厚さ1.4㎝である。いずれも下部に向ってやや幅広になっている。両歯共ほぼ中央に幅1㎝の切り込み2カ所を施し、台に穿った角穴と溝に嵌込んであるが、歯の底面は約30度の傾斜をなしている。これは片減りによるものとは考え難く、いかなる意味を含むものか注意すべきであろう（図版46の4・図版128の下右）。これとほぼ同じと目される断片が1点出土している。図版46の5は材質は闊葉樹で、

長さ15.3㎝、幅7.1㎝、台の高さ3.5㎝の楕円形で、前部の丸味に比べ後部はやや細くなっている。歯は前が幅8.7㎝、高さ6.9㎝、厚さ1.3㎝、後は幅9㎝、厚さ1.6㎝で、それぞれ下部に向ってやや幅広になっている。

両歯共ほぼ中央に幅1㎝の切り込み1カ所あり、台に穿かれた角穴と溝に嵌込まれている。歯の底面は約5度位傾斜をなしている点は、その傾斜度の差はあるが前記の高下駄と同様の特殊の意味を有するものと考察される。この高下駄は大きさから見て子供用であろう。

高下駄は以上の2点のほかに11点出土しているが、どれも欠損甚しきものと断片などで実測図にのせ得なかった。

〔駒下駄〕　闊葉樹でつくられ、長さ25.9㎝、幅13㎝、台の厚さ1.8㎝、歯の高さ5㎝、底部の幅は前後共3.8㎝で、鼻緒穴は前後共1～1.2㎝の丸穴で、前の鼻緒穴は中央よりやや内側に位置してあけられている。後部と比較して前部がやや幅広くなっていて、右側前部の欠損部分は焼失によるものである。前の歯の一部も同様焼失している（図版45の2）。

図版45の4・図版128上右は闊葉樹でつくられ、長さ18.8㎝、幅8㎝、歯の高さは前が3.8㎝、後が3㎝で、前後共台の幅より少し広く、後歯が擦き減りしている。前後部共に欠損している。全体の形状は長味の楕円形である。駒下駄は以上の他に7点出土していて合計9点を数えるがあとのは欠損部多く、また、断片的で挿図を割愛した。

発火具　火鑽臼は長さ36.6㎝、幅・厚さ共8.2㎝の角状で、平滑に削られた面（挿図左側）に径0.7㎝程の火をおこした丸いくぼみが並列し、特に上部3カ所以外は使用度が少ないか、くぼみが浅い。側面（挿図右側）には0.3㎝～0.5㎝の火屑みちびきの溝切りが10カ所彫られている（図版47の7）。

農具　長さ67㎝、幅は広い部分で16.3㎝、厚さは上部の厚い部分で2.1㎝、下部尖端に近い薄い部分は0.8㎝である。頭部尖端は丸く削られ20㎝下まで三角形をなし、その底辺の幅は12㎝で1.3㎝程左右に切り込みがされ、それよりやや丸味を帯びながら下部尖端に向い2本の足となっている。その分れている位置は頭部三角形の下部より9㎝程である。この2本の足は幅約4.5㎝程で下部尖端に至るに従い次第に薄くなる（図版46の2・図版127の下左）。

また、下部の最尖端は刀の先のようにつくり出されている。挿図を表部とすると厚味は頭部から三角形の下までは蒲鉾形の逆の形を薄くしたような形をなす。長い柄をつけ用いられたものであろう。

その他　〔大箸〕　長さ36㎝、径は上部で1.7㎝、下端で1㎝の針葉樹でつくられた箸である（図版46の1）。大箸はこの他に3点、合計4点出土している。

〔コマ〕　長さ12.5㎝、幅は上下端で8㎝、中央部のくびれた部分で3.5㎝で闊葉樹を用いてつくられた。倭編みのコマである（図版47の5）。この他に中央のくびれた部分から折れたもの1点が出土している。

〔漆塗椀〕　2個の黒漆塗椀と底部のみ2点及び朱塗椀の底部1点が出土している。

図版46の6は黒塗椀完形品で径14㎝、高さ6㎝、側面に朱で万両の文様が画かれ、底部裏面には3個の実のような文様がやはり朱で画かれて、その下に弧を画いて一線が引いてある。同図版7は黒塗りで上記の椀よりやや厚手で文様はなく上部が欠損している。9は黒塗椀の底部のみで径8㎝、裏面に楓の葉と思われる文様が朱で画かれている。浜は他に比して分厚である。図版46の8も底部のみで、胴部の外側は朱塗りで、内側と底部は黒塗りである。底の裏面には朱で大の字が書かれてある。この他に底部の破片が1点出土している。

〔その他の生活用具〕　生活用具と目されるものは下記の他20数点の出土を見たが、下記以外は断片的で全容を知り難く従って用途等も不明である。図版47の3は長さ18.1㎝、幅3.7㎝、厚さ0.6㎝の闊葉樹でつくられ、左辺はナイフようにに整形され、その側辺に添って11個の0.1㎝程の小穴があけられている。上端は欠損しているのでその全長は知り得ない。同9は長さ22.5㎝、幅は上部で7㎝、下部で10.6㎝、厚さ3㎝の逆T字形をなす。ほぼ中央部に幅1.3㎝、その上部5㎝の位置に幅3㎝のいずれも角穴があけられている。上端下端共に両面から鋭利に削り出しがされている。周辺は表裏共面取りがされ、材は針葉樹である。図版45の5は長さ11.3㎝、幅8.2㎝、厚さ4.3㎝の長方形で上部の周辺は使い減りした様相を呈している。中央に長さ3.6㎝、幅2.8㎝、の長方形の穴があけられ、裏面は等間隔に2.5㎝～3㎝の切り込みがあり、凸部は中央を残し両端とあとの二カ所は欠損している。表面に比較して裏面は損傷が強い。図版47の8・図版127の下右は長さ22.6㎝、幅21.6㎝でやや楕円形をなし、高さは10㎝である。その中心に長さ15.5㎝、幅14.3㎝の角穴が下方になるに従い狭まく漏斗状に彫られ、底面には径4㎝弱の丸味の歪んだ穴があけられている。上面縁の幅は広い部分で3.5㎝、狭い部分で3㎝である。上面縁・角穴及び胴部は入念な整形が施されている。それに比して裏面は雑に平面に削られている。材は欅を使用してある。臼状を呈する。図版46の3は針葉樹でつくられ、長さ29.7㎝、幅は上部尖端から13㎝のアゴの部分で5.5㎝、頭部で4.4㎝、下部は3㎝角である。頭部左辺の尖端から2㎝程斜に削られ、それより下方へ5.5㎝程ゆるいカーブをなして抉るように削られている。頭部右辺は3.8㎝程下でくびれそれより右辺下方へ斜に第二段目のアゴの部分に下り約1.8㎝程細くなり直線に下部に至る。側方から見ると第二段目のアゴは0.8㎝～1㎝に切り込まれている。表面左辺下方は欠損しているが、下部尖端は三角状に尖らしてある把手であろう。図版47の6は長さ10.5㎝、幅4.3㎝、厚さ2.5㎝の舟形をなすものである。上部尖端から1.2㎝の中央部に0.1㎝程の小穴があり、舟の内側は1.5㎝の深さに彫られている。図版47の4は、長さ20.7㎝、径2.5㎝の闊葉樹の丸木をそのまま使用し下部は四面から尖端に削り出され、最尖端はするどく尖っている。上部は欠損していて全身は不明である。この他に網漁具の栓が出土している。

また、柱・杭が20本程地中に打ち込まれたまま出土し、中には底部が削られ尖らされたものもあった。

（松田典夫）

註　和島誠一編　『日本の考古学Ⅱ』　弥生時代　(河出書房)。

5. 結　語

本文中においても述べたように、勝町東遺跡の遺物、遺構の検出地点は、遺跡地域とされていた地域外であったため、発掘を転進せざるを得なかった。当初区域にては耕作土層中、磨耗した小土器片、石器類、また、陶磁器類を少量出土したに過ぎないのである。耕作土層下では遺物の出土は皆無に近い状態であった。

拡張区域においては溝状遺構と流路内遺物の出土を見たのである。中でもM1の溝状内では多くの木製品、かわらけなどが多く出土したのである。M2の溝と流路の関係は先にも述べたようにM2が流路より先に掘込まれていたため、M2の東傾壁に青色粘土の痕跡が認められるのであろう。その後流路ができたものと考えられるが、その時期が何時であるか推定することは困難である。流路中に見られた柱状の丸木の周囲に割竪片で固められているものが検出されたが、これと流路との前後関係を知ることはできなかった。

出土遺物中、この拡張区域で砥石が32個出土し、その中に丸ノミを砥いだと考えられるもの、また、鉄製手斧の出土、木器の中に火熨斗が見られる点、大量のかわらけの出土、中には燈明皿として使用、また、土地の人の話などを総合すると、かってこの地点の近くに社寺が建立されていたことが推察されるのである。

土器類として土師式土器・須恵器・施釉陶器（平安灰釉）・山茶椀系陶器その他陶器類が知られる。

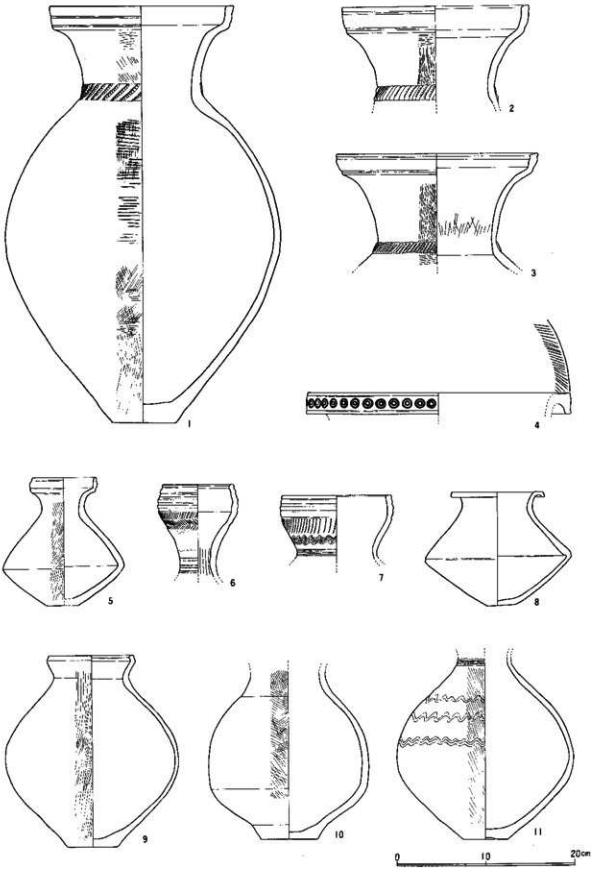
その主体となるものは、土師式土器、須恵器であるが、多少古い様相のものもあるが、その主体となる時期は奈良時代後期を中心としたものと考えられ、それ以後平安、鎌倉、桃山と各時代にわたる遺物が出土しているのである。生活用器としての各種の器が多く出土している点からも上述の生活関係が知られるのである。

木製品も溝状遺構中より多く出土し、中でも生活用具の一つである下駄が各種出土している。

駒下駄及び田下駄は前の鼻緒穴が内によっている。これは比較的古い様相を示しているのである。これ等の木器の絶対的年代を推定することは至難である。以上のように当遺跡は奈良期以降各期にわたる文化遺物の包含を可能ならしめた遺跡と考えるべきである。

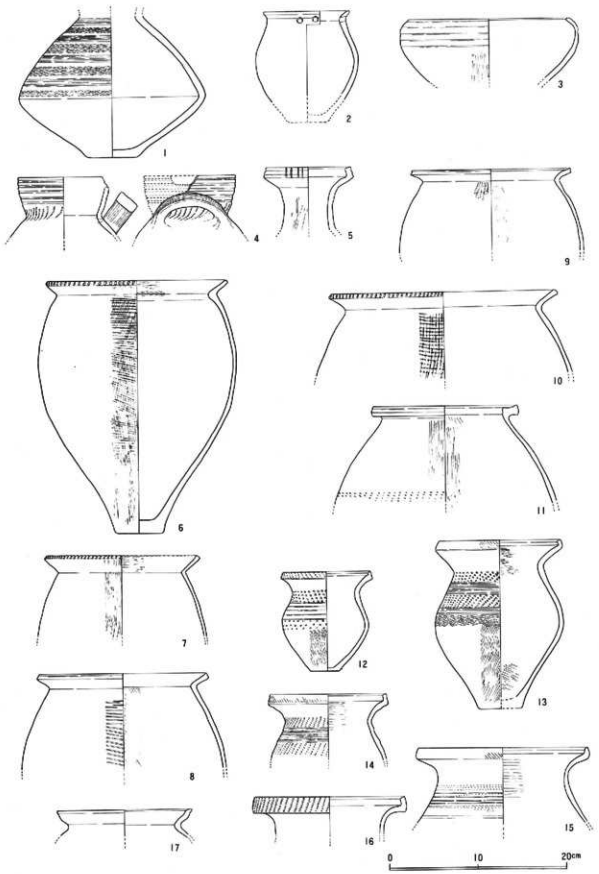
（大江　命）

図　　版

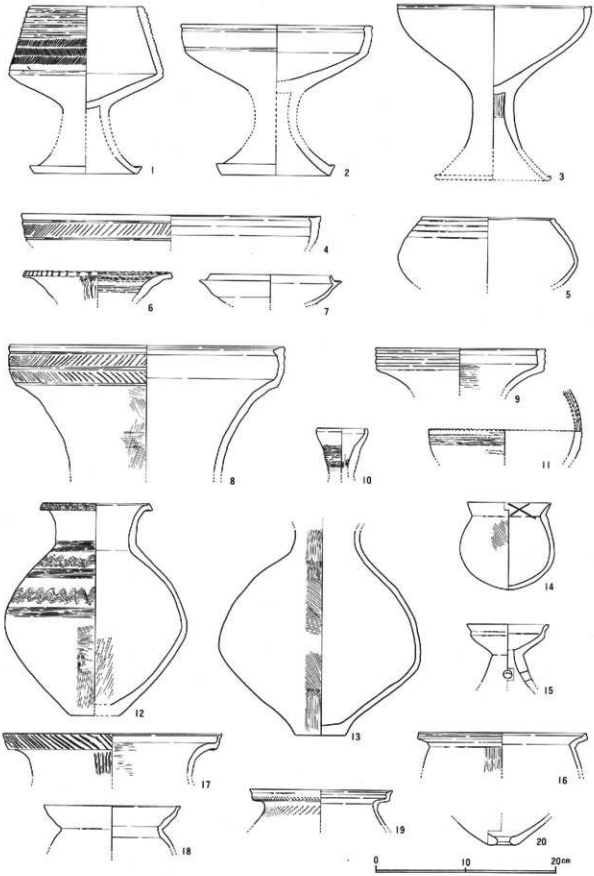


鴨田遺跡溝1出土土器実測図(1)

図版 2

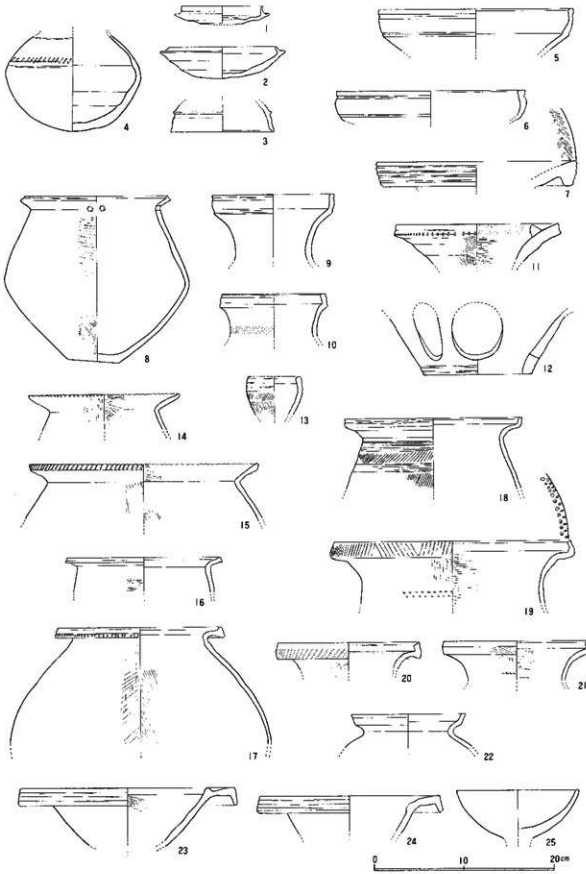


鴨田遺跡溝 I 出土土器実測図(2)

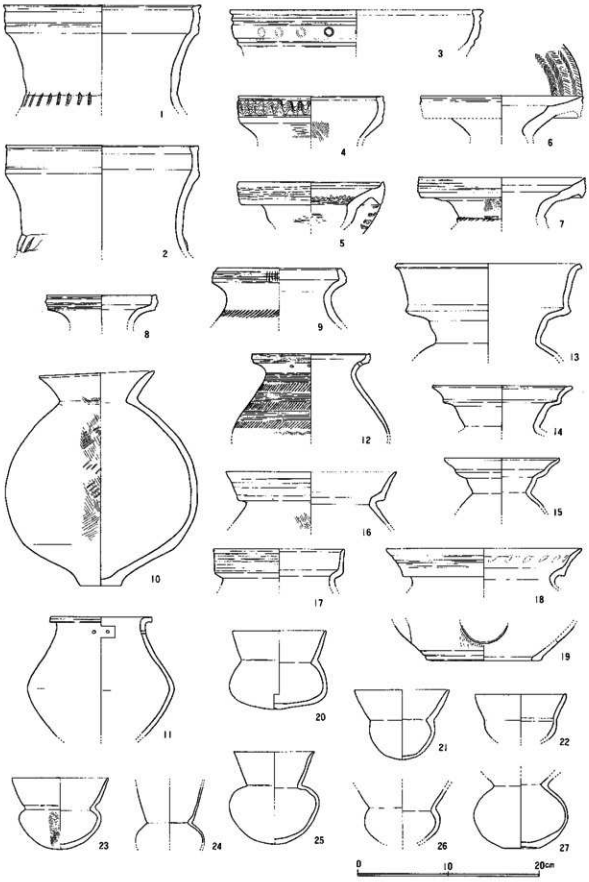


鴨田遺跡溝1・2・3出土土器実測図

図版 4

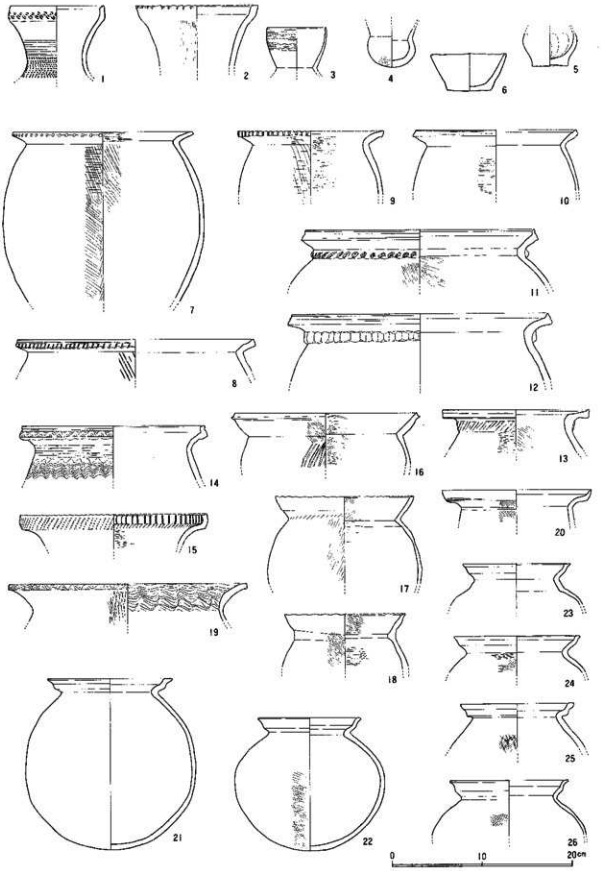


鴨田遺跡溝３・６出土土器実測図

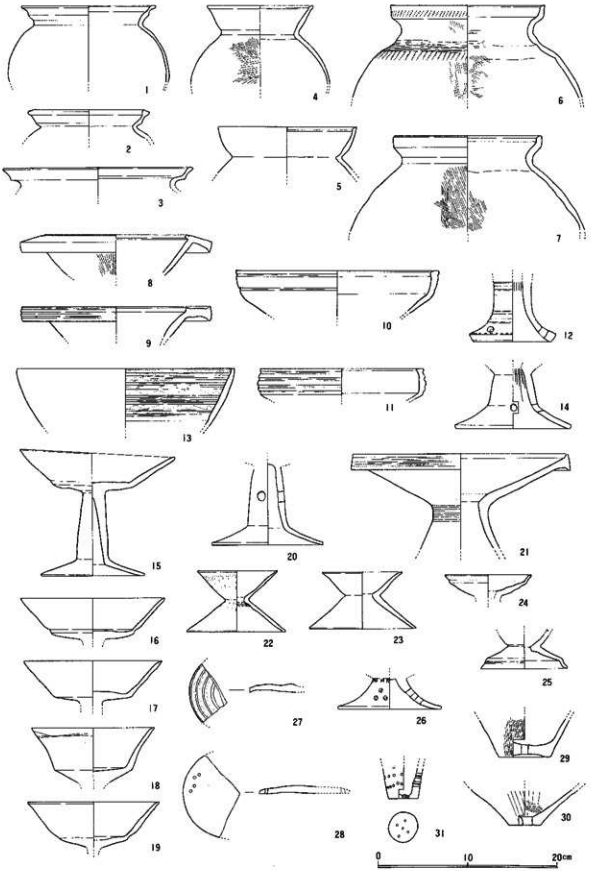


鴨田遺跡溝 7 出土土器実測図(1)

図版 6

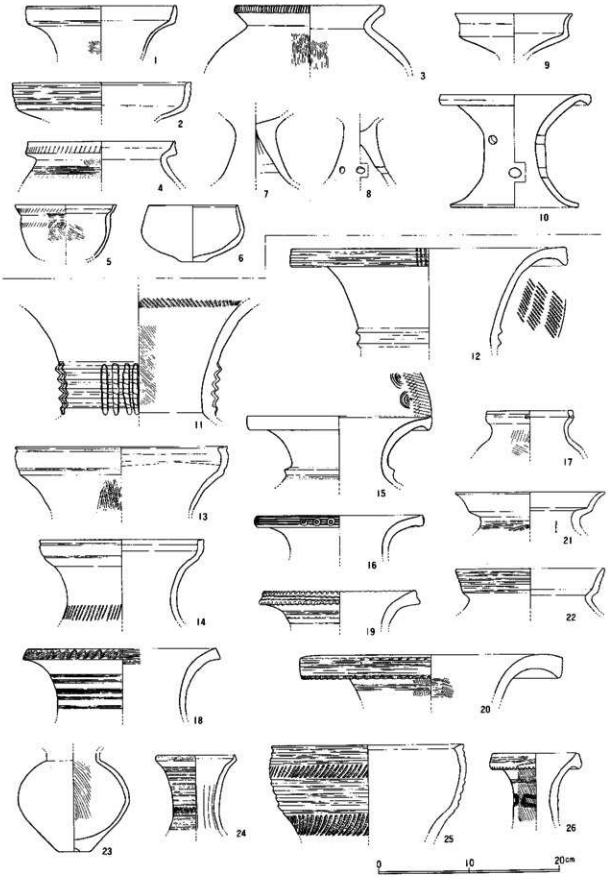


鴨田遺跡溝7出土土器実測図2)

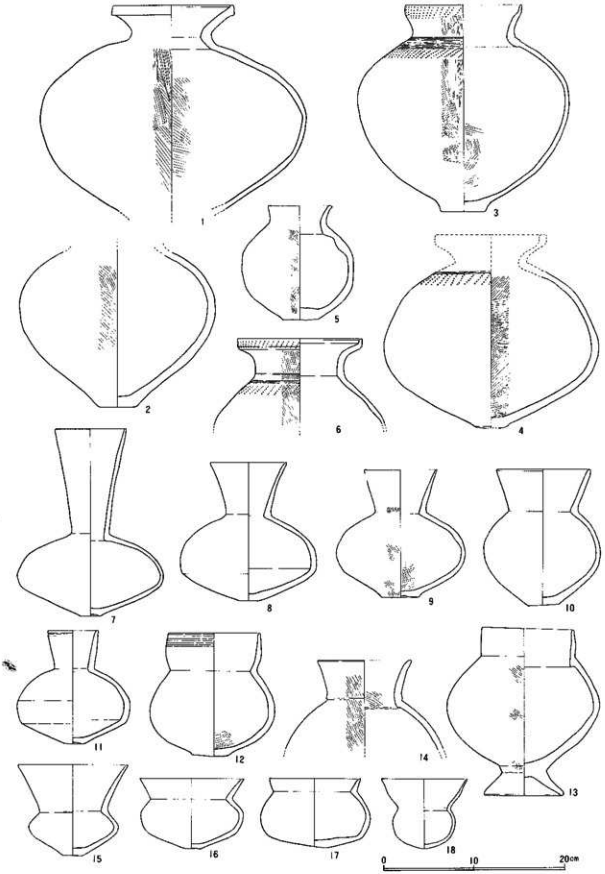


鴨田遺跡溝 7 出土土器実測図(3)

図版 8

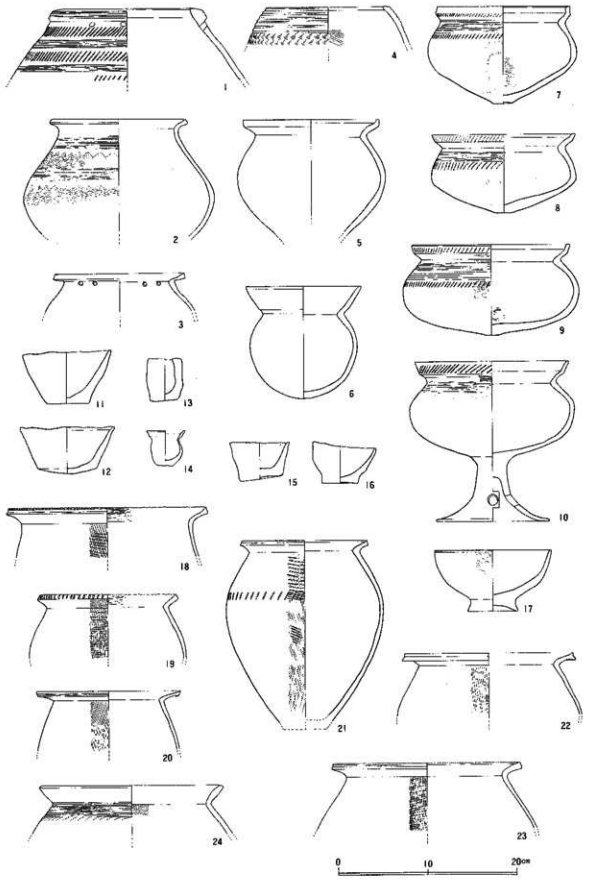


鴨田遺跡溝 8・12出土土器実測図

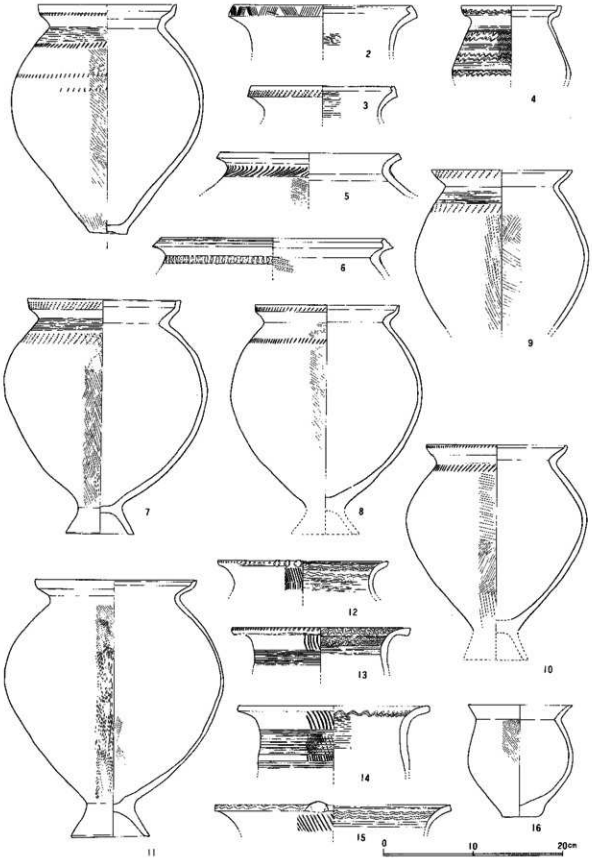


鴨田遺跡溝12出土土器実測図(1)

図 版 10

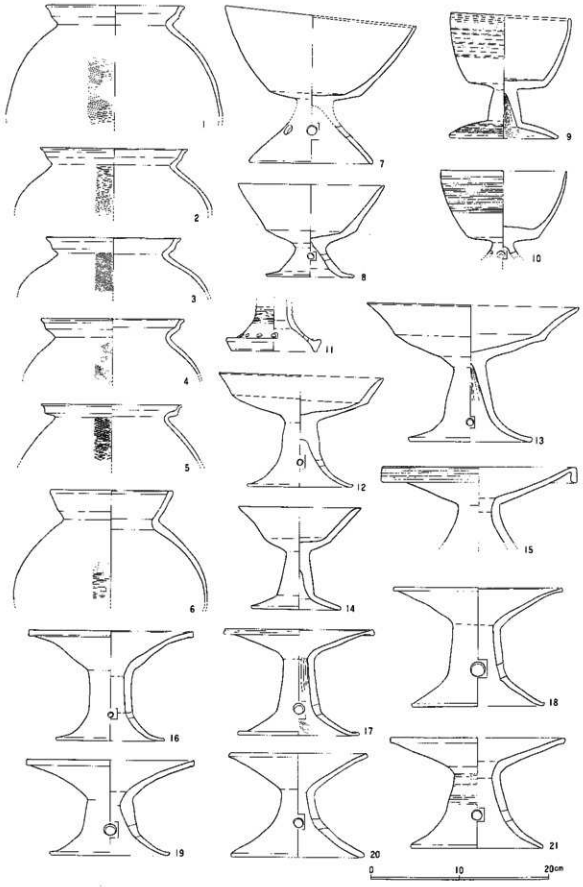


鴨田遺跡溝12出土土器実測図(2)

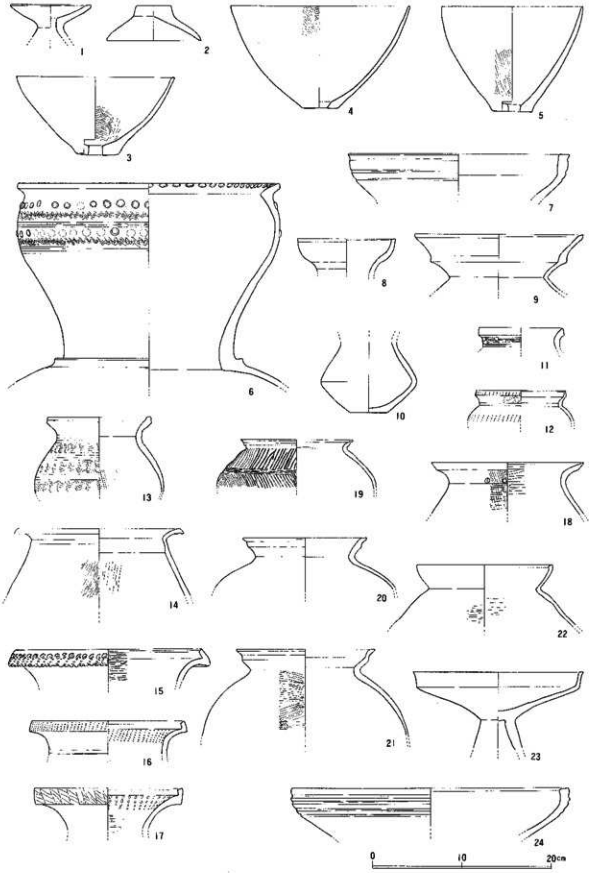


鴨田遺跡溝12出土土器実測図(3)

図版 12

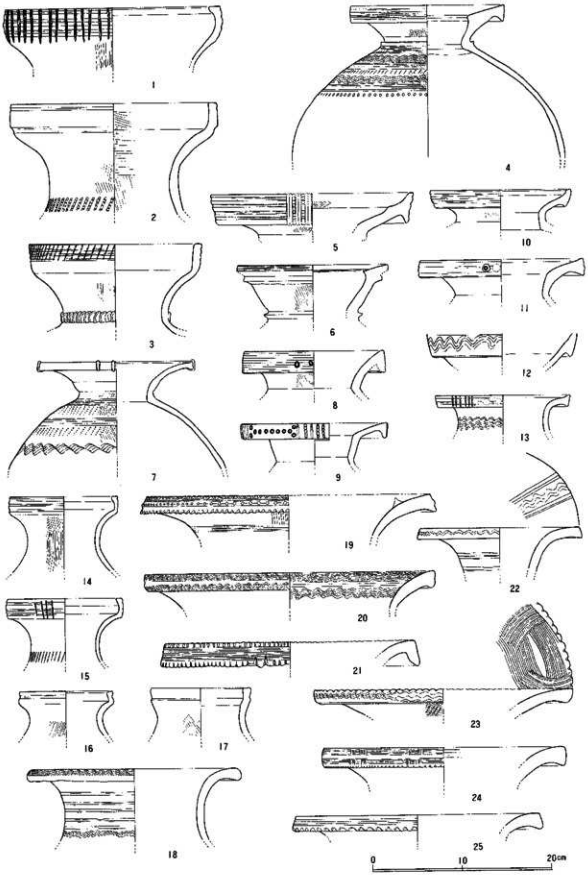


鴨田遺跡溝12出土土器実測図(4)

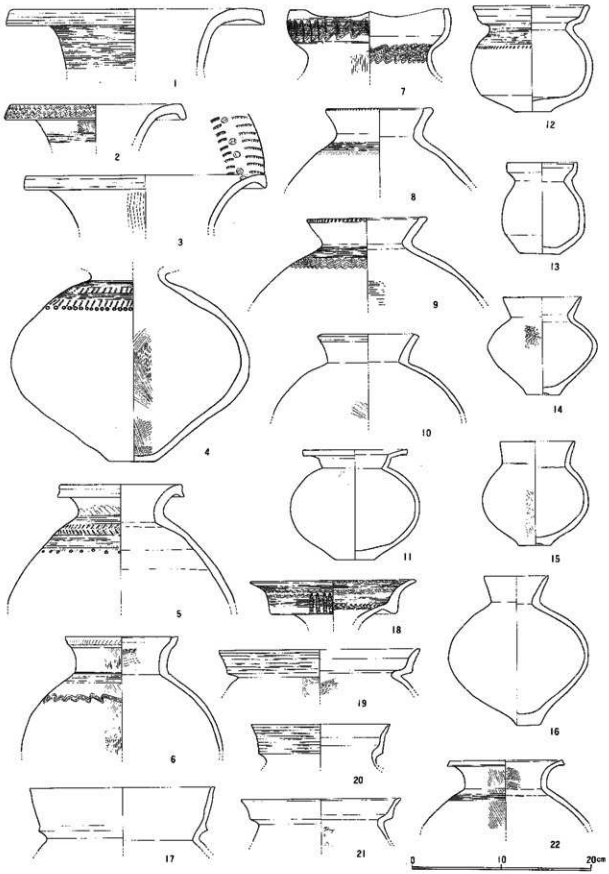


鴨田遺跡溝12・15出土土器実測図

図 版 14

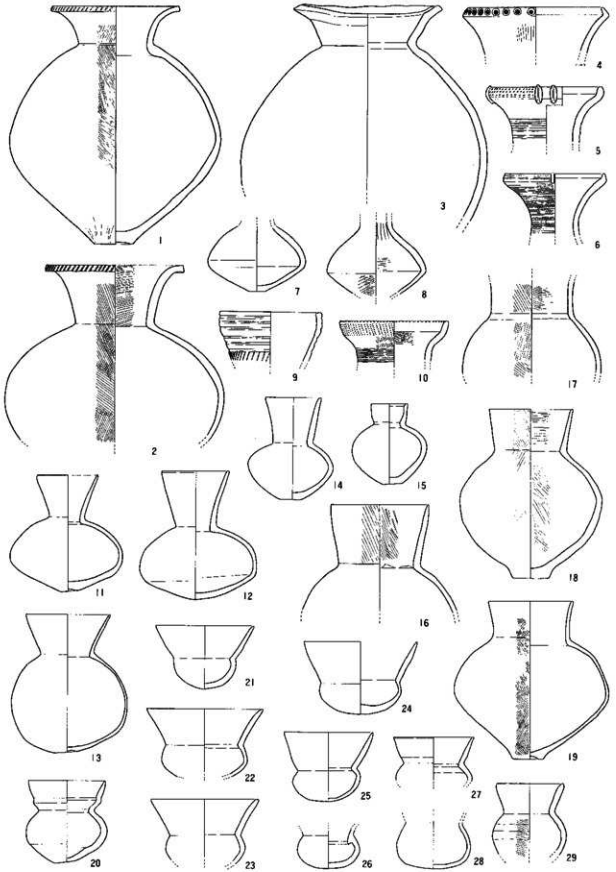


鴨田遺跡溝A(沼沢地)出土土器実測図(1)

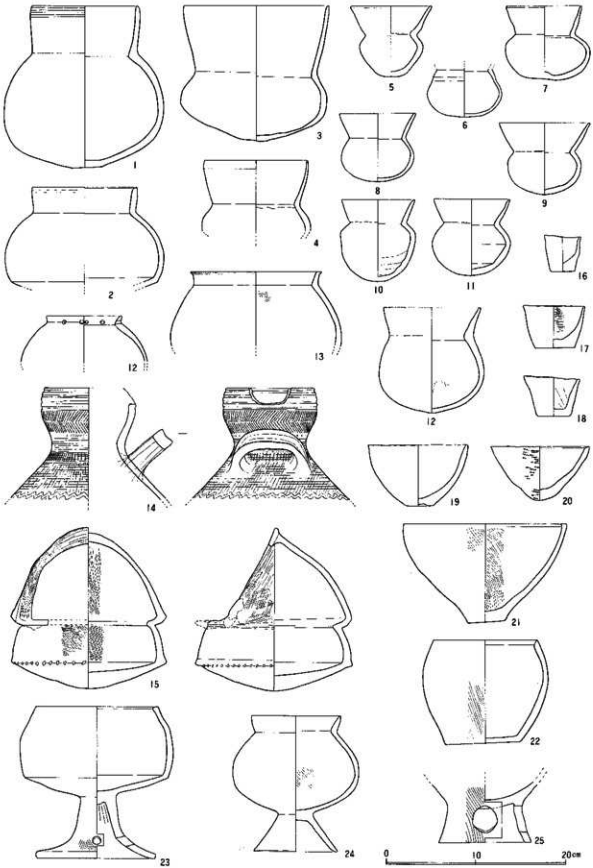


鴨田遺跡溝A(沼沢地)出土土器実測図(2)

図版 16

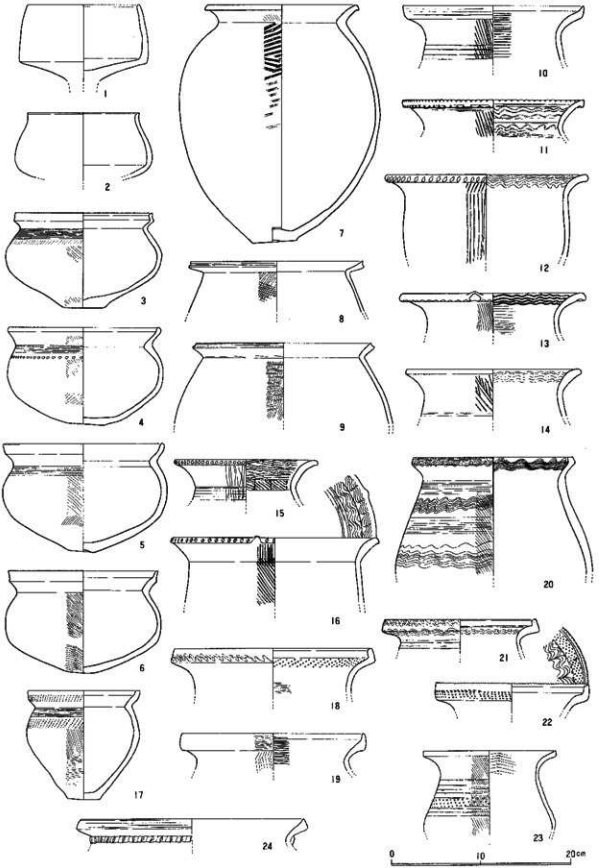


鴨田遺跡溝A（沼沢地）出土土器実測図(3)

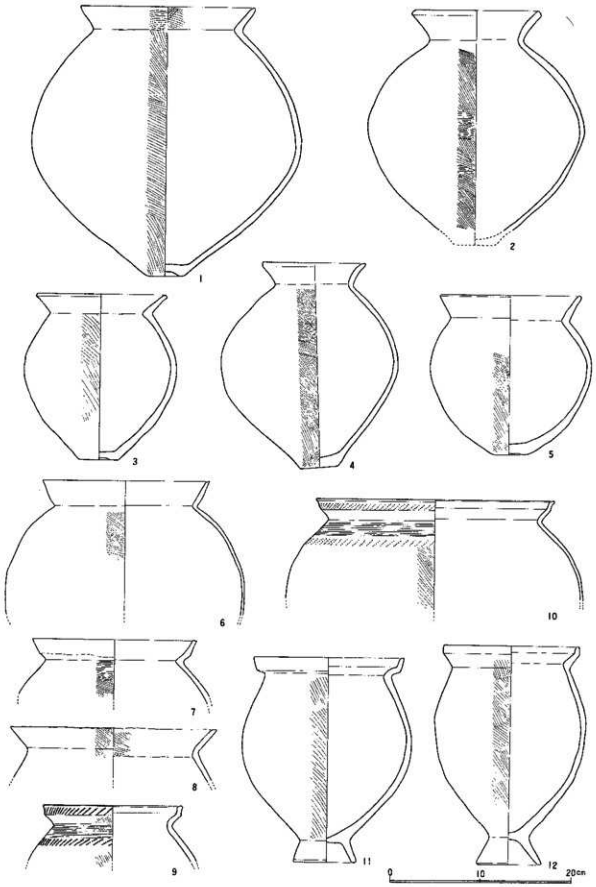


鴨田遺跡溝A（沼沢地）出土土器実測図(4)

図 版 18

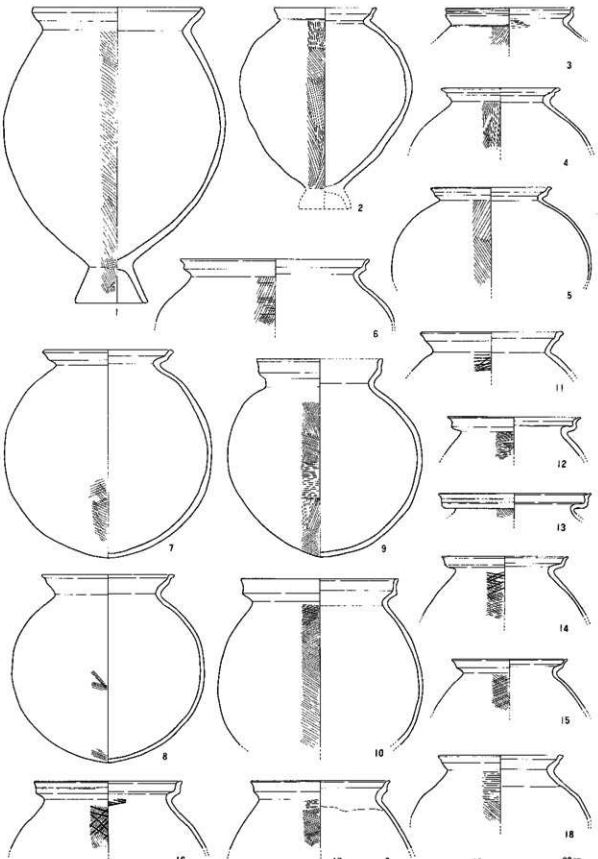


鴨田遺跡溝A(沼沢地)出土土器実測図(5)

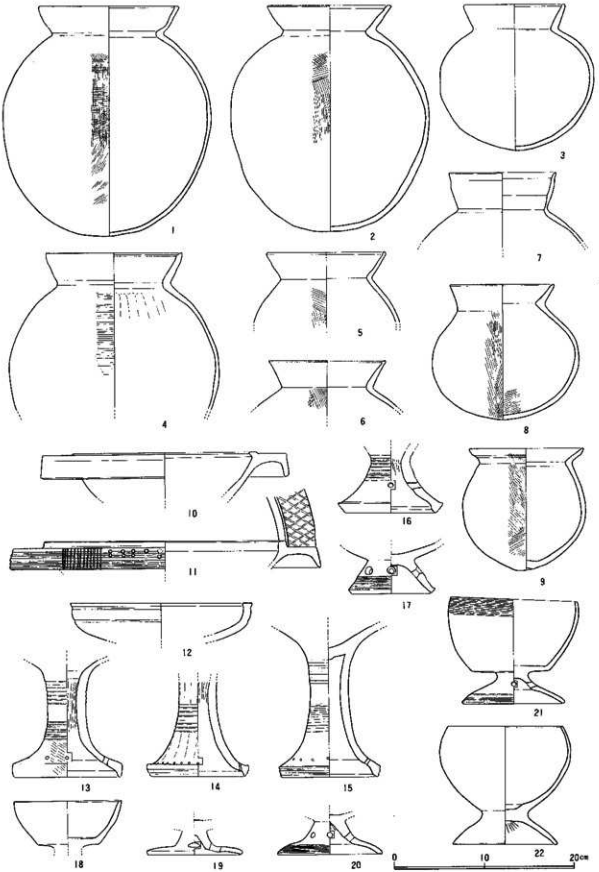


鴨田遺跡溝A（沼沢地）出土土器実測図(6)

図版 20

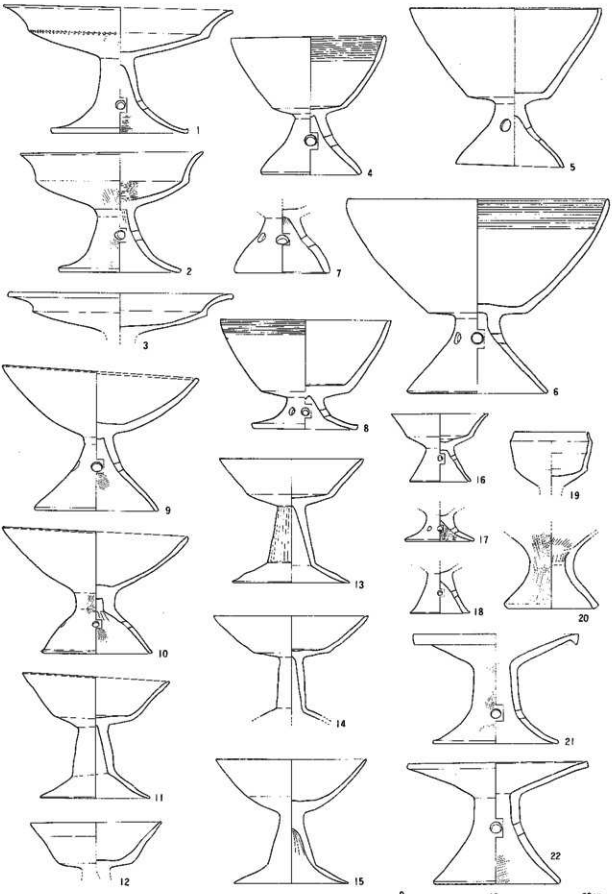


鴨田遺跡溝A(沼沢地)出土土器実測図(7)

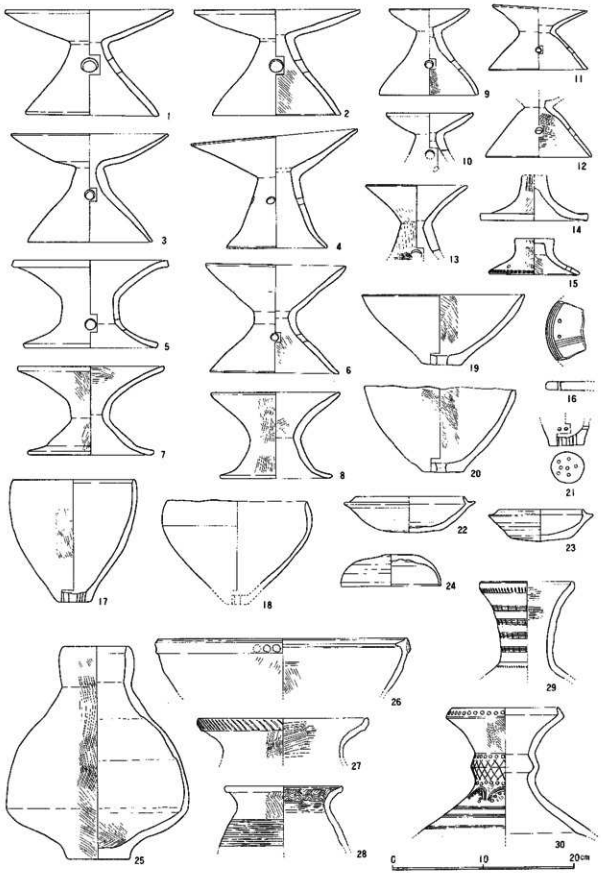


鴨田遺跡溝A(沼沢地)出土土器実測図(8)

図版 22

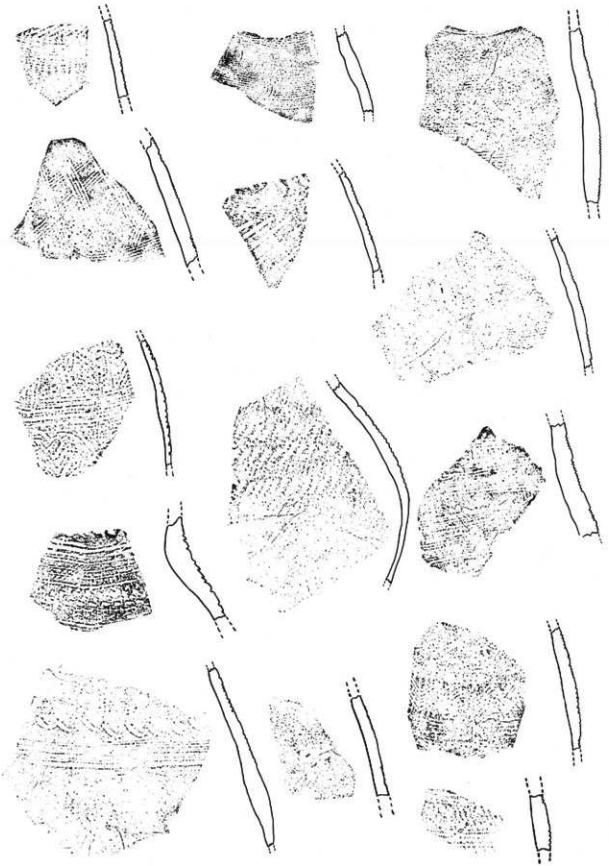


鴨田遺跡溝A(沼沢地)出土土器実測図(9)

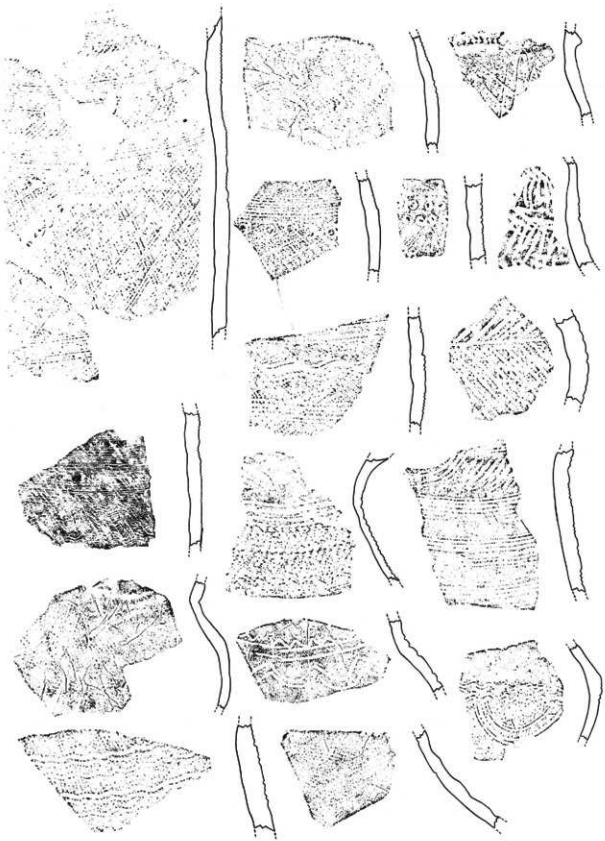


鴨田遺跡溝A(沼沢地)・ピット2出土土器実測図

図版 24

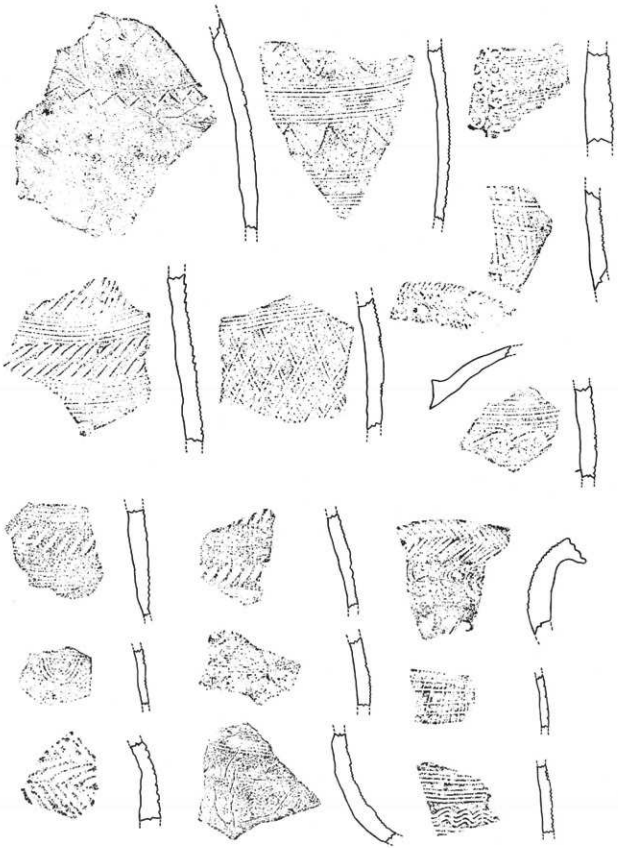


鴨田遺跡溝1出土土器拓影

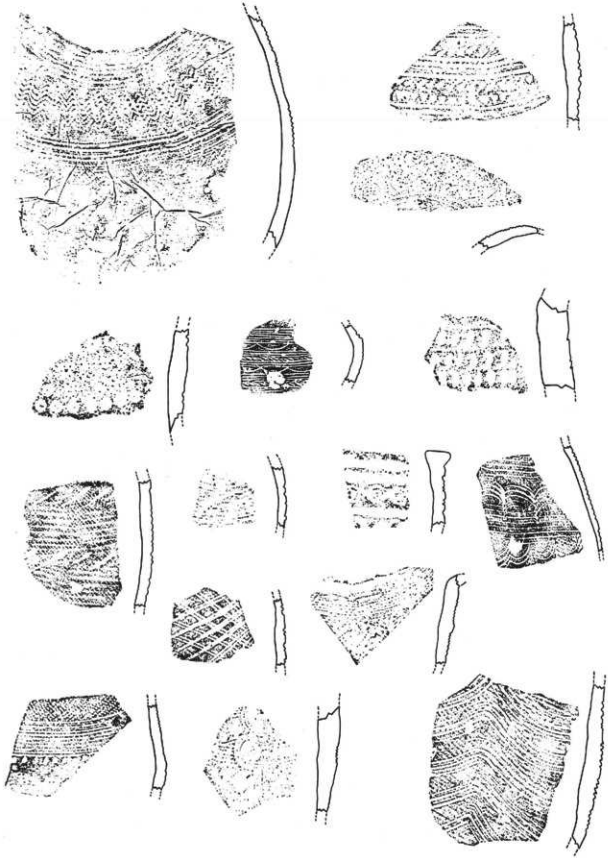


鴨田遺跡溝12出土土器拓影

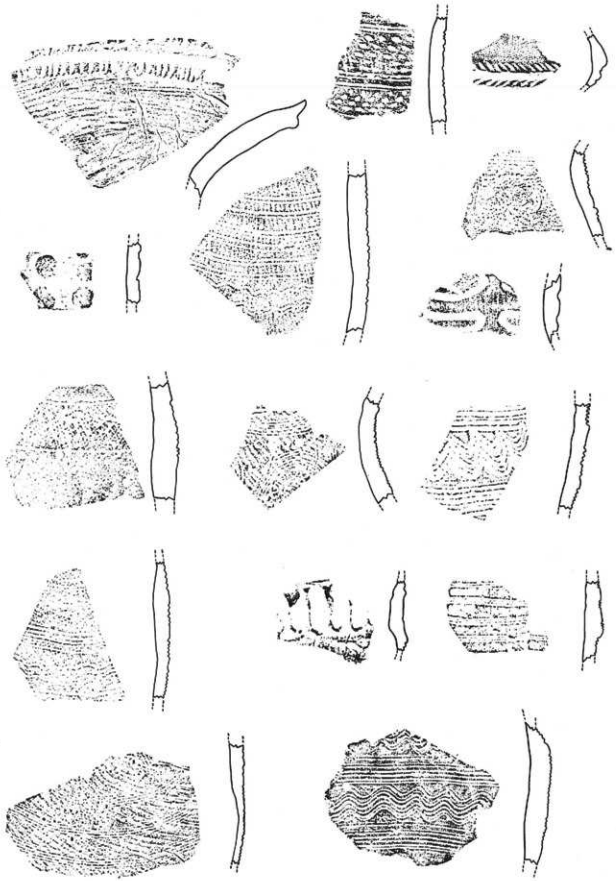
図 版 26



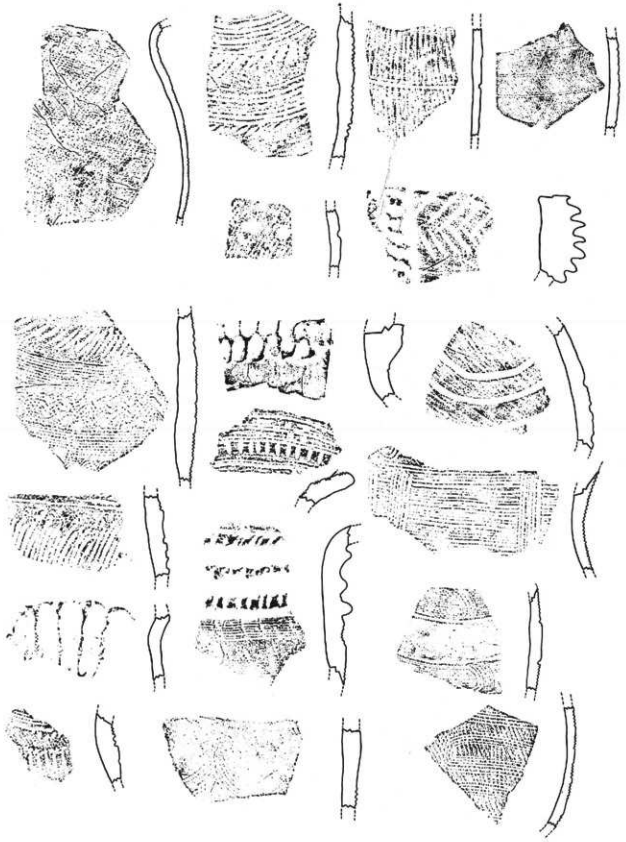
鴨田遺跡溝15出土土器拓影



鴨田遺跡溝A西第Ⅰ地区土土土器拓影

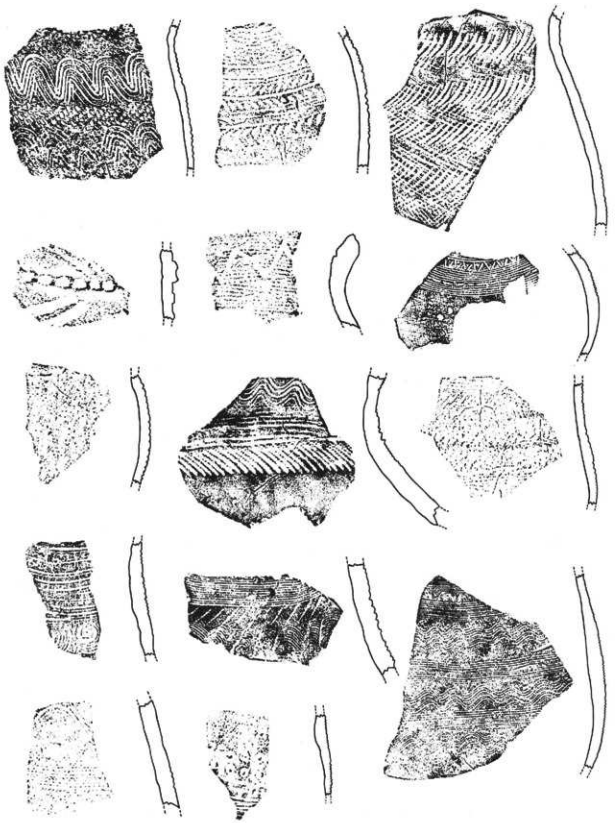


鴨田遺跡溝A西第6地区出土土器拓影

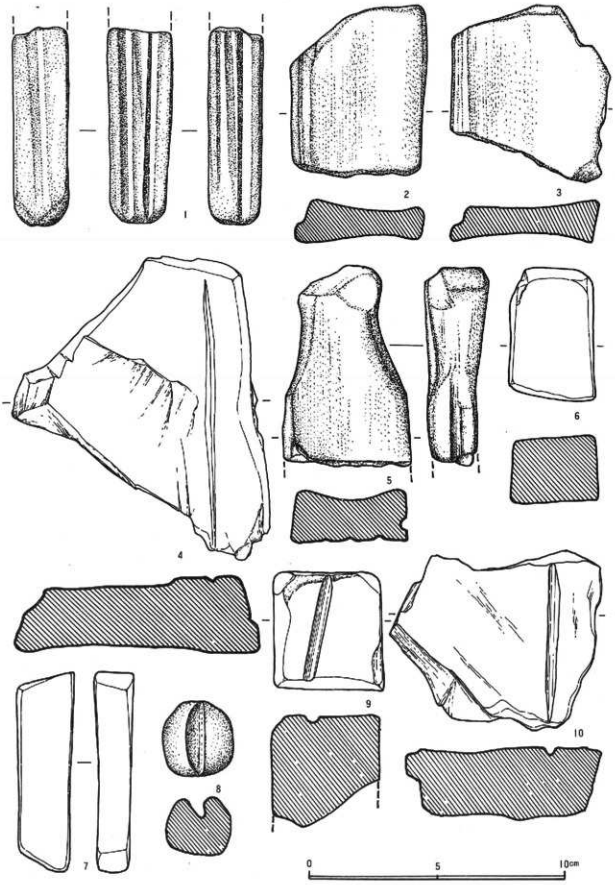


鴨田遺跡溝A西第5地区出土土器拓影

図 版 30

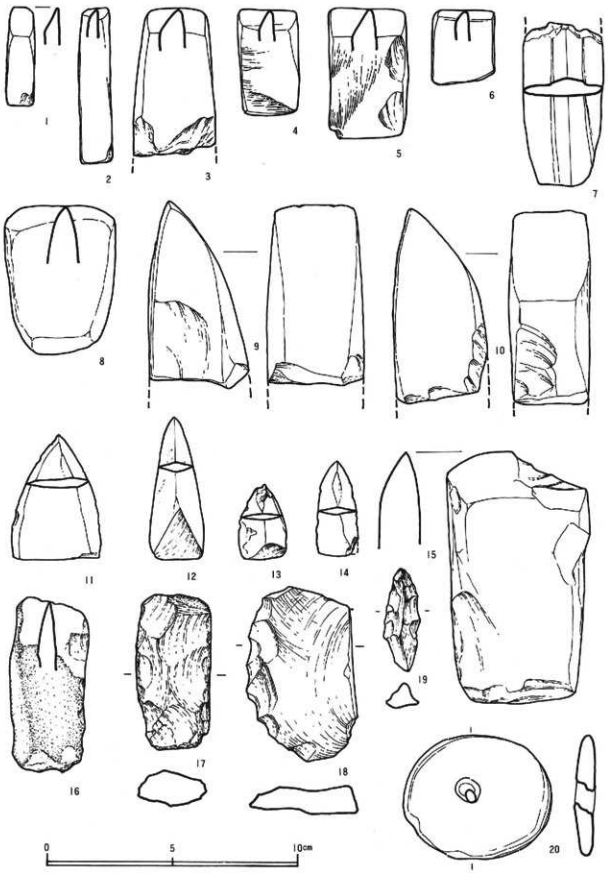


鴨田遺跡溝A西第3地区出土土器拓影

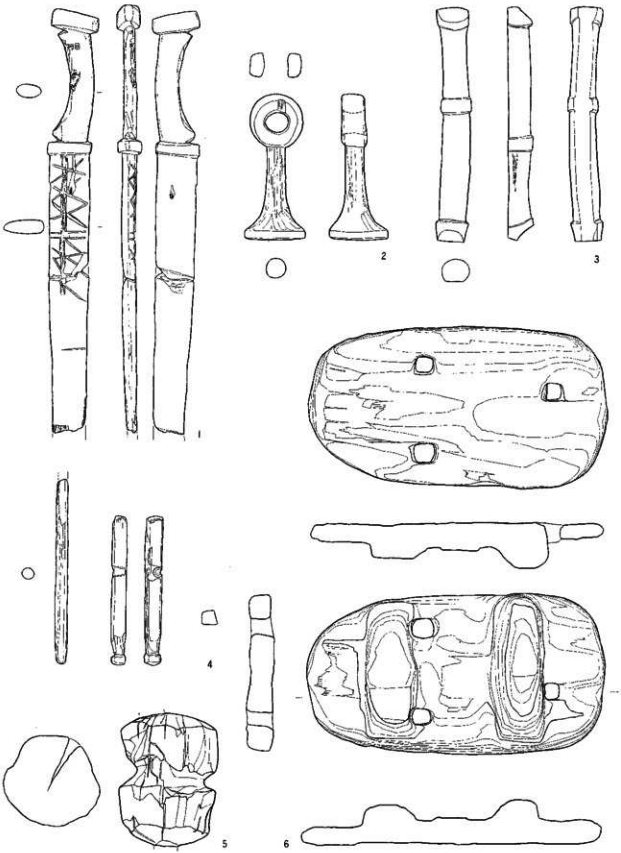


鴨田遺跡出土の砥石類

図 版 32

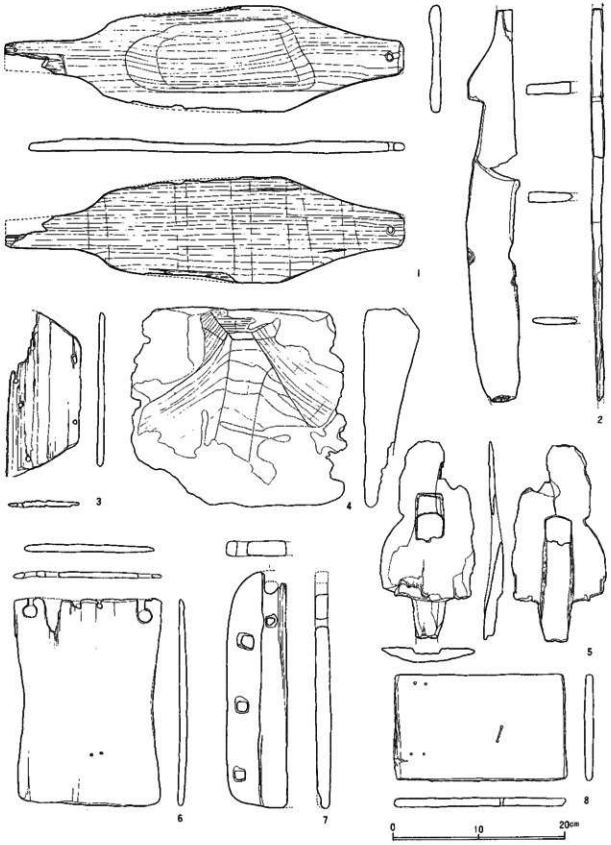


鴨田遺跡出土の石器各種

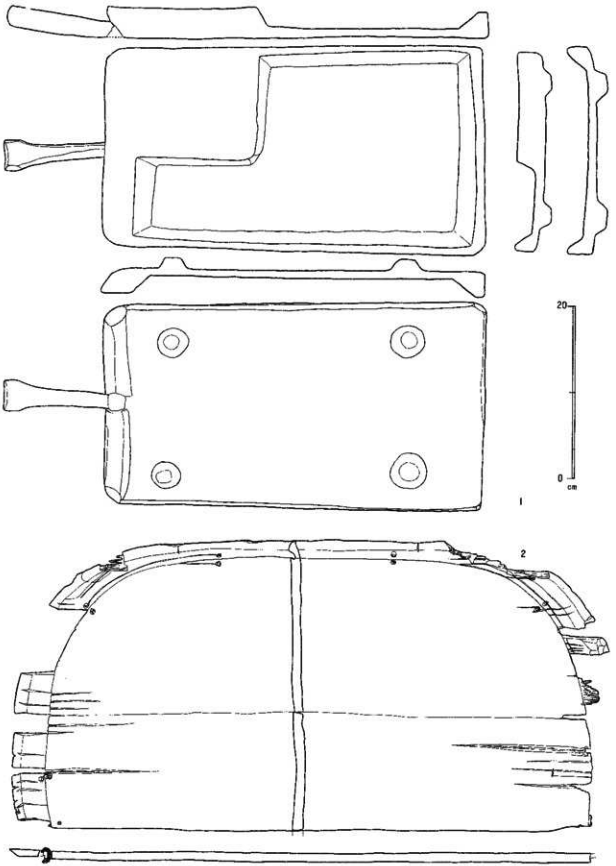


鴨田遺跡出土の木器類(1)

図 版 34

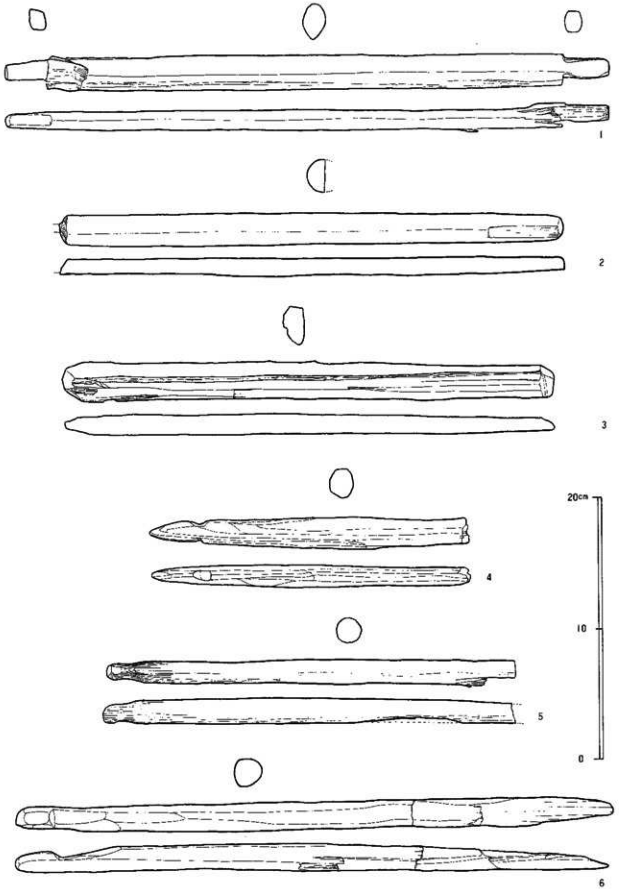


鴨田遺跡出土の木器類(2)

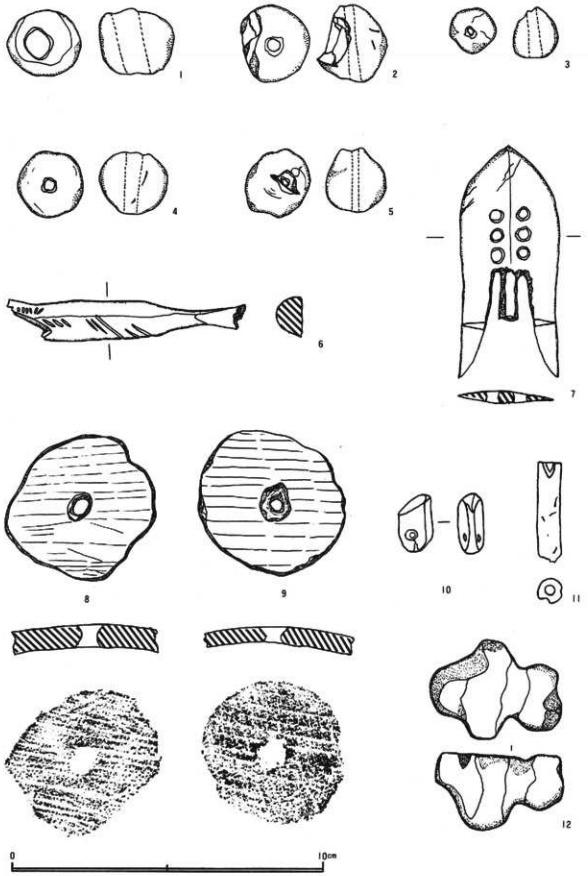


鴨田遺跡出土の木器類(3)

図版 36

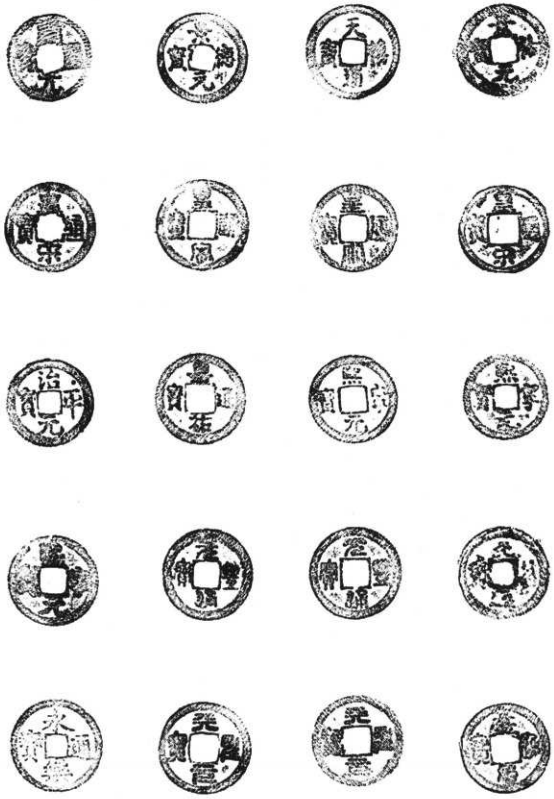


鴨田遺跡出土の木器類(4)

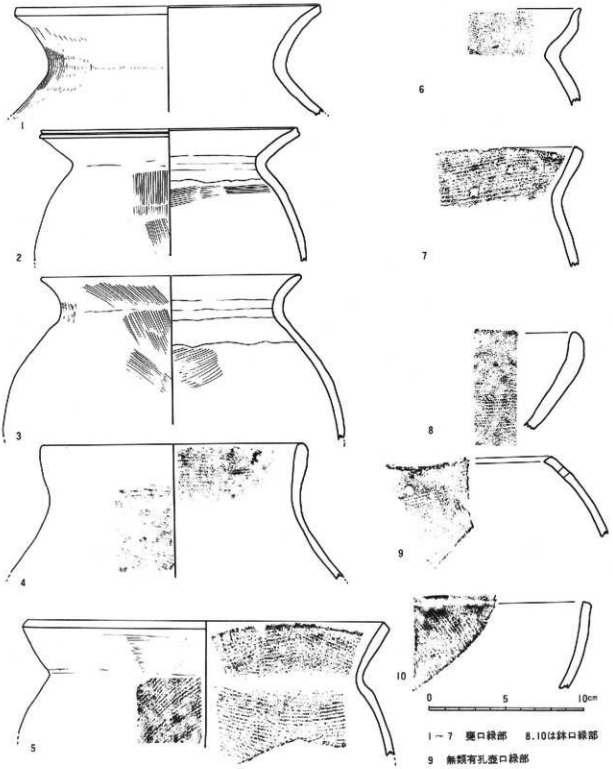


鴨田遺跡出土の各種遺物

図 版 38



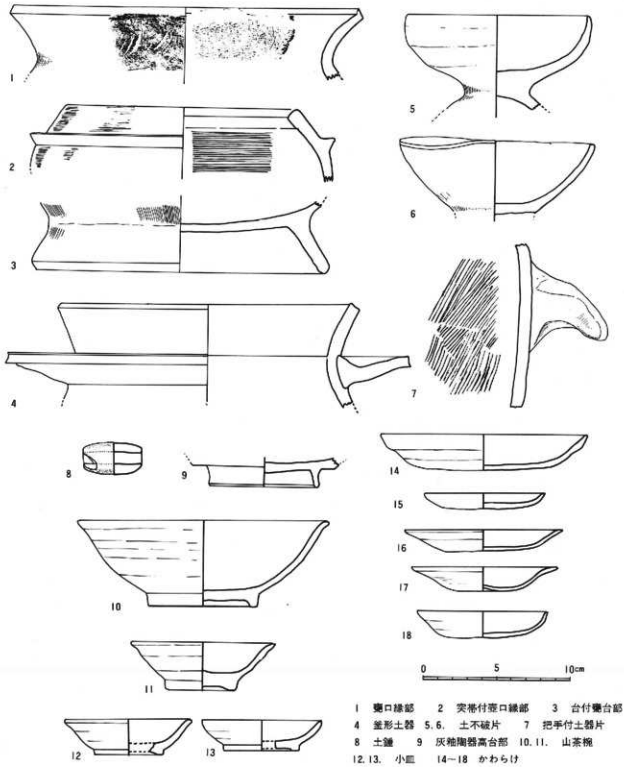
鴨田遺跡出土の古銭



1～7　甕口縁部　8.10は鉢口縁部
9　無頸有孔壺口縁部

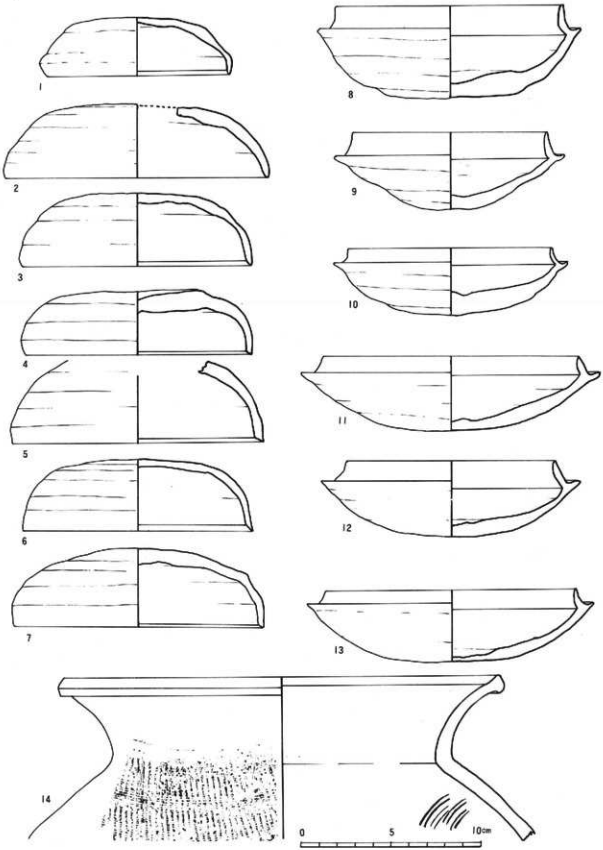
勝町遺跡出土土師式土器口縁部片

図 版 40



1　甕口縁部　2　突帯付甕口縁部　3　台付甕台部
4　釜形土器　5.6.　土不破片　7　把手付土器片
8　土錘　9　灰釉陶器高台部　10.11.　山茶椀
12.13.　小皿　14～18　かわらけ

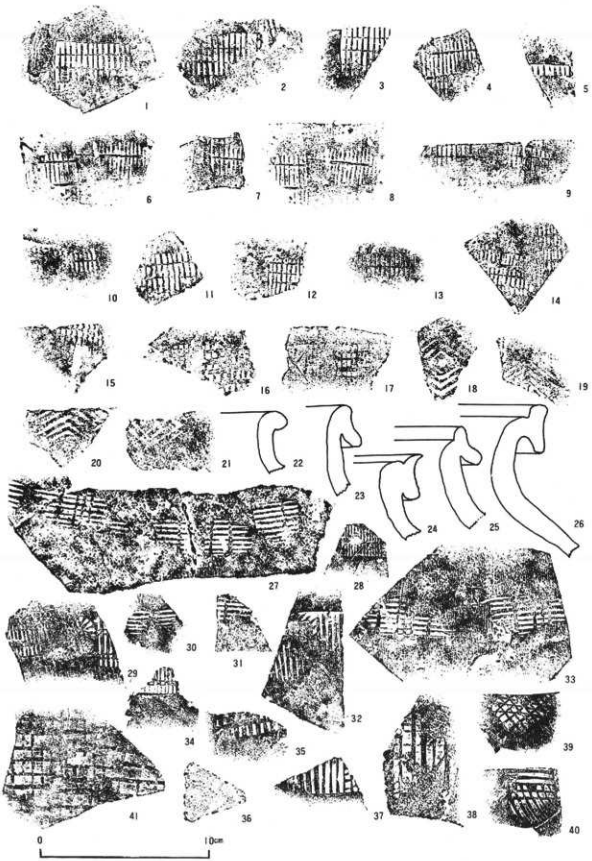
勝町遺跡出土遺物



1～7 壺　8～13 杯　14 壺口縁部

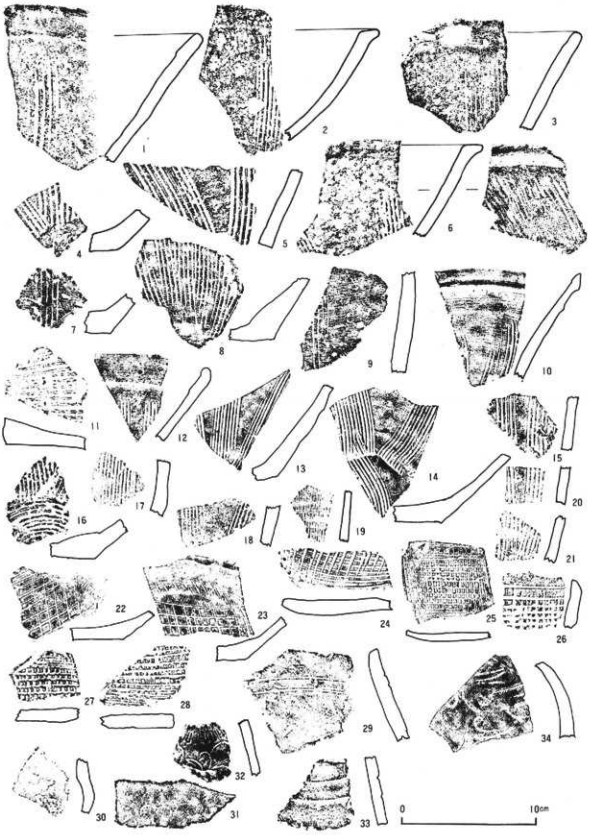
勝町遺跡出土須恵器

図版 42



1～21　川崎南遺跡出土　　22～40　勝町東遺跡出土

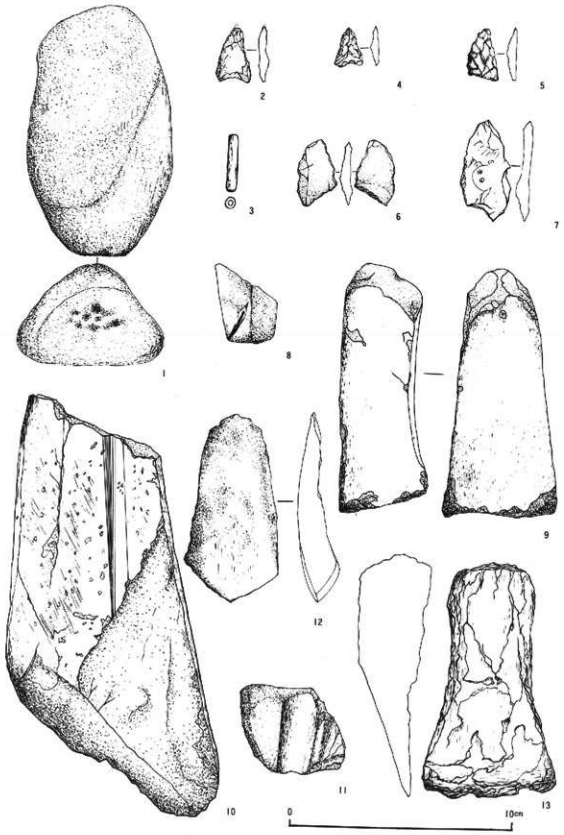
川崎南遺跡および勝町遺跡出土陶器拓影



1～21 擂鉢　22～28 おろし皿　29～34 壺

勝町遺跡出土陶器拓影

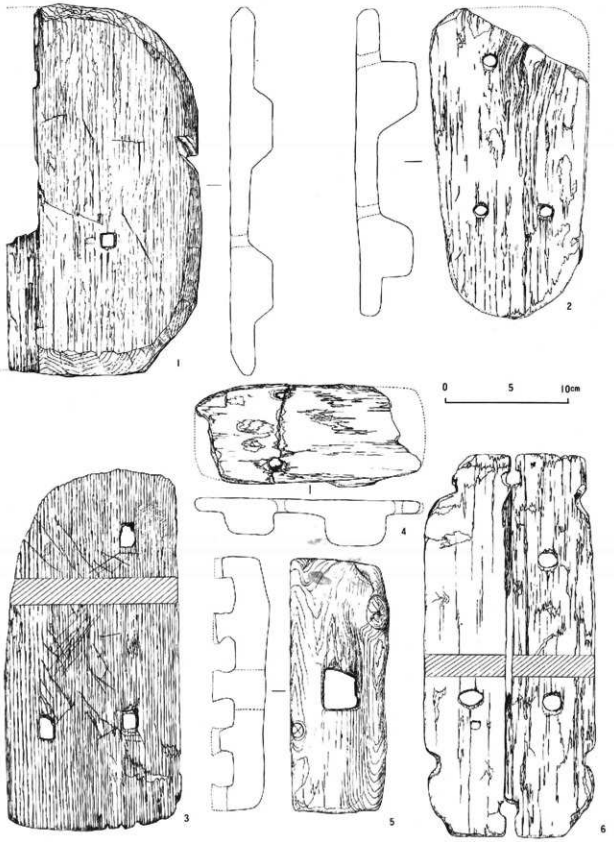
図版 44



1～3　川崎南遺跡出土　1．叩石　2．石鏃　3．管玉

4～13　勝町東遺跡出土　4.5　石鏃　6.7　スクレイパ　8～11　砥石　12　磨製砂　13　鉄製手斧

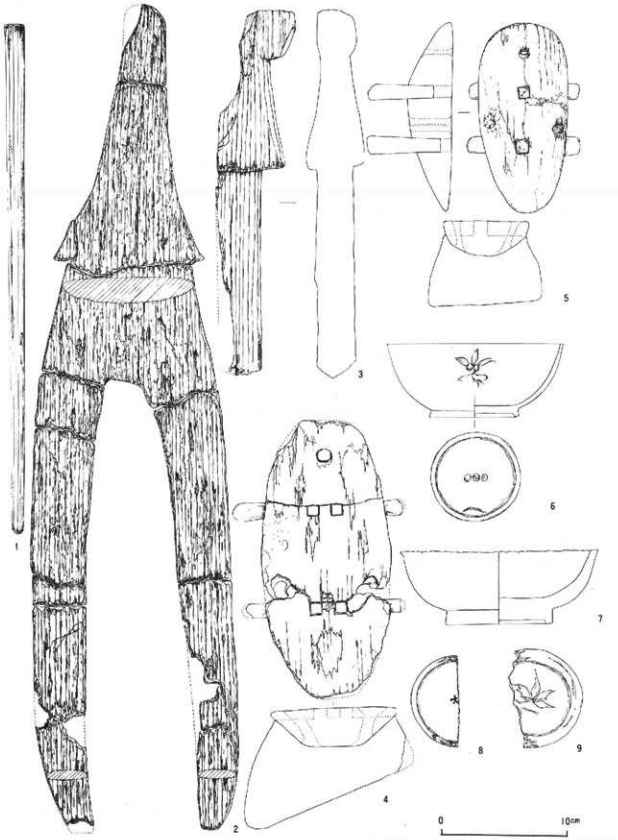
川崎南遺跡、勝町遺跡石器鉄器実測図



1.3.6. 田下駄　2.4 駒下駄　5 木製品

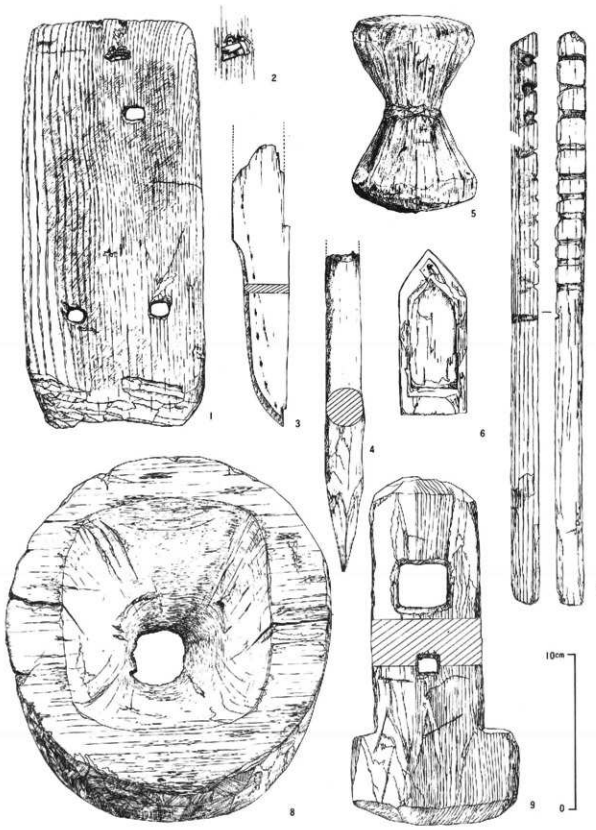
勝町遺跡出土木器実測図(1)

図 版 46



1 大管　2 鍬具　3 把手　4.5. 高下駄
6～9 木枕

勝町遺跡出土木器実測図(2)



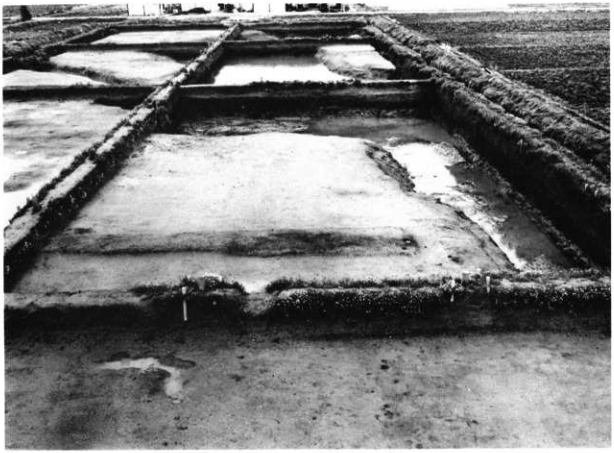
1　田下駄　2　手持綱結び目　3.4.9.　木製品　5　依織コマ　6　舟形木製品
7　火鑽臼　8　臼形木器

勝町遺跡出土木器実測図(3)

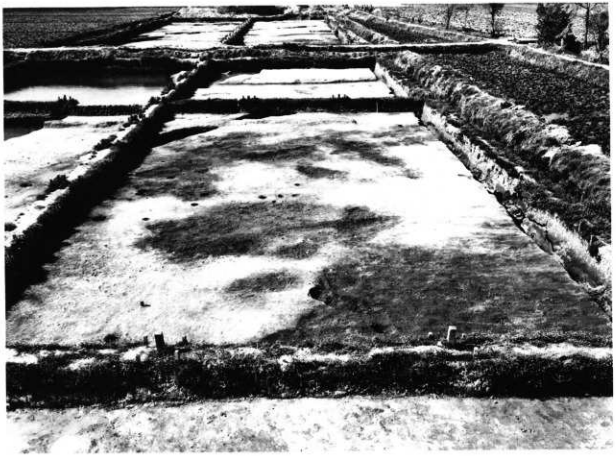
上、鴨田遺跡付近の景観（西より，後方左は伊吹山）　下、調査前の鴨田遺跡全景（南より）

上、鴨田遺跡K地区東側第1区域（東より）　下、同地区西側第1区域（東より）

上、鴨田遺跡K地区東側第２区域（南より）　下、同地区西側第２区域（北より）



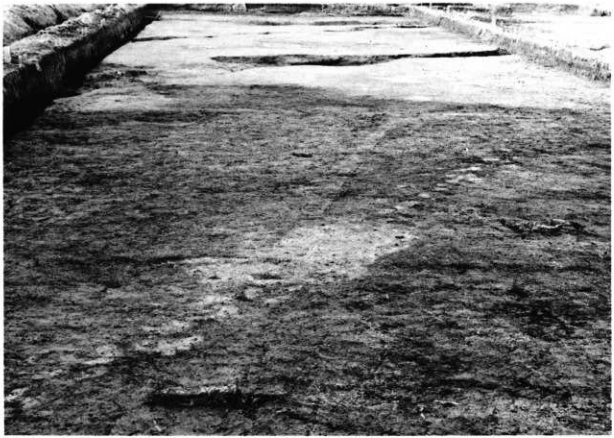
上、鴨田遺跡K地区東側第３区域（北より）　下、同地区西側第３区域（北より）

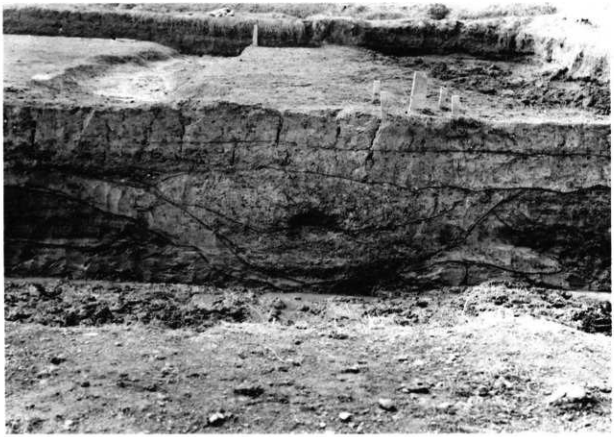


上、鴨田遺跡K地区東側第4区域（南より）　下、同地区西側第4区域（南より）

上、鳴田遺跡K地区東側第５区域（南より）　下、同地区西側第５区域（南より）

上、鴨田遺跡T地区東側全景（北より）　下、同地区西側全景（北より）





上、鴨田遺跡溝5遺存状況（南より）　下、鴨田遺跡溝1断面

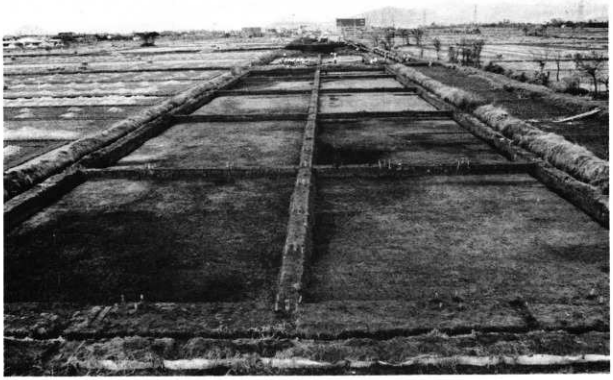
左、鴨田遺跡溝7（東より）

右、鴨田遺跡溝3（西より）

上、鴨田遺跡溝8（西より）　下、鴨田遺跡溝12（北西より）

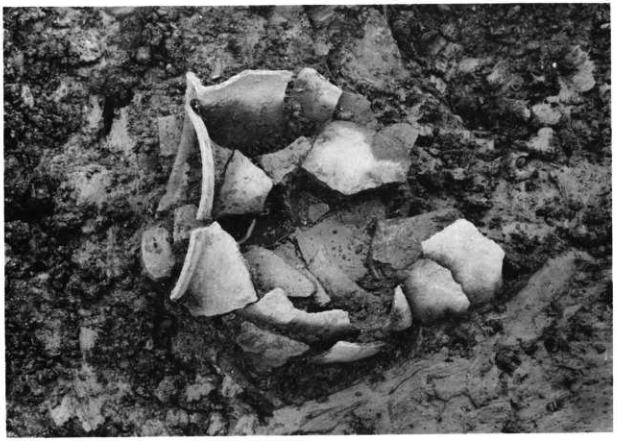
上、鴨田遺跡溝6・溝7（南より）　下、鴨田遺跡溝15（東より）

上、鴨田遺跡地割畦・ピット（西より）　下、鴨田遺跡溝1内土器出土状況（西より）



上、鴨田遺跡発掘状況　下、鴨田遺跡溝７内木材出土状況

上・下、鴨田遺跡溝A（沼沢地）木材出土状況



上、鴨田遺跡甕出土状態　下、鴨田遺跡溝A下畋出土状態

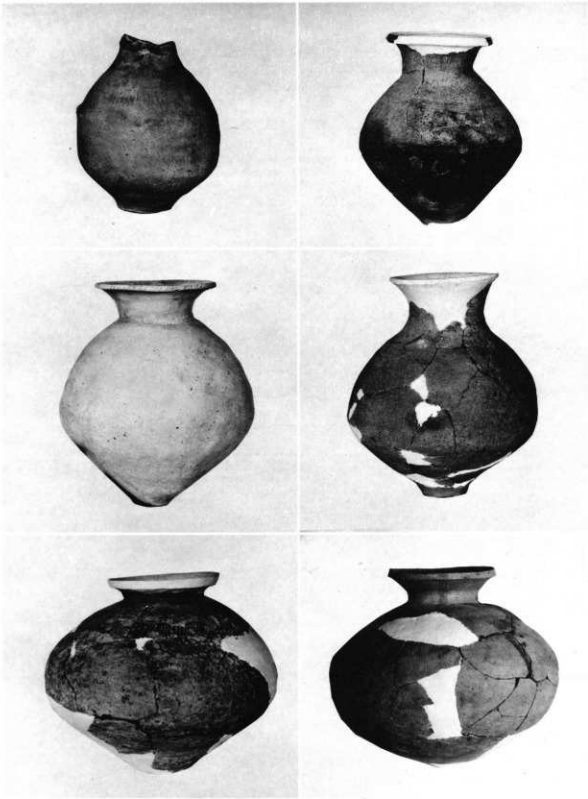
上・下、鴨田遺跡土器類出土状態

上・下、鴨田遺跡 土器出土状態

上、鴨田遺跡溝A銅鏃出土状態　下、鴨田遺跡木棺出土状態

鴨田遺跡出土の土器 (1)

図版1－5　図版2－1
23－25　1－6
1－1　1－11
1－8



鴨田遺跡出土の土器 (2)

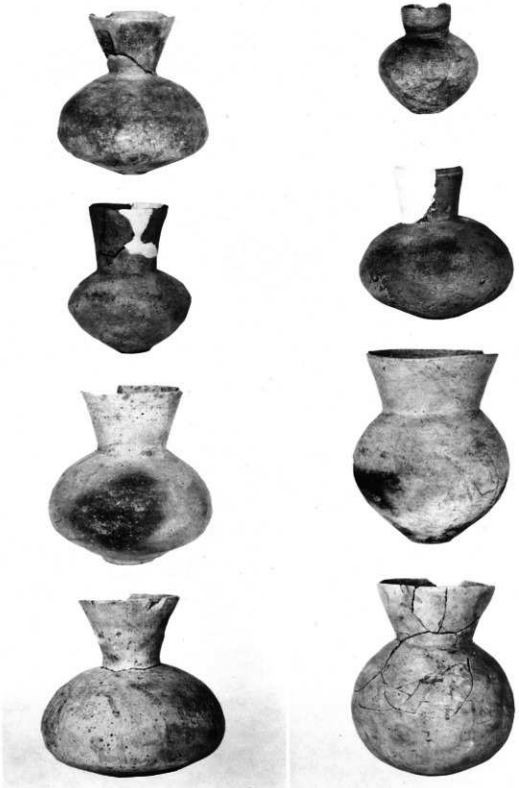
図版 1 —10　図版 3 —12
16— 1　3 —13
15— 4　9 — 1

鴨田遺跡出土の土器 (3)

図版5—10　図版15—13
15—16　15—14
9—3　9—2
16—3

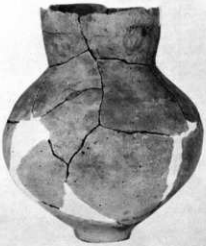
鴨田遺跡出土の土器 (4)

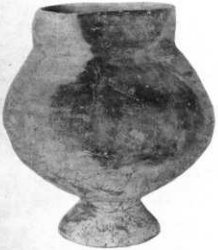
図版15—15　図版 9 — 5
8 —23　16—12
15—12　9 — 7
15—11



鴨田遺跡出土の土器 (5)

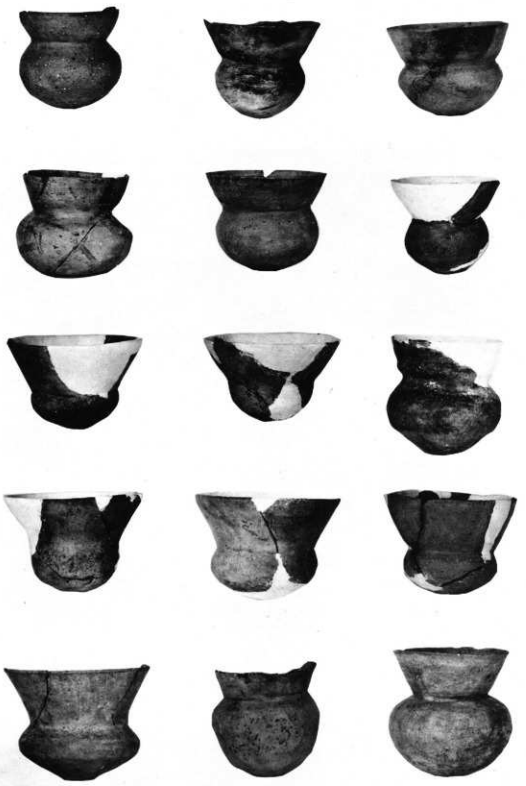
図版16—11　図版16—15
16—14　9—11
9—9　9—10
9—8　16—13





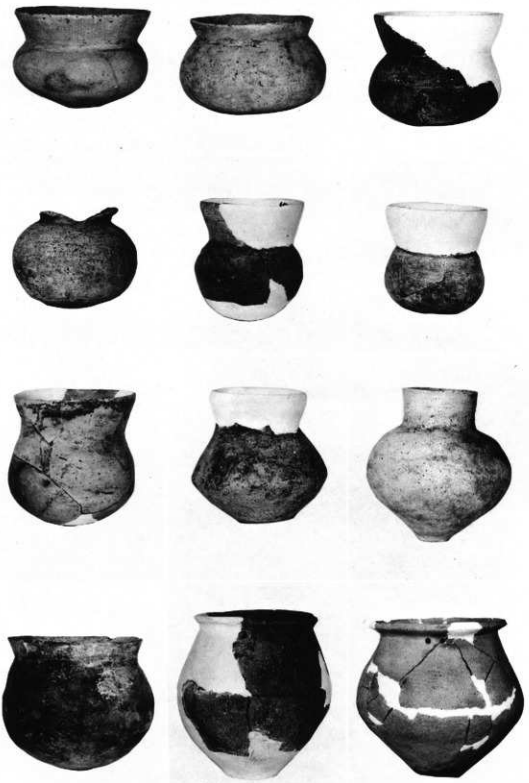
鴨田遺跡出土の土器 (6)

図版 9 —12　図版17— 2
17—1　17— 3
16—18　9 —13



鴨田遺跡出土の土器 (7)

図版17—11	図版 9 —18	図版 5 —23
17—7	17—9	17—5
16—24	16—21	16—20
5 —21	16—23	16—25
9 —15	17—10	5 —25



鴨田遺跡出土の土器 (8)

図版 9—16	図版 9—17	図版 5—20
5—27	16—29	16—28
17—12	13—10	16—19
3—14	2—2	4—8

鴨田遺跡出土の土器 (9)　　図版10—5　図版17—25
3—1　18—1
17—23　17—24

鴨田遺跡出土の土器 ⑩

図版10—7　図版18—3
10—8　18—4
10—9　18—6
18—5　10—10

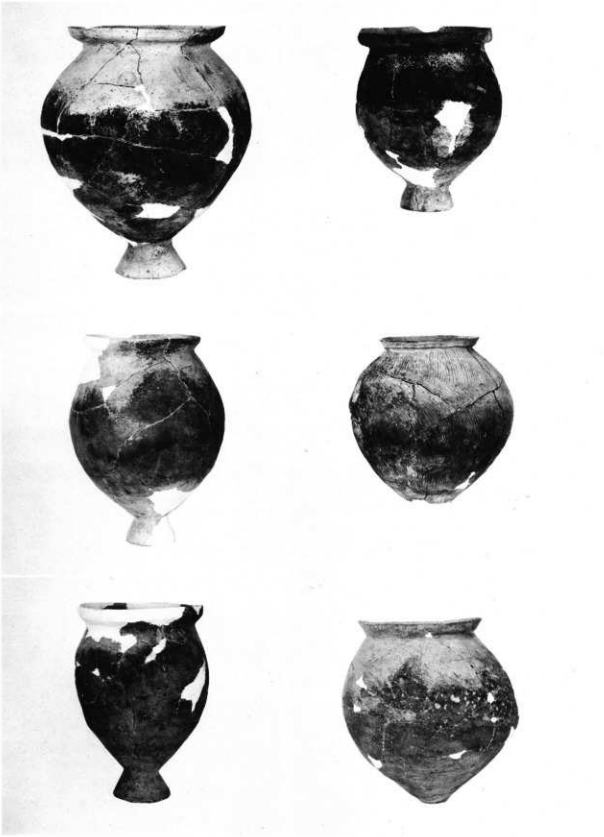
鴨田遺跡出土の土器 (1/1)　図版10—13　図版10—14　図版10—12
10—11　10—15　10—17
10—16　17—17　17—16
17—18　17—19　17—20

雹田遺跡出土の土器 (12)

図版2－6　図版6－7
18－7　11－1
10－21　2－13

鴨田遺跡出土の土器 (13)

図版 2 —12　図版11— 8
18—17　11— 9
11— 7　11—10



鴨田遺跡出土の土器 (4)

図版11—11　図版19—11
30—1　20—2
19—2　19—5

鴨田遺跡出土の土器 (15)

図版19—2　図版19—5
19—3　11—16
19—4　21—9

鴨田遺跡出土の土器 ⑩

図版20—8　図版20—7
6—21　20—10
6—22　21—2

鴨田遺跡出土の土器 (17)

図版21—3　図版10—6
21—1　3—2
21—8　22—2
22—1

鴨田遺跡出土の土器 (8)

図版12—7　図版12—10
12—13　21—21
22—3　12—8
12—9　22—8

鴨田遺跡出土の土器 (19)

図版22—5　図版22—4
22—6　22—9
12—7　22—16
21—22　13—23

鴨田遺跡出土の土器 (2)

図版22—10　図版22—15
22—11　22—14
12—14　22—13
7—15　22—12

鴨田遺跡出土の土器 (2)

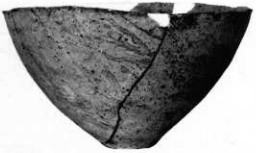
図版 7—21　図版12—21
22—21　12—19
8—10　12—17
23—5　12—18

鴨田遺跡出土の土器 (2)

図版23—4	図版23—3
12—16	23—1
12—20	23—2
22—22	23—6

鴨田遺跡出土の土器 (2/3)

図版23—13　図版23—11
23—8　23—11
23—9　22—7
7—23　13—1

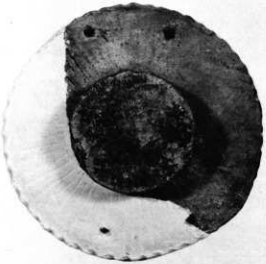


鴨田遺跡出土の土器 ⑳

図版 6 — 6　図版13— 3
23—17　13— 4
13— 5　23—20
23—19　23—18

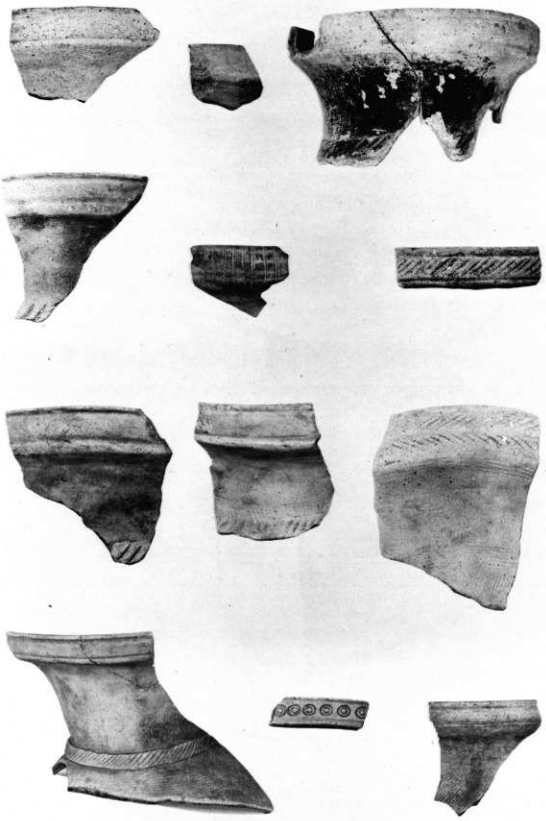
鴨田遺跡出土の土器 ㉙

図版17—21　図版17—22
8—6　13—2
17—15　17—15



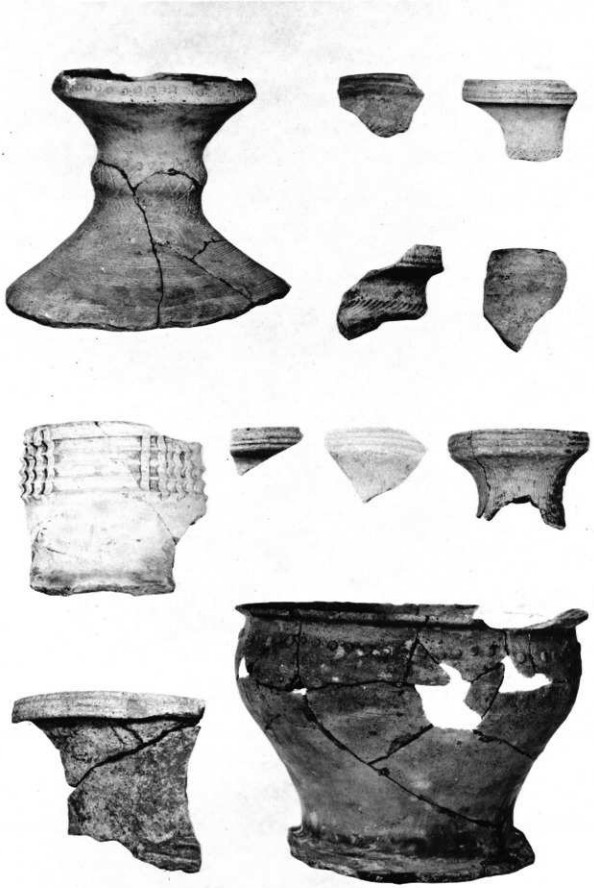
鴨田遺跡出土の土器 26

図版23—15　図版23—24
23—15　23—23
23—22
4—2　4—4



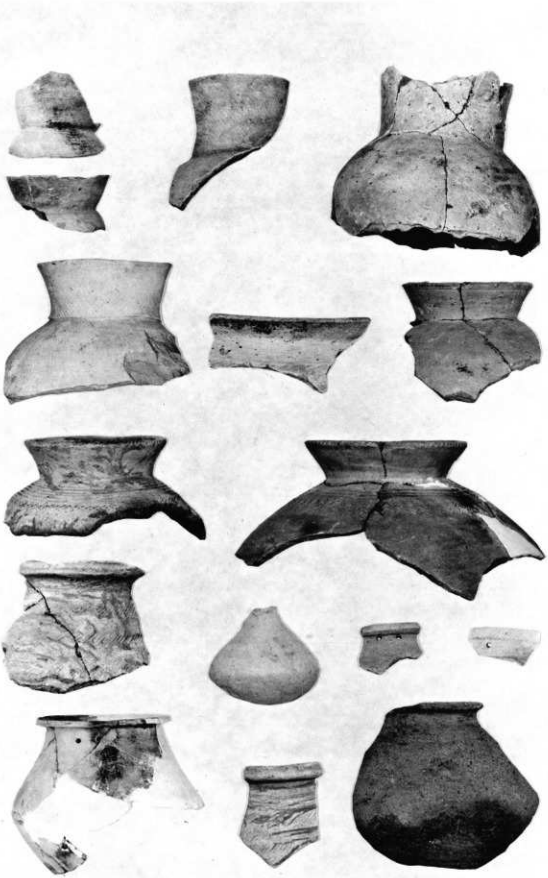
鴨田遺跡出土の土器破片 (1)

鴨田遺跡出土の土器破片（2）

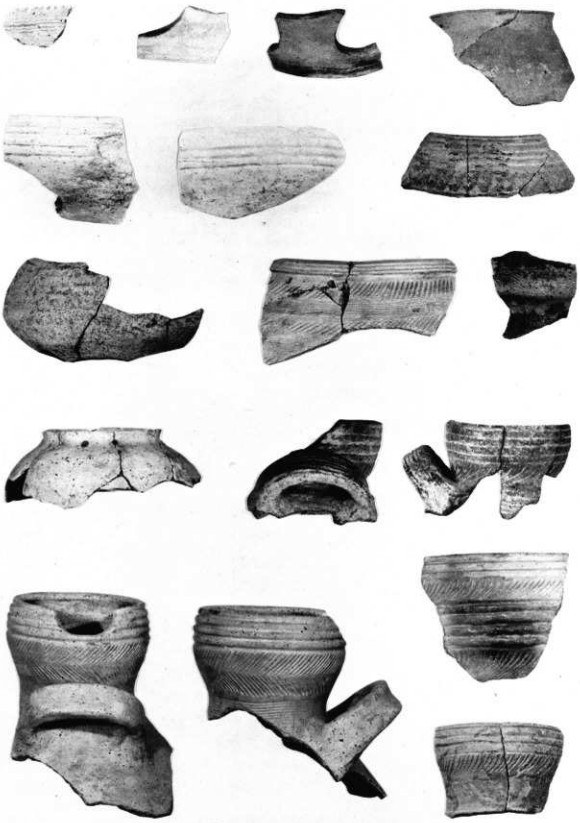


鴨田遺跡出土の土器破片 (3)

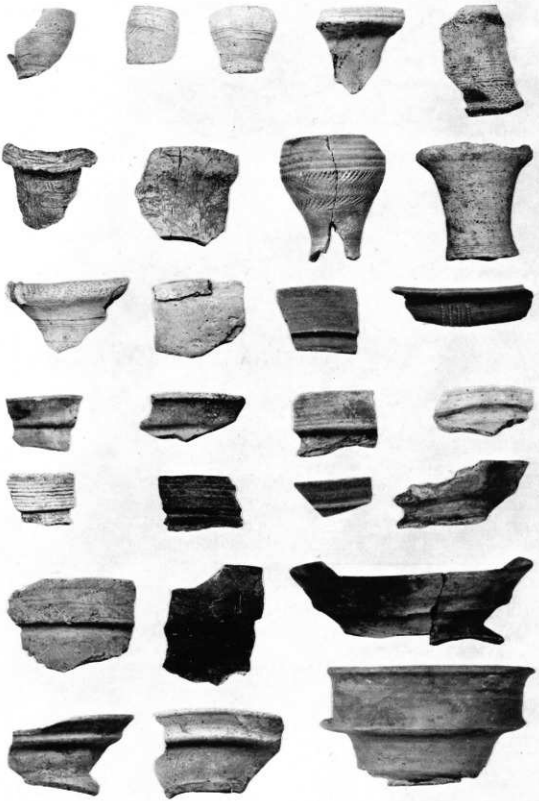
鴨田遺跡出土の土器破片 (4)



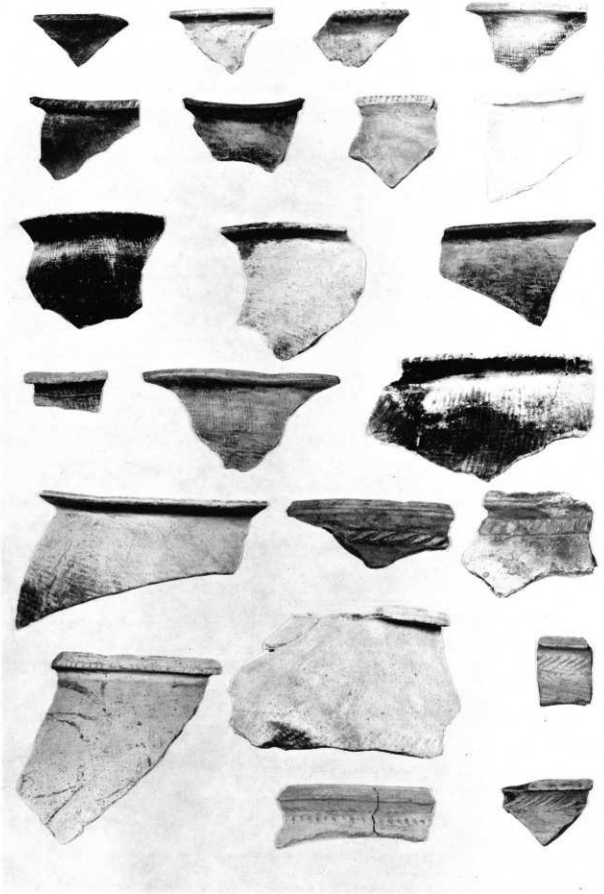
鴨山遺跡出土の土器破片 (5)



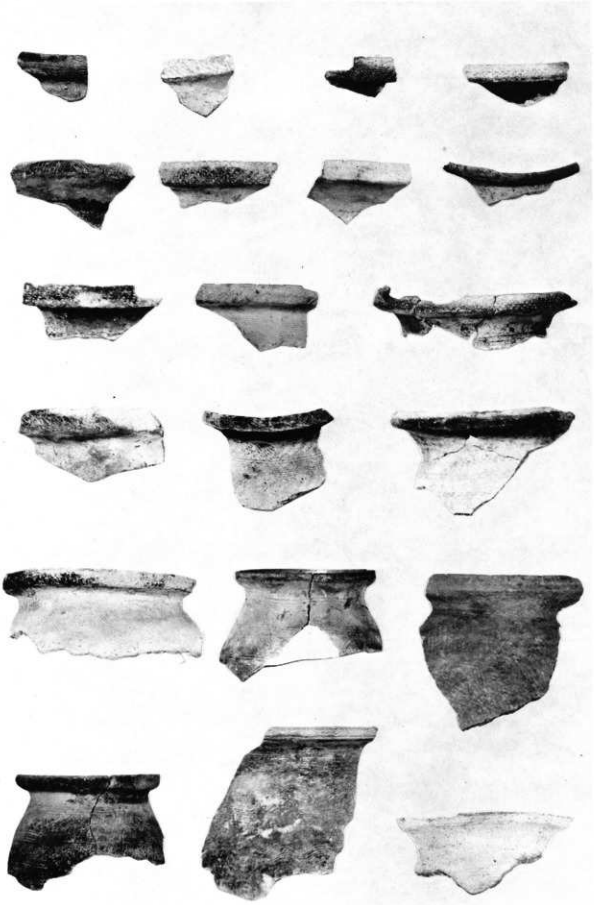
鴨田遺跡出土の土器破片 (6)



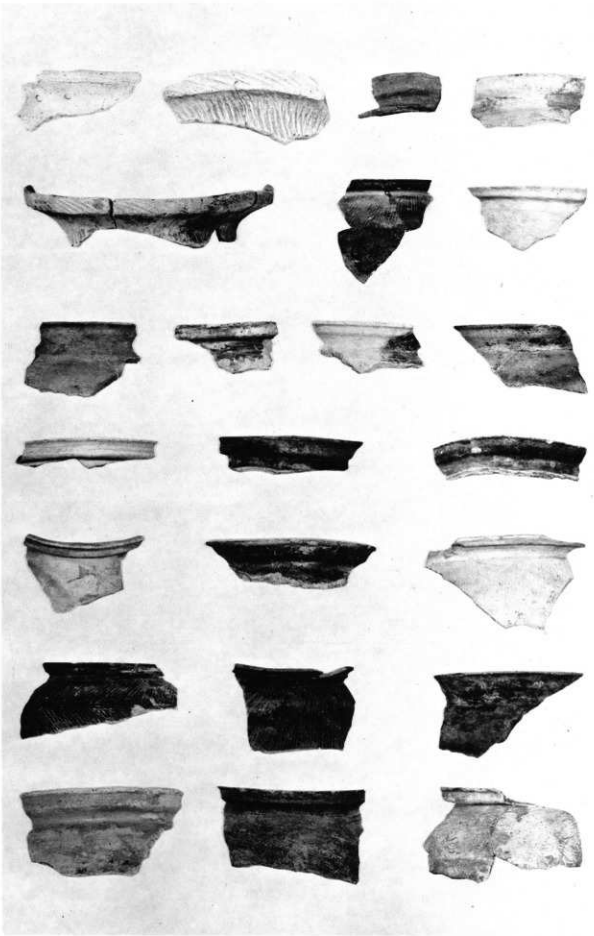
鴨田遺跡出土の土器破片 (7)



鴨田遺跡出土の土器破片（8）



鴨田遺跡出土の土器破片 (9)



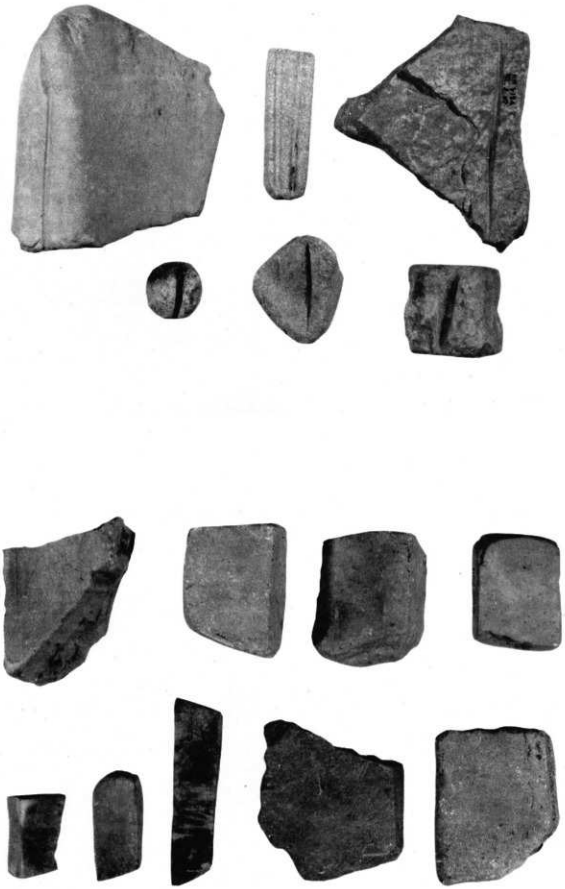
鴨田遺跡出土の土器破片 (1)

鴨田遺跡出土の土器破片 (1)

鴨田遺跡出土の土器破片 (12)

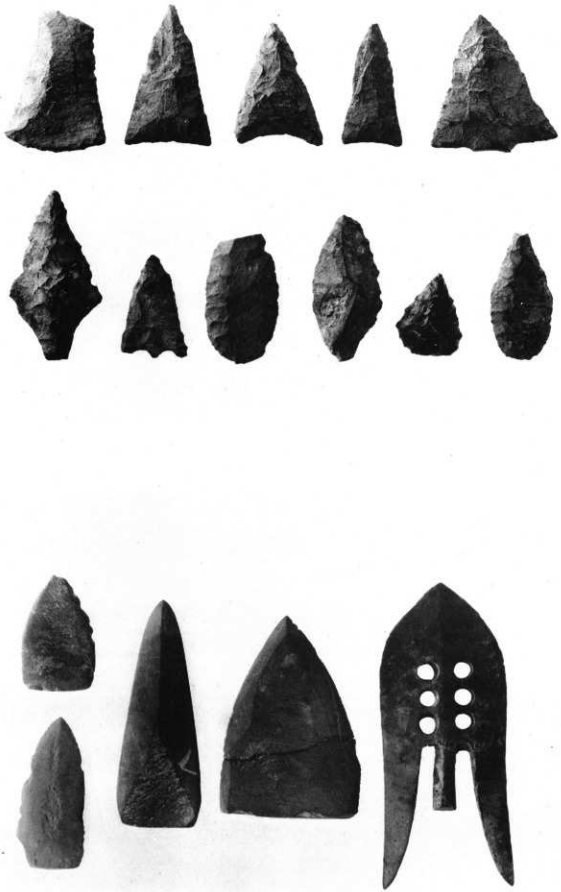
鴨田遺跡出土の土器破片 (13)

鴨田遺跡出土の土器破片 (14)

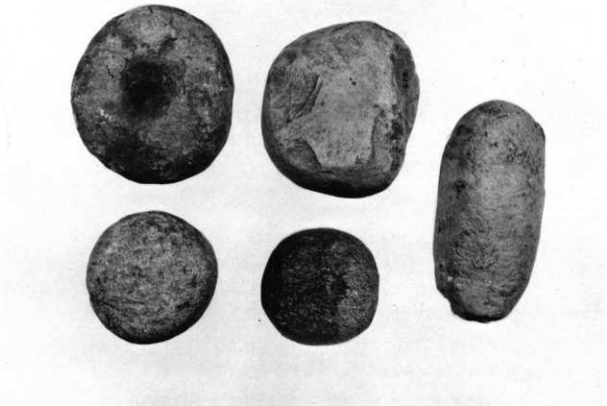


上、鴨田遺跡出土の条痕のある砥石　下、鴨田遺跡出土の砥石類

上・下、鴨田遺跡出土の各種石斧類



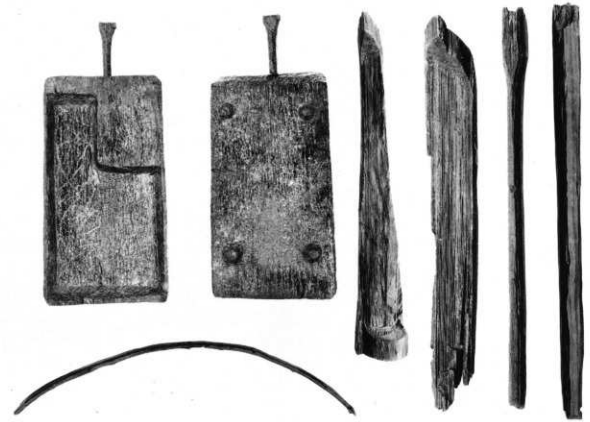
上、鴨田遺跡出土の打製石鏃　下、鴨田遺跡出土の磨製石鏃と銅製鏃



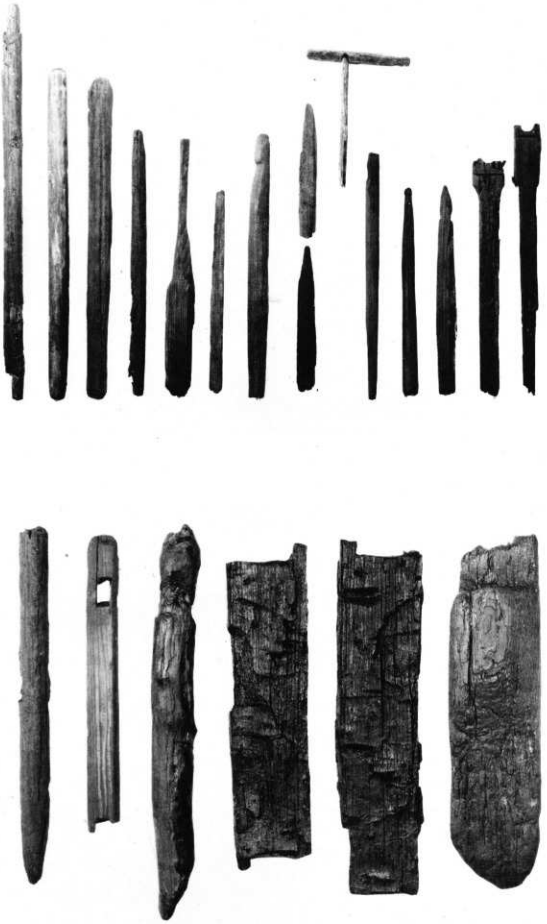
上、鴨田遺跡出土の各種石器類　下、鴨田遺跡出土の凹石と敲石

上、鴨田遺跡出土の木製刀等　下、鴨田遺跡出土の大足、下駄、曲物等

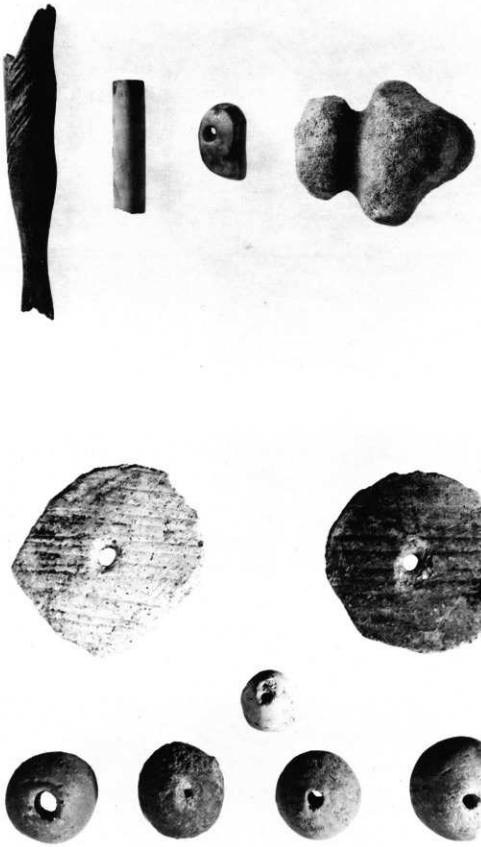
上・下、鴨田遺跡出土の木製品 (1)



上・下、鴨田遺跡出土の木製品 (2)



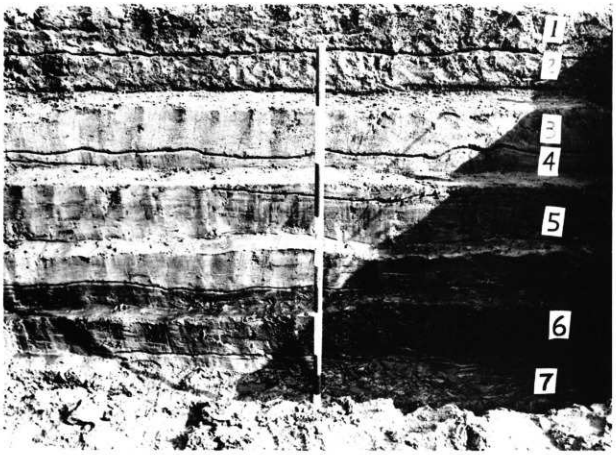
上・下、鴨田遺跡出土の木製品 (3)



上、鴨田遺跡出土の玉類等　下、鴨田遺跡出土の土製紡錘車と丸玉

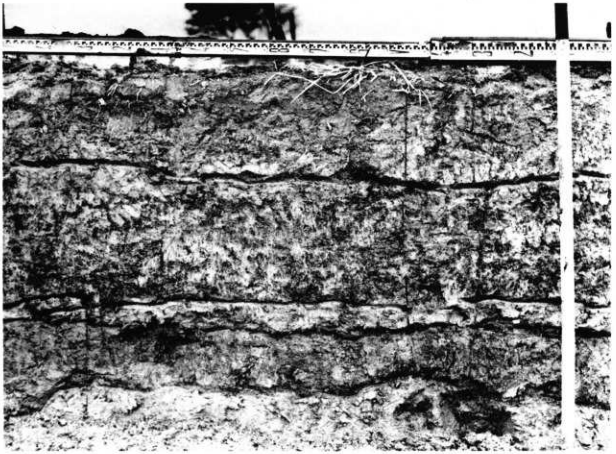
上、鴨田遺跡出土の古銭類　下、鴨田遺跡出土の果実種

上、発掘調査前の川崎南遺跡　下、発掘調査後の川崎南遺跡



上、川崎南遺跡の層位　下、左：川崎南遺跡出土の弥恵器長頸壺
右上：　同鉢
右下：　同大平鉢

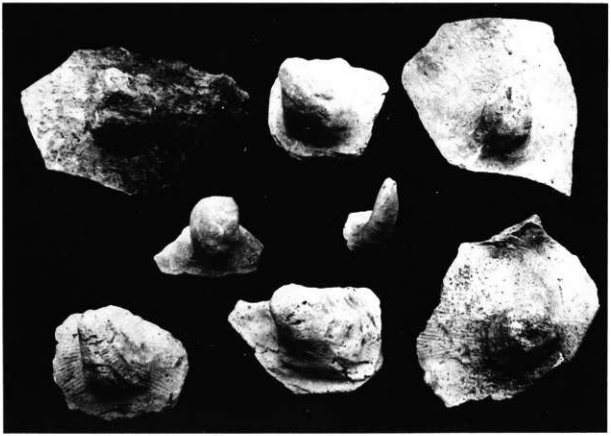
上、発掘後の勝町遺跡　下、勝町遺跡の発掘状況



上、勝町遺跡の層位　下、勝町遺跡における柱穴存部と須恵器甕片群

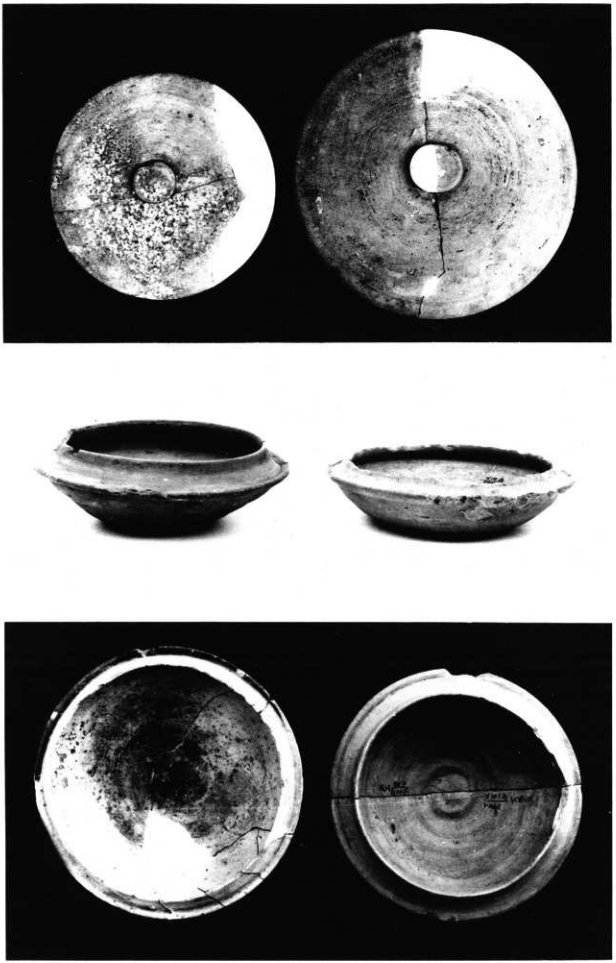
左、勝町遺跡における溝状遺構

右、勝町遺跡における椀・下駄・網漁具柄出土状態

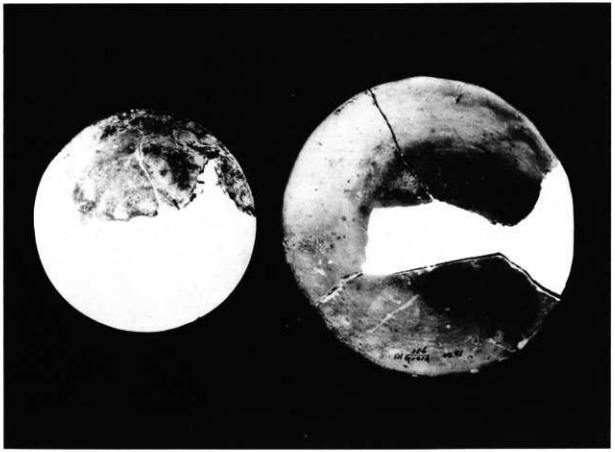


上、勝町遺跡出土の高杯および釜形土器破片　下、勝町遺跡出土の紡把手類

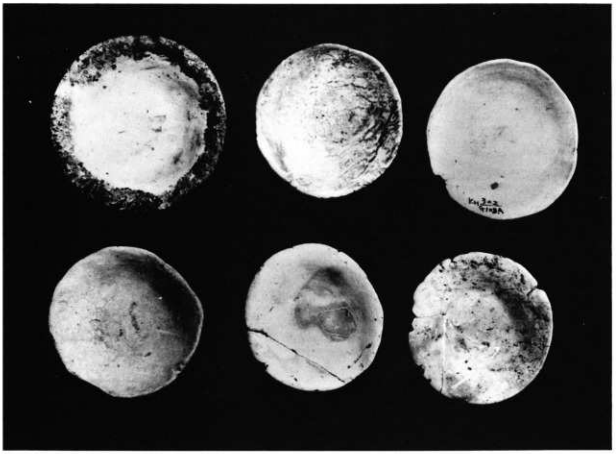
上、勝町遺跡出土のつまみ付杯蓋（側面と平面）　下、勝町遺跡出土の須恵器甕と提瓶

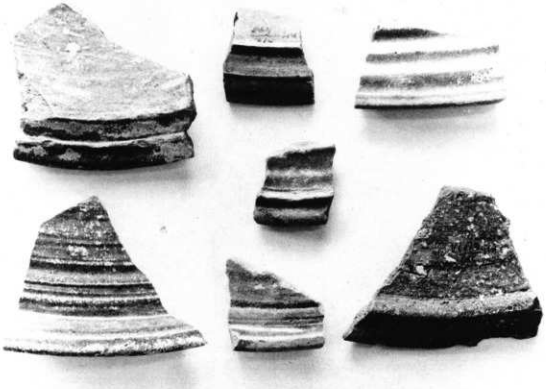


上・中・下、勝町遺跡出土の杯・盖類

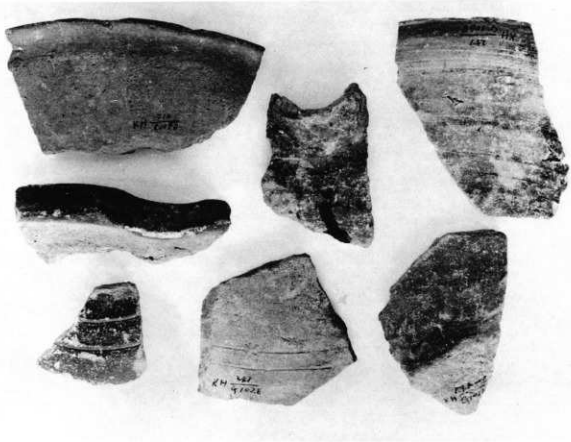


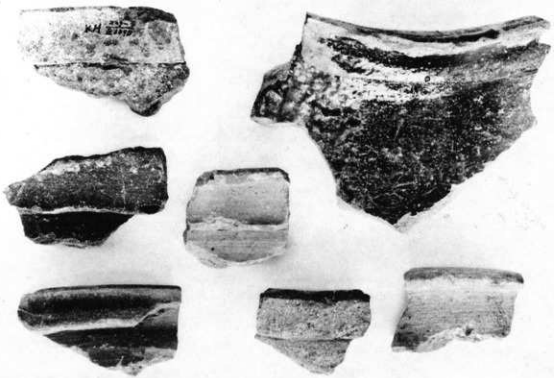
上、勝町遺跡出土の山茶椀高台部　下、勝町遺跡出土のかわらけ



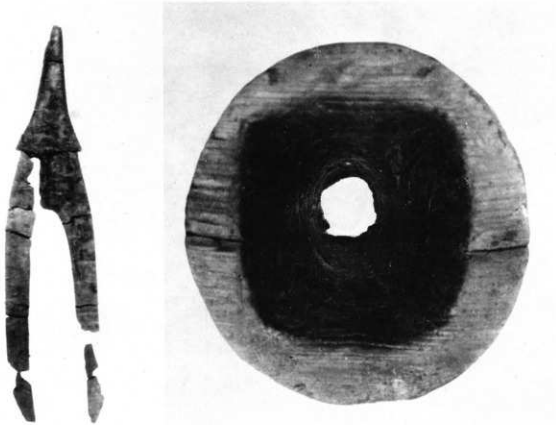


上、勝町遺跡出土のかわらけ　下、勝町遺跡出土の鉢口縁部

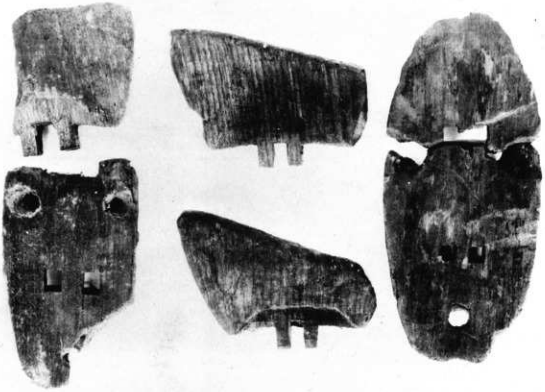




上、勝町遺跡出土の摺鉢及片口鉢片　下、勝町遺跡出土の甕口縁部



上、勝町遺跡出土の古瀬戸系陶器片　下、右：勝町遺跡出土の臼状木製品　左：同農具



上、勝町遺跡出土の田下駄と駒下駄　下、勝町遺跡出土の高下駄

昭和48年3月25日　印刷
昭和48年3月30日　発行

国道8号線長浜バイパス
関連遺跡調査報告書 II

発行　滋賀県教育委員会
大津市京町4丁目1番1号

印刷　ヨシダ印刷株式会社
大阪市北区梅田町27(サンケイビル)
電話　大阪　06(341)9446番